埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第130集

川本町

四反歩遺跡

川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅳ—

1993

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

四反歩遺跡遠景（北から）

縄文時代撚糸文期の住居跡

縄文時代草創期の遺物

縄文時代撚糸文期のスタンプ形石器

序

首都圏に位置する埼玉県では、近年における開発にめざましいものがあります。県の北部に位置する川本町もこの例外ではなく、おしよせる開発の波に対して、地域との調和が望まれているところであります。

周知のごとく、秩父連峰を背に荒川を抱き自然の景観に恵まれた川本町は、鎌倉時代の武将で知られる畠山重忠の本拠地としてつとに有名な場所であるとともに、歴史的遺産である遺跡が多く存在している地域でもあります。

このたび、この地に川本工業団地の造成が実施されることになりましたが、事業地内にも数多くの遺跡が存在しており、その扱いについては埼玉県企業局と埼玉県教育委員会との間で慎重に協議が重ねられてまいりました。

その結果、7ケ所の遺跡について当事業団が埼玉県企業局の委託を受けて発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

本書は平成2年度に調査された四反歩遺跡の報告書であります。四反歩遺跡からは、約9千年前である縄文時代早期初頭の住居跡が8軒発見されました。遺物は約2万点余りの土器や石器が出土しました。また、弥生時代、歴史時代を通じても多くの足跡が残されていました。特に本遺跡の縄文時代早期初頭の撚糸文期の集落遺跡は、規模が大きくほぼ全体像が把握された、県の内外を問わず有数の遺跡であることが明らかになりました。

本書が学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の保護思想の普及・啓蒙及び教育機関の参考資料として、少しでも資するところがあることを望み、広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行にいたるまで多大な御協力を賜りました埼玉県企業局土地開発第二課、同北部土地開発事務所、川本町教育委員会、江南町教育委員会、嵐山町教育委員会、花園町教育委員会ならびに地元関係者各位、発掘・整理作業に携われた方々に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

平成5年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　荒　井　修　二

例　言

1．本書は埼玉県大里郡川本町大字本田字四反歩3,003番地１他に所在する四反歩遺跡の発掘調査報告書である。四反歩遺跡群は当初南遺跡、東遺跡、北遺跡に分割されていたが、調査の結果、性格上一つの遺跡として判断されたため、四反歩遺跡として統合し、それぞれ地区別の遺跡として報告することにした。

四反歩遺跡　南地区　　所在地　埼玉県大里郡川本町大字本田字四反歩3003番地１他
ＳＴＮＢＭ（南遺跡）　平成２年11月15日付　文化庁指示通知　委保第５の1187号
東地区　　所在地　埼玉県大里郡川本町大字本田字四反歩3008番地他
ＳＴＮＢＨ（東遺跡）　平成２年11月15日付　文化庁指示通知　委保第５の1189号
北地区　　所在地　埼玉県大里郡川本町大字本田字四反歩2999番地１他
ＳＴＮＢＫ（北遺跡）　平成２年11月15日付　文化庁指示通知　委保第５の1186号

2．発掘調査は、川本工業団地建設事業に伴うものであり、埼玉県教育局指導部文化財保護課が調整し、埼玉県企業局土地開発第二課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理、報告書作成作業も引き続き、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託し、実施した。

3．発掘調査は金子直行、川口　潤が担当し、平成２年４月１日から平成２年10月31日まで実施した。整理、報告書作成作業は金子が担当し平成４年４月１日から平成５年３月31日まで実施した。なお、発掘調査・整理作業の組織は４ページに示した。

4．出土遺物の実測及び作図は金子が、草創期の石器群を西井幸雄、歴史時代の遺物を岡本健一が担当し、また、遺物のコンピューター処理については宮井英一、西井の協力を得た。

5．写真撮影は発掘調査時の撮影を金子、川口が行い、遺物撮影を金子が行った。

6．本書の執筆はＩ－１を埼玉県教育局文化財保護課が、歴史時代の遺物を岡本が行い、他を金子が担当した。

7．本書の編集は資料部資料整理第１課の金子があたった。

8．本書に掲載した資料は、平成５年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

9．遺跡の基準点測量、航空写真撮影は株式会社パスコ、土器の胎土分析は第四紀地質研究所にそれぞれ委託した。グラビア写真は折原基久氏に依託した。

10．本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。（敬称略）

新井　端　石井　寛　植木　弘　奥野麦生　小林　茂　小林達雄　中島　宏　早川　泉
原田昌幸　村松　篤　森田安彦

凡　例

1．遺跡におけるＸ・Ｙの座標表示は国家標準直角座標を示しており、本遺跡は第Ⅸ系内に位置し、それに基づく座標値を表記している。また、挿図における方位は全て座標北を示している。

2．本書に掲載した挿図内では遺構の名称を次のように表記した。

　　ＳＪ…住居跡　　ＳＫ…土壙　　ＦＰ…炉穴　　ＳＳ…集石土壙

3．本書に掲載した遺構図版の縮尺は、各時代の住居跡・土壙ともに1/60を原則とした。集石土壙は1/30である。また、例外的なものについてはスケールで指示した。

4．グリッドラインは縮尺如何にかかわらず30mメッシュで表示してあり、グリッドの呼称も30mのメッシュを基準に大グリッドで表記した。

5．海抜標高の表示は、遺構の土層断面図及び断面図の水平表示線に表記した。指示のないものについては、同一挿図内にある標高指示と同値であることを示している。

6．遺物の縮尺は以下の通りであり、例外的なものはスケールで指示してある。

　　縄文・弥生土器の拓影図　１／２　　縄文・弥生土器の実測図　１／３・１／４

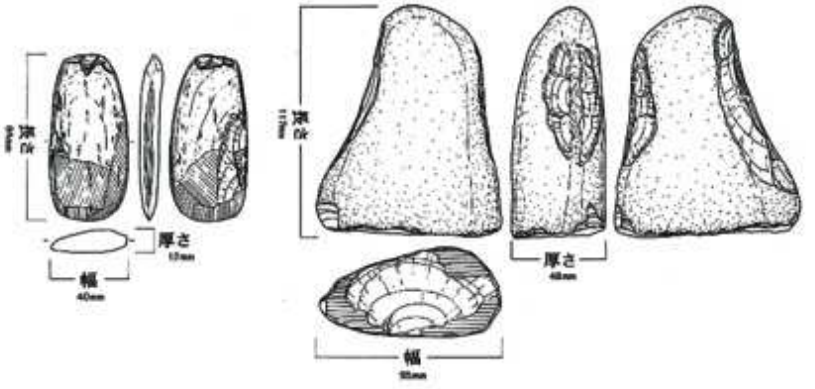
　　石器の実測図　草創期の石器群及び石鏃２／３　小形石器１／２　大形石器１／３

なお、遺物分布図中の遺物の縮尺は不同である。

7．遺構の遺物分布図におけるドットマークは、●は土器を、■は石器を表している。それ例外のものについては、そのつど明示してある。

8．土器拓影図の下部に示した英数文字は、出土した地点の大グリッドを表記したもので、石器は文末に一覧表にして示した。

9．スタンプ形石器実測図の底面にみられる網掛は、使用痕の観察される範囲を示しており、摩滅している部分とは限らない。なお、計測値は以下のように測定した。



10．本報告にあたり、発掘調査時の遺構ナンバー等を尊重したが、縄文時代早期撚糸文期の住居跡のみ、番号を振り替えた。新旧の対応は以下の通りある。

　　ＳＸ１→ＳＪ８　　ＳＸ２・３→ＳＪ９・10　　ＳＸ４→ＳＪ11　　ＳＸ５→ＳＪ12

　　ＳＸ６→ＳＪ13　　ＳＸ７→ＳＪ14　　ＳＸ８→ＳＪ15

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次

Ⅰ．調査の概要……1

1．調査に至るまでの経過……1
2．調査の経過……2
(1) 発掘調査……2
(2) 整理作業……3
(3) 発掘調査及び報告書刊行事業の組織……4

Ⅱ．遺跡の立地と環境……5

Ⅲ．遺跡の概要……11

Ⅳ．四反歩遺跡南地区の調査……13

1．縄文時代の遺構と遺物……13
(1) 草創期の遺物……13
(2) 撚糸文期の遺構と遺物……16
(3) 沈線文期の遺構と遺物……54
(4) 条痕文期の遺構と遺物……56
(5) 前期の遺構と遺物……69
2．弥生時代の遺構と遺物……84
3．時期不詳の遺構……101
4．包含層出土の遺物……103
(1) 出土土器……103
(2) 土製品……163
(3) 出土石器……169

Ⅴ．四反歩遺跡東地区の調査 ……220

1．縄文時代の遺構と遺物……221
2．弥生時代の遺構と遺物……224
3．歴史時代の遺構と遺物……228
4．包含層出土の遺物……241
(1) 出土土器 ……241
(2) 出土石器 ……263

Ⅵ．四反歩遺跡北地区の調査 ……264

1．縄文時代の遺構と遺物……267
2．歴史時代の遺構と遺物……271
3．包含層出土の遺物……282
(1) 出土土器 ……282
(2) 出土石器 ……286

Ⅶ．四反歩遺跡出土土器胎土分析 ……300

1．X線回折試験及び電子顕微鏡観察 ……300
2．土器分類と胎土分析について ……307

Ⅶ．発掘調査の成果と課題 ……311

1．撚糸文系土器群の検討……311
2．夏島式及び稲荷台式土器の細分について ……326
3．撚糸文期の石器群の検討 ……332
4．スタンプ形石器の検討……336
5．奈良時代の土器と集落について ……345

挿図目次

第１図　グリッド呼称図……2
第２図　埼玉県の地形図……5
第３図　周辺の遺跡……6
第４図　遺跡周辺の地形図……8
第５図　遺跡全体図……10
第６図　四反歩遺跡南地区全体図……12
第７図　草創期の遺物(1)……14
第８図　草創期の遺物(2)……15
第９図　撚糸文期の遺構……16
第10図　第８号住居跡……17
第11図　第８号住遺物分布図……18
第12図　第８号住出土土器……19
第13図　第８号住出土石器……19
第14図　第９・10号住居跡……20
第15図　第９・10号住遺物分布図(1)……22
第16図　第９・10号住遺物分布図(2)……23
第17図　第９・10号住遺物分布図(3)……24
第18図　第９・10号住出土土器……25
第19図　第９・10号住出土石器……26
第20図　第９号住Ｐｉｔ出土遺物……27
第21図　第11号住居跡……29
第22図　第11号住出土土器……29
第23図　第11号住遺物分布図……30
第24図　第12号住居跡……31
第25図　第12号住遺物分布図……32
第26図　第12号住出土土器……33
第27図　第12号住出土石器……33
第28図　第13号住居跡……34
第29図　第13号住遺物分布図……35
第30図　第13号住出土土器……36
第31図　第13号住出土石器……36
第32図　第14号住居跡……38
第33図　第14号住遺物分布図……39
第34図　第14号住出土土器……40
第35図　第14号住出土石器(1)……41
第36図　第14号住出土石器(2)……42
第37図　第15号住居跡……43
第38図　第15号住遺物分布図(1)……44
第39図　第15号住遺物分布図(2)……45
第40図　第15号住出土土器(1)……46
第41図　第15号住出土土器(2)……47
第42図　第15号住出土石器(1)……47
第43図　第15号住出土石器(2)……48
第44図　第15号住出土石器(3)……49
第45図　撚糸文期の土壙……51
第46図　撚糸文期土壙出土土器……52
第47図　撚糸文期集石遺構……53
第48図　第１号住居跡……54
第49図　第１号住出土土器……54
第50図　第９号土壙……55
第51図　第９号土壙出土土器……55
第52図　沈線文期の遺構……55
第53図　条痕文期の遺構……56
第54図　条痕文期の炉穴……57
第55図　条痕文期の土壙(1)……58
第56図　条痕文期の土壙(2)……60
第57図　条痕文期の土壙(3)……61
第58図　条痕文期の土壙(4)……62
第59図　条痕文期土壙出土土器実測図……63
第60図　条痕文期炉穴・土壙出土土器(1)……64
第61図　条痕文期土壙出土土器(2)……65
第62図　条痕文期土壙出土土器(3)……66
第63図　縄文時代の土壙出土石器(1)……67
第64図　縄文時代の土壙出土石器(2)……68
第65図　前期の遺構……69
第66図　第５号住居跡……70

第67図　第５号住遺物分布図……71
第68図　第５号住出土土器(1)……72
第69図　第５号住出土土器(2)……73
第70図　第５号住出土石器……74
第71図　第６号住居跡……76
第72図　第６号住遺物分布図……77
第73図　第６号住出土土器……78
第74図　第６号住出土石器……79
第75図　第７号住居跡……81
第76図　第７号住遺物分布図……82
第77図　第７号住出土石器……82
第78図　第７号住出土土器……83
第79図　弥生時代の遺構……84
第80図　第２号住居跡……85
第81図　第２号住出土土器……86
第82図　第３号住居跡……87
第83図　第３号住遺物分布図……88
第84図　第３号住出土土器……88
第85図　第３号住出土石器……89
第86図　第４号住居跡……90
第87図　第４号住遺物分布図……91
第88図　第４号住出土土器(1)……91
第89図　第４号住出土土器(2)……92
第90図　第４号住出土石器……92
第91図　弥生時代の土壙(1)……94
第92図　弥生時代の土壙(2)……96
第93図　弥生時代の土壙(3)……97
第94図　弥生時代土壙出土土器(1)……98
第95図　弥生時代土壙出土土器(2)……98
第96図　時期不詳の土壙 ……100
第97図　遺物分布全体図 ……102
第98図　出土土器全体図 ……104
第99図　撚糸文系土器群口縁部分布図 ……105
第100図　グリッド出土土器(1)……109
第101図　グリッド出土土器(2)……110
第102図　グリッド出土土器(3)……111
第103図　グリッド出土土器(4)……112
第104図　グリッド出土土器(5)……113
第105図　グリッド出土土器(6)……114
第106図　グリッド出土土器(7)……115
第107図　グリッド出土土器(8)……116
第108図　グリッド出土土器(9)……117
第109図　グリッド出土土器(10)……118
第110図　グリッド出土土器(11)……119
第111図　グリッド出土土器(12)……120
第112図　グリッド出土土器(13)……124
第113図　グリッド出土土器(14)……125
第114図　グリッド出土土器(15)……126
第115図　グリッド出土土器(16)……127
第116図　グリッド出土土器(17)……128
第117図　グリッド出土土器(18)……129
第118図　グリッド出土土器(19)……130
第119図　グリッド出土土器(20)……131
第120図　グリッド出土土器(21)……132
第121図　グリッド出土土器(22)……133
第122図　グリッド出土土器(23)……134
第123図　グリッド出土土器(24)……135
第124図　グリッド出土土器(25)……136
第125図　グリッド出土土器(26)……137
第126図　グリッド出土土器(27)……138
第127図　グリッド出土土器(28)……139
第128図　グリッド出土土器(29)……140
第129図　グリッド出土土器(30)……141
第130図　グリッド出土土器(31)……142
第131図　グリッド出土土器(32)……143
第132図　グリッド出土土器(33)……144
第133図　グリッド出土土器(34)……146
第134図　グリッド出土土器(35)……147
第135図　グリッド出土土器(36)……148
第136図　グリッド出土土器(37)……150
第137図　グリッド出土土器(38)……151
第138図　撚糸文系土器群実測図……152

第139図　沈線文・条痕文系土器群分布図…154
第140図　グリッド出土土器(39)……155
第141図　グリッド出土土器(40)……156
第142図　前・中・後期土器群分布図……158
第143図　グリッド出土土器(41)……159
第144図　グリッド出土土器(42)……161
第145図　グリッド出土土器(43)……162
第146図　土製円盤分布図……164
第147図　土製円盤(1)……165
第148図　土製円盤(2)……166
第149図　ミニチュア土器……166
第150図　石器分布全体図……168
第151図　剝片分布図……170
第152図　石鏃・石錐・石槍……171
第153図　掻器(1)……172
第154図　掻器(2)……173
第155図　掻器(3)……174
第156図　掻器(4)……175
第157図　石錘・有溝砥石(1)……176
第158図　有溝砥石(2)……177
第159図　石斧・礫器分布図……179
第160図　磨製石斧(1)……180
第161図　磨製石斧(2)・打製石斧(1)……181
第162図　打製石斧(2)……182
第163図　打製石斧(3)……183
第164図　打製石斧(4)……184
第165図　礫器(1)……186
第166図　礫器(2)……187
第167図　礫器(3)……188
第168図　礫器(4)……189
第169図　礫器(5)……190
第170図　敲石……191
第171図　スタンプ形石器・磨石・
石皿分布図……192
第172図　スタンプ形石器(1)……193
第173図　スタンプ形石器(2)……194
第174図　スタンプ形石器(3)……195
第175図　スタンプ形石器(4)……196
第176図　スタンプ形石器(5)……197
第177図　スタンプ形石器(6)……198
第178図　スタンプ形石器(7)……199
第179図　スタンプ形石器(8)……200
第180図　スタンプ形石器(9)……201
第181図　スタンプ形石器(10)……202
第182図　スタンプ形石器(11)……203
第183図　スタンプ形石器(12)……204
第184図　スタンプ形石器(13)……205
第185図　スタンプ形石器(14)……206
第186図　磨石(1)……207
第187図　磨石(2)……208
第188図　磨石(3)……209
第189図　磨石(4)……210
第190図　磨石(5)……211
第191図　磨石(6)……212
第192図　磨石(7)……213
第193図　磨石(8)……214
第194図　石皿(1)……215
第195図　石皿(2)……216
第196図　石皿(3)……217
第197図　石皿(4)……218
第198図　石皿(5)……219
第199図　四反歩遺跡東地区全体図……220
第200図　第１号住居跡……222
第201図　第１号住出土土器……222
第202図　縄文時代の集石土壙……223
第203図　第４号住居跡……224
第204図　第４号住遺物分布図……225
第205図　第４号住出土土器……226
第206図　第４号住出土石器……227
第207図　第２号住居跡……228
第208図　第２号住遺物分布図……229
第209図　第２号住出土土器……230

第210図　第３号住居跡……231
第211図　第３号住遺物分布図と出土土器…231
第212図　第５・６号住居跡……232
第213図　第５・６号住遺物分布図……233
第214図　第５・６号住出土土器……233
第215図　第７号住居跡……235
第216図　第７号住遺物分布図……235
第217図　第７号住出土土器……236
第218図　第８号住居跡……237
第219図　第８号住遺物分布図……237
第220図　第８号住出土土器……238
第221図　歴史時代の土壙……239
第222図　歴史時代の道跡……240
第223図　グリッド出土土器(1)……242
第224図　グリッド出土土器(2)……243
第225図　グリッド出土土器(3)……244
第226図　グリッド出土土器(4)……245
第227図　グリッド出土土器(5)……246
第228図　グリッド出土土器(6)……247
第229図　グリッド出土土器(7)……248
第230図　グリッド出土土器(8)……249
第231図　グリッド出土土器(9)……250
第232図　グリッド出土土器(10)……251
第233図　グリッド出土土器(11)……252
第234図　グリッド出土土器(12)……253
第235図　グリッド出土石器(1)……257
第236図　グリッド出土石器(2)……258
第237図　グリッド出土石器(3)……259
第238図　グリッド出土石器(4)……260
第239図　グリッド出土石器(5)……261
第240図　グリッド出土石器(6)……262
第241図　四反歩遺跡北地区全体図……264
第242図　第５号住居跡……265
第243図　第５号住遺物分布図……266
第244図　第５号住出土土器……267
第245図　第５号住出土土器実測図……268
第246図　第５号住出土石器……269
第247図　第１号集石土壙……270
第248図　第１号住居跡……271
第249図　第１号住遺物分布図……272
第250図　第１号住出土土器……273
第251図　第２号住居跡……274
第252図　第２号住遺物分布図……275
第253図　第２号住出土土器……276
第254図　第３号住居跡……277
第255図　第３号住遺物分布図と出土土器…277
第256図　第４号住居跡……278
第257図　第４号住遺物分布図……279
第258図　第４号住出土土器(1)……280
第259図　第４号住出土土器(2)……281
第260図　グリッド出土土器(1)……283
第261図　グリッド出土土器(2)……284
第262図　グリッド出土土器(3)……285
第263図　グリッド出土石器(1)……287
第264図　グリッド出土石器(2)……288
第265図　グリッド出土石器(3)……289
第266図　三角・菱型ダイアグラム
位置分類図……301
第267図　三角・菱型ダイアグラム……302
第268図　Ｑｔ・Ｐｌ相関図……304
第269図　他遺跡との分析比較図……305
第270図　群馬県中棚遺跡の分析土器……305
第271図　胎土分析資料……308
第272図　縄文・撚糸文施文土器分布図……318
第273図　条線文・無文・
異方向施文土器分布図……319
第274図　四反歩遺跡土器変遷図(1)……322
第275図　四反歩遺跡土器変遷図(2)……323
第276図　四反歩遺跡土器変遷図(3)……324
第277図　スタンプ形石器形状図(1)……338
第278図　スタンプ形石器形状図(2)……339
第279図　スタンプ形石器の接合例……343

第280図　属性比較分類図……343
第281図　四反歩・竹之花遺跡における土器編年図……347

表目次

第1表　土製円盤一覧表 ……167
第2表　石器一覧表 ……290
第3表　胎土性状表 ……302
第4表　分析土器観察表 ……304
第5表　施文別分類表 ……312
第6表　土器群のグルーピング表 ……315
第7表　石器分類表 ……333
第8表　スタンプ形石器分類表 ……337
第9表　スタンプ形石器石質分類表 ……340
第10表　スタンプ形石器属性別分類表 ……343

写真図版目次

四反歩遺跡南地区
図版1　四反歩遺跡全景（東から）
　　四反歩遺跡全景（北から）
図版2　第8号住居跡
　　第8号住遺物出土状態
図版3　第9号住居跡
　　第10号住居跡
図版4　第9号住遺物出土状態
　　第9・10号住周辺の遺物出土状態
図版5　第11号住居跡
　　第11号住遺物出土状態
図版6　第12号住居跡
　　第12号住遺物出土状態
図版7　第13号住居跡
　　第14号住居跡（南西から）
図版8　第14号住居跡（南東から）
　　第14号住遺物出土状態
図版9　第15号住居跡
　　第15号住遺物出土状態
図版10　F2J1区遺物出土状態近景
　　F2J1区遺物出土状態遠景
図版11　第1号集石遺構
　　第2号集石遺構
図版12　第3号集石遺構
　　第4号集石遺構
図版13　縄文時代の土壙
図版14　第1号住居跡
　　第5号住居跡（南東から）
図版15　第5号住居跡（北東から）
　　第5号住炉体土器
図版16　第6号住居跡
　　第7号住居跡
図版17　第2号住居跡
　　第3号住居跡（北東から）
図版18　第3号住居跡（南東から）
　　第3号住遺物出土状態
図版19　第4号住居跡
　　第4号住遺物出土状態
図版20　弥生時代の土壙
図版21　第8号住出土遺物
　　第9・10号住出土土器
図版22　第9号住Pit出土遺物
　　第9・10号住出土石器
図版23　第11号住出土土器
　　第12号住出土土器
図版24　第13号住出土土器

第14号住出土土器
図版25　第14号住出土石器
第14号住出土石器
図版26　第15号住出土土器
第15号住出土土器
図版27　第15号住出土石器
第15号住出土石器
図版28　撚糸文期土壙出土土器
第24号土壙出土土器
図版29　第26号土壙出土土器
第37号・第38号土壙出土土器
図版30　第５号住出土土器
第５号住出土土器
図版31　第５号住出土石器
第６号住出土土器
図版32　第６号住出土土器
第６号住出土石器
図版33　第７号住出土土器
第７号住出土石器
図版34　縄文時代前期の住居跡出土土器
図版35　弥生時代の住居跡出土遺物
図版36　弥生時代の遺構出土遺物
図版37　グリッド出土土器(1)
図版38　グリッド出土土器(2)
図版39　グリッド出土土器(3)
図版40　グリッド出土土器(4)
図版41　グリッド出土土器(5)
図版42　グリッド出土土器(6)
図版43　グリッド出土土器(7)
図版44　グリッド出土土器(8)
図版45　グリッド出土土器(9)
図版46　グリッド出土土器(10)
図版47　グリッド出土土器(11)
図版48　グリッド出土土器(12)
図版49　グリッド出土土器(13)
図版50　グリッド出土土器(14)
図版51　グリッド出土土器(15)
図版52　グリッド出土土器(16)
図版53　グリッド出土土器(17)
図版54　グリッド出土土器(18)
図版55　グリッド出土土器(19)
図版56　グリッド出土土器(20)
図版57　グリッド出土土器(21)
図版58　グリッド出土土器(22)
図版59　グリッド出土土器(23)
図版60　グリッド出土土器(24)
図版61　グリッド出土土器(25)
図版62　土製円盤
図版63　グリッド出土石器(1)
図版64　グリッド出土石器(2)
図版65　グリッド出土石器(3)
図版66　グリッド出土石器(4)
図版67　グリッド出土石器(5)
図版68　グリッド出土石器(6)
図版69　グリッド出土石器(7)
図版70　グリッド出土石器(8)
図版71　グリッド出土石器(9)
図版72　グリッド出土石器(10)
図版73　グリッド出土石器(11)
図版74　グリッド出土石器(12)
図版75　グリッド出土石器(13)

四反歩遺跡東地区

図版76　第１号住居跡
第２号住居跡
図版77　第２号住遺物出土状態
第３号住居跡
図版78　第４号住居跡
第４号住遺物出土状態
図版79　第５・６号住居跡
第５・６号住遺物出土状態
図版80　第７号住居跡
第７号住遺物出土状態

図版81　第８号住居跡
　　第８号住遺物出土状態
図版82　道跡
　　集石土壙・土壙
図版83　住居跡出土遺物(1)
図版84　住居跡出土遺物(2)
図版85　住居跡出土遺物(3)
図版86　住居跡出土遺物(4)
図版87　グリッド出土土器(1)
図版88　グリッド出土土器(2)
図版89　グリッド出土土器(3)
図版90　グリッド出土土器(4)
図版91　グリッド出土石器

四反歩遺跡北地区

図版92　第５号住居跡
　　第５号住炉跡
図版93　第１号住居跡
　　第２号住居跡
図版94　第３号住居跡
　　第４号住居跡
図版95　第５号住炉体土器
　　第５号住出土石器
図版96　住居跡出土土器(1)
図版97　住居跡出土土器(2)
図版98　住居跡出土土器(3)
図版99　グリッド出土土器
図版100　グリッド出土石器

Ⅰ．調査の概要

1．調査に至るまでの経過

埼玉県では生活環境の整備と県土に合った土地利用計画を進めるため、各種の施策を実施している。その一環として県企業局では工場誘致と適切な工場配置を行うため、大里郡川本町に川本工業団地の造成を計画した。県教育局文化財保護課ではこのような開発事業に対応するため、開発関係部局と事前協議を行い、文化財の保護について遺漏の無いよう調整を進めてきた。

同工業団地の造成計画にあたり、昭和61年12月15日付け企局造第1257号で県企業局宅地造成課長から教育局文化財保護課長あて「川本工業団地造成事業地内における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて」照会があった。しかし、この時点では環境アセスメントが終了していなかったので所在確認調査は実施できなかったが、川本町教育委員会の協力を得て現地調査を実施した結果、三ヶ所の遺物散布地が確認された。

この結果をふまえ、県企業局と文化財保護課の間でその保存について協議を重ねたが、事業計画を変更することは不可能との結論に達した。しかし、周知されている埋蔵文化財包蔵地の範囲確認及び所在確認調査は不可避であり、環境アセスメント終了後実施することを相互確認した。

この結果をふまえ、昭和62年３月30日付け教文第1257号をもって文化財保護課長から埼玉県企業局公営企業管理者あて次のように通知した。

1　川本工業団地造成予定地内に所在する円阿弥遺跡ほか２遺跡の埋蔵文化財包蔵地の調査は、昭和62年度の後半に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施する。

2　発掘調査の実施にあたっては、事前に文化財保護法第57条の３第１項の規定により、文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査に関する届け出をすること。

昭和62年７月に10日間にわたる所在及び確認調査を実施した。その結果、縄文時代から奈良・平安時代にわたる埋蔵文化財包蔵地５ヶ所を確認した。

文化財保護課では、現地踏査、所在及び確認調査の結果を検討し、県企業局宅地造成課長あて、次のように回答した。

1　工業団地造成予定地内には、円阿弥遺跡、竹之花遺跡、白草遺跡、下大塚、四反歩(北・東・南地区）遺跡が所在する。

2　上記の埋蔵文化財包蔵地にかかる造成計画の変更が不可能な場合には、記録保存のための発掘調査を実施すること。

3　発掘調査の実施にあたっては文化財保護課と協議すること。

その後発掘調査の実施について協議した結果、昭和62年９月16日付けで県企業局と埼玉県埋蔵文化財調査事業団との間に発掘調査に関する委託契約書が締結された。発掘調査は昭和62年９月、竹之花遺跡の調査から開始され、昭和63年度から平成２年度へと引き継がれた。また、昭和62年11月27日付け委保第５―1733号をもって文化庁から埋蔵文化財発掘調査の届けに対する通知があった。

2．調査の経過

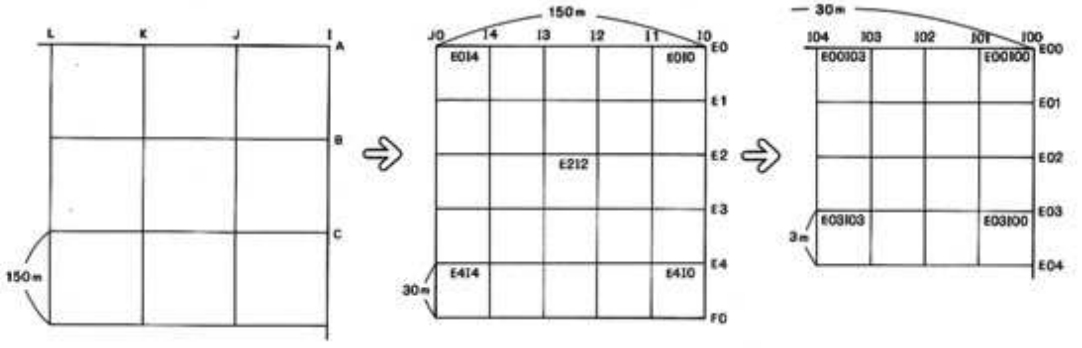
(1) 発掘調査

調査の方法　川本工業団地内における遺跡群の発掘調査の方法とその経過については、当事業団報告書第105集の川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書―Ⅰ―に詳述されているので、そちらに譲りたい。ここでは、川本工業団地内遺跡群の中で最後の調査であった四反歩遺跡について、報告を行うことにする。

ここで、調査に先だって設定されたグリッドについて説明したい。川本工業団地内遺跡群は範囲が東西約900m、南北約1000mという広範な地域内に存在するため、これらを取り囲む基準の設定が必要であった。そのため、この範囲に国家座標第Ⅸ系の座標に沿って1辺150mの大グリットを設定した。そして、グリットの基準ラインに南北方向は北からアルファベットの大文字A～H、東西方向は東からⅠ～Oという名称を与え、両者の組み合せで大グリッドを表記した。次に、150mの大グリッド内を30m毎に分割し、25の中グリッドを設定した。この中グリッドの表記はA２Ⅰ２という様に2桁の数字の最初に表現した。さらに、中グリッドの中を3m毎に分割し、100の小グリッドを設定して、2桁の数字の後に表記した。従って、グリッドは分割ラインに名称を与えているため、ラインの名称に挟まれた範囲内を6桁の英数字で表記してあることになる。

四反歩遺跡はこれらのグリッドの中で、南北方向E～G、東西方向Ⅰ～Jの範囲に位置する。調査の進行に合わせて、包含層遺物は北地区、東地区は小グリッド単位で取り上げており、南地区に関しては全点ドット処理を原則としている。本報告における遺物の表記は、南地区に関して大グリッド単位で表記してある。つまり、F２J２といったアルファベットと1桁の数字の組み合せによる4桁の英数字で表記した。

発掘経過　発掘調査はこのグリッドを基本として、北地点、東地点、南地点の順に行った。第一次調査と表土除去は平成元年度に行っており、平成2年4月から本調査を開始した。以下、経過を述べる。



第1図　グリッド呼称図

4月　初旬より北地区から発掘調査を開始する。中旬まで遺構確認を行い、調査区北側より遺構番号を順次付け、掘り始める。奈良時代の住居跡である1～4号住居跡、縄文時代の後期の住居跡である5号住居跡の全てについて、調査を開始する。また、南地区の包含層遺物を、全点ドット処理でとりあげを開始する。

5月　中旬までに北地区の遺構を掘り終え、遺構の実測図とりを始める。遺構を掘り終えてから、東区の遺構確認を行い、掘り始める。縄文時代の前期の1号住居跡、弥生時代から奈良時代の2～8号住居跡を掘り始める。南地区では包含層の遺物とりあげを継続する。

6月　遺構図面を完了させ、北地区の調査を全て終了する。東地区では、遺構掘りを継続し、南地区では包含層の遺物とりあげを継続する。

7月　初旬に東地区の遺構掘りを終了し、中旬に図面とりを開始する。南地区では、包含層の遺物とりあげを継続するとともに、一部確認調査を開始し、縄文時代撚糸文期の第8～12号住居跡を掘り始める。

8月　東地区の調査を全て終了し、南地区を調査の主体とする。包含層遺物とりあげを継続しながらも、更に遺構確認を進め、縄文時代の第1号住居跡、第5～7号住居跡、弥生時代の第2～4号住居跡を掘り始める。

9月　調査を始めていた遺構を順次終了させ、道を隔てた南側の調査区の遺構確認を開始し、第13～15号住居跡を掘り始める。縄文時代の撚糸文期の住居跡が集中しているＦ１Ｊ１区を更に精査して包含層遺物をとりあげ、条痕文期の炉穴と土壙を掘り始める。

10月　初旬までには全ての遺構を掘り終え、中旬までに図面作成を終了させる。その後、遺跡全面の清掃を行い、航空撮影を行って、無事発掘調査を終了する。

(2)　整理作業

報告書刊行作業は平成4年4月から開始して、平成5年3月で終了した。整理作業は遺物班と図面班に分かれて開始した。先ず、遺物班は4月～6月にかけて土器石器の接合を地区毎と遺構毎に分けて行い、7月と8月に土器の復元を行った。その間、図面班は原図の整理と第二原図の作成を行い、7月には遺構のトレースを終了し、版組みをほぼ完了した。

8月～9月は遺物の分類を行い、土器片の拓本取りと裏打ち、断面取りを中心にして行った。また、一部石器の実測も開始し、遺構図版は不備な点を修正しながら完成させた。

10月～12月は拓本の図版作りと、石器の実測に力を注いだ。土器の実測とトレース、図版組、拓本図の作成は11月にほぼ完了し、石器は11月に実測を完了させる。12月は石器のトレースと版組を終了させる。それらと併行して、本文の割り付けを行い、執筆を開始した。

1月に全ての原稿執筆を終了させ、報告書の印刷に入り、3月末に印刷を完了して報告書を刊行した。

(3) 発掘調査及び報告書刊行事業の組織

a．発掘調査（平成２年度）

理事長	荒井　修二
副理事長	早川　智明
常務理事兼管理部長	古市　芳之
理事兼調査部長	吉川　國男
庶務・経理	
庶務課長	高田　弘義
主査	松本　　晋
主事	長滝美智子
経理課長	関野　栄一
主任	江田　和美
主事	本庄　朗人
主事	菊池　　久
主事	斉藤　勝秀
発掘調査	
理事兼調査部長	吉川　國男
調査部副部長	塩野　　博
調査第４課長	鈴木　敏昭
主任調査員	金子　直行
調査員	川口　　潤

b．報告書作成作業（平成４年度）

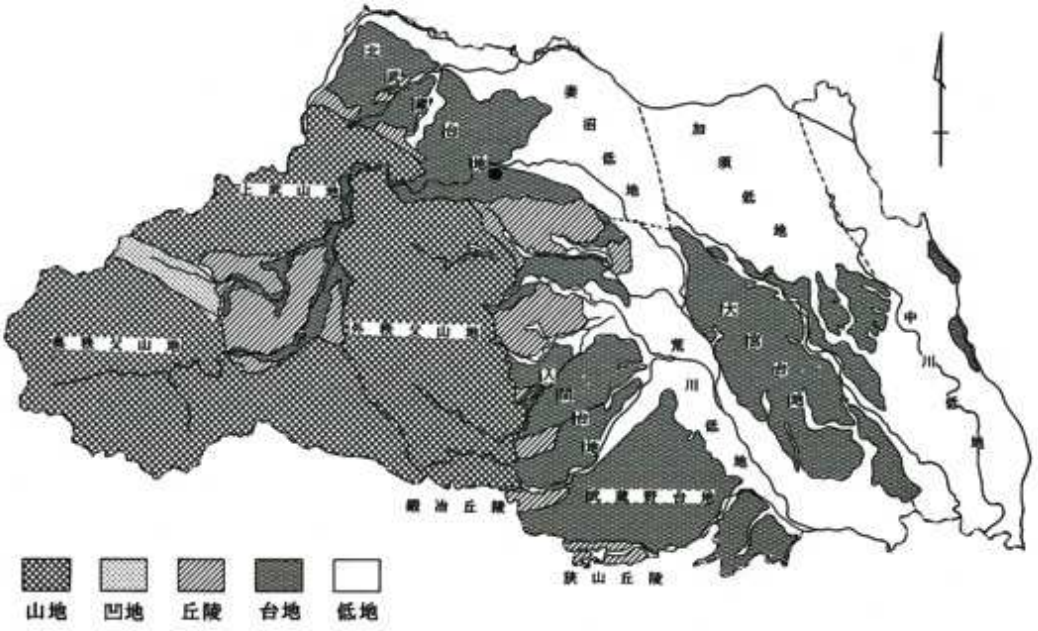
理事長	荒井　修二
副理事長	早川　智明
常務理事兼管理部長	倉持　悦夫
理事兼調査部長	栗原　文蔵
庶務・経理	
庶務課長	萩原　和夫
主査	贄田　　清
主事	菊池　　久
経理課長	関野　栄一
主任	江田　和美
主事	長滝美智子
主事	福田　昭美
主事	腰塚　雄二
整理	
資料部長	中島　利治
資料部副部長兼	
資料整理第１課長	増田　逸朗
主任調査員	金子　直行

II．遺跡の立地と環境

埼玉県のほぼ中央部を流れる荒川は雲取山に端を発し、狭隘な山間部を経て秩父盆地を貫流しながら北流し、さらに長瀞町付近で東へと流路を変更する。その後、山地部を経て、四反歩遺跡の存在する川本町付近で幾重もの河岸段丘を形成して台地と出会い、幾つもの大小河川を合流し、台地を侵食しながら下流に広範な沖積低地を形成しつつ、東京湾へと流れ込む。

川本町付近で荒川は東西方向に流れ川幅を増しており、四反歩遺跡はこの荒川右岸の江南台地のやや奥まった小支谷の左岸に存在する。遺跡の西側には吉野川が北東方向に流れるが、遺跡付近で北流し荒川へと流れ込んでいる。遺跡は吉野川と荒川の合流点から1.8km程南に位置し、吉野川へと開く小支谷の奥まった舌状台地上に存在する。周辺は樹枝状に入り組んだ浅い谷が開析されており、遺跡はその中でも南東に張り出した標高70m前後を測る舌状台地上に立地している。谷部からの比高差は約5m前後を測る。台地には南側、東側、北側からそれぞれ小さな谷が湾入し、遺跡は南地区、東地区、北地区に分割されている。

遺跡は、大里郡川本町大字本田字四反歩3003―1他に所在する。荒川右岸の川本町本田地区は遺跡が比較的多く、山林となっている地域でも未検出の遺跡が多く存在している。川本工業団地予定地内でも、新たに5箇所の遺跡が発見され、調査の結果旧石器時代から奈良時代の遺構遺物が検出されている。それぞれ報告書が刊行されているものもあることから、詳細はそちらに譲り、ここで



第2図　埼玉県の地形図

第3図　周辺の遺跡

川本町

1．四反歩遺跡　6．権現堂北遺跡　11．上本田遺跡

2．竹ノ花遺跡　7．権現堂遺跡　12．焼谷遺跡

3．白草遺跡　8．万願寺遺跡　13．春ヶ丘遺跡

4．北篠場北遺跡　9．船山遺跡　14．沢口遺跡

5．円阿弥遺跡　10．山ノ腰遺跡

江南町

15．荒神脇遺跡　20．宮脇遺跡　25．南方遺跡　30．塩前遺跡

16．天神山遺跡　21．萩山南遺跡　26．本田・東台遺跡　31．板井永川遺跡

17．向原遺跡　22．上前原遺跡　27．切久保遺跡　32．金山遺跡

18．鹿島遺跡　23．東原遺跡　28．宝光寺北裏遺跡　33．蛯ヶ沢遺跡

19．久保遺跡　24．押出遺跡　29．塩西遺跡

嵐山町
34. 上耕地遺跡
35. 神山遺跡
36. 宮下遺跡
37. 日丸遺跡

寄居町
38. 庚申塚遺跡

花園町
39. 台耕地遺跡
40. 宮台遺跡Ⅰ
41. 宮台遺跡Ⅱ
42. 下南原遺跡
43. 西上遺跡
44. 宮林遺跡

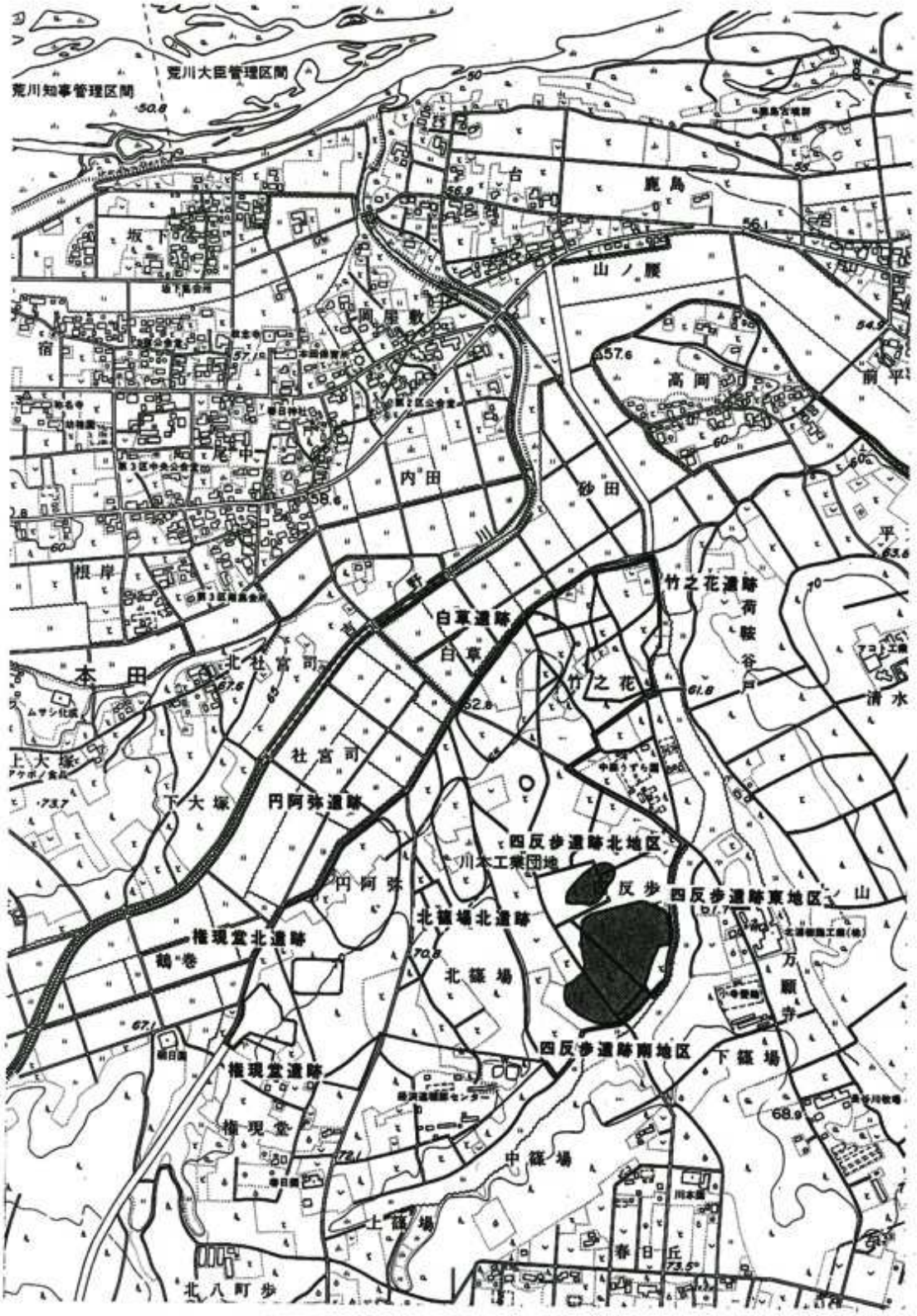
熊谷市
45. 三ヶ尻林遺跡
46. 三ヶ尻遺跡
47. 万吉西浦遺跡
48. 万吉下原遺跡

では川本町周辺における縄文時代早期を中心とした歴史的な環境についてまとめてみたい。

四反歩遺跡からは旧石器時代の遺物は検出されていないが、縄文時代では草創期の石器群と、若干の土器が出土している。早期では遺跡の主体となる撚糸文期の集落が検出されており、他に沈線文期、条痕文期、前期の遺構が若干ではあるが存在している。

四反歩遺跡の周辺で草創期の遺跡は、花園町の宮林遺跡（44）が著名である。宮林遺跡からは爪形文系土器群と多縄文系土器群が竪穴住居跡から出土しており、草創期の多数の遺物が検出されている。なかには表裏縄文土器も含まれており、その編年的位置も検討の要素を多く含むが、四反歩遺跡からも表裏縄文土器が出土している。また、四反歩遺跡からは卓越した技術で製作された、草創期の石槍群が検出されており、東京都秋川市前田耕地遺跡から出土した石器群に近似した石器様相をもっている。今後、それらの草創期石槍群との比較検討の上からも、四反歩遺跡は貴重な遺跡になるものと思われる。

早期の撚糸文期の遺跡は近年発見例が増えつつあり、住居跡を検出した遺跡は先の宮林遺跡、江南町の立正大学熊谷校地内遺跡（18）等が挙げられる。宮林遺跡では夏島式期の竪穴式住居跡が1



第4図　遺跡周辺の地形図

軒、立正大学熊谷校地内遺跡では夏島式から稲荷台式期の３軒の住居跡が検出されている。

川本工業団地内遺跡では四反歩遺跡以外において、殆ど撚糸文土器を検出していない。そのため、四反歩遺跡が純粋に独立した遺跡であり、集落の存在や多量の出土遺物を考慮すると、撚糸文系土器群の各期を通じて拠点的な遺跡であったことが理解される。

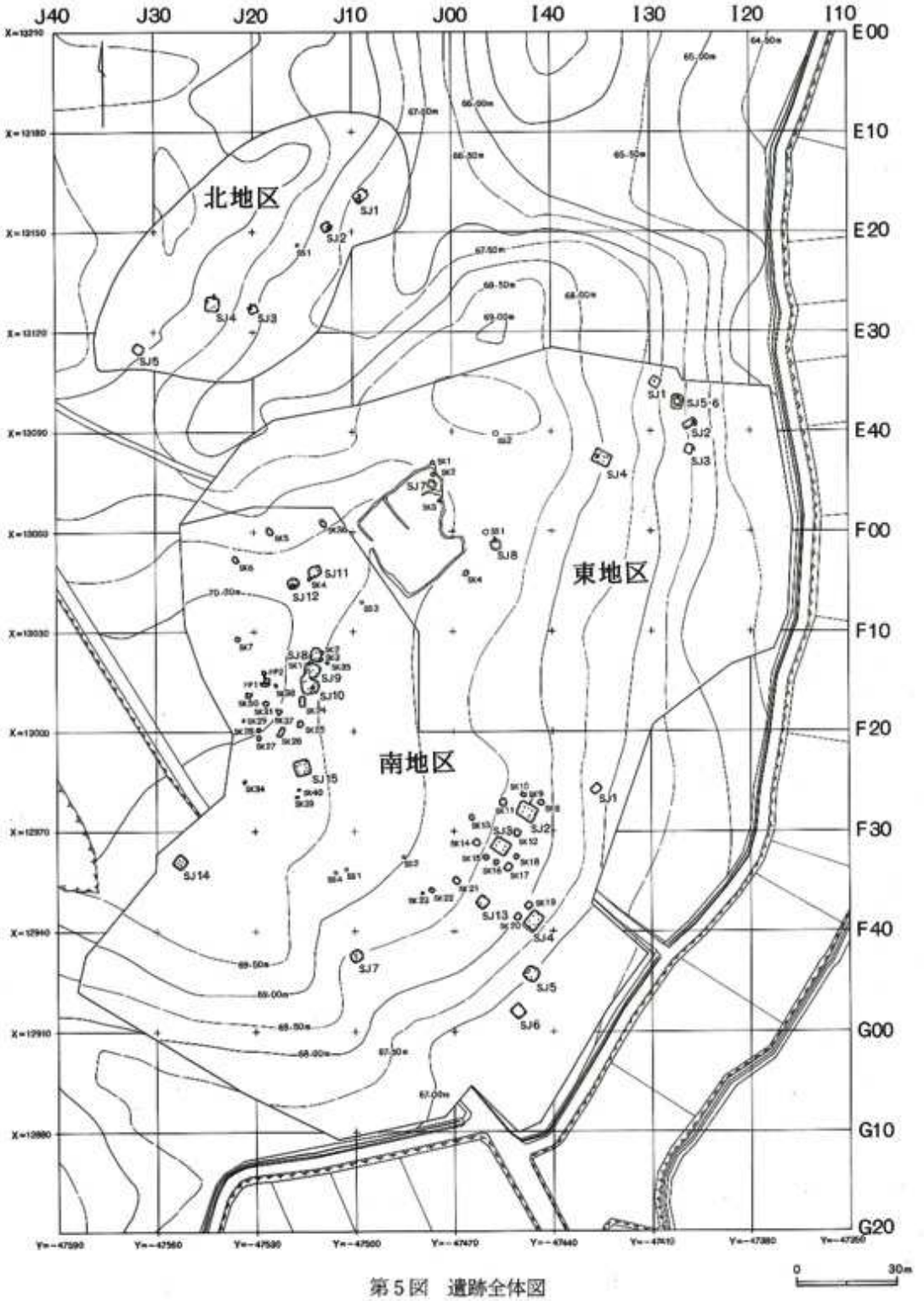
近隣で遺構は検出されないものの撚糸文土器を出土する遺跡は、井草式では宮林遺跡、熊谷市万吉下原遺跡（48）があり、井草Ⅰ・Ⅱ式を含む良好な土器群が検出されている。また、四反歩遺跡の対岸に存在する万願寺遺跡（８）でも採集資料ではあるが、井草式から稲荷台式の大形破片が出土している。遺跡の北方約1.5kmの所に、縄文時代各時期の遺物を出土した船山遺跡（９）が存在するが、撚糸文系土器の出土は極僅かである。川本工業団地関連遺跡の権現堂北遺跡（６）、焼谷遺跡（12）で、若干の夏島式、稲荷台式の撚糸文系土器群が出土している。しかし、撚糸文系土器群を主体とする遺跡はない。江南町の本田・東台遺跡（26）、上前原遺跡（22）からも良好な撚糸文系土器群を中心とした早期の土器群が出土している。撚糸文系土器群最終末の東山式土器は宮林遺跡でやや纏まって出土している以外、殆ど出土例が無く、隣接する白草遺跡（３）で２、３点出土している程度である。

条痕文期は遺跡例を増し、撚糸文系土器群を出土する遺跡では殆どの遺跡で条痕文系土器群が出土している。白草遺跡では炉穴・土壙が環状に配置された遺構群が２グループ検出され、四反歩遺跡でも同様な遺構が１グループ検出されている。特徴的な遺構だけに、今後注目されるものとなろう。条痕文期の良好な遺跡として船山遺跡が挙げられ、早期末葉から前期初頭の良好な土器群が出土している。

前期になると集落遺跡が目立ち、この地域では黒浜式期では山間丘陵部を中心に遺跡が展開され諸磯式期になってやや台地を下る傾向にある。荒川の対岸である櫛引台地南縁には大きな集落遺跡が存在するとともに、江南台地北縁では本遺跡や円阿弥遺跡(5)に代表されるような小さな集落が点在している。川本町、江南町付近では早期の遺跡は江南台地北縁地域に多く、前期、中期の大集落は櫛引台地の南縁に多いことが特徴的である。今後、発掘調査例の増加にともなって、地域間における細かな遺跡動態が把握され、縄文期のテリトリー問題を解決する良好な資料を提供する地域になるものと期待される。

〔参考文献〕

利根川章彦　1991「竹之花・下大塚・円阿弥遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第105集
磯崎　一　1992「白草遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第118集
村松　篤　1991「焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡」川本町発掘調査報告書第５集
小林　茂他　1989「川本町万願寺出土の遺物」埼玉考古第25号
新井　端他　1988「本田・東台・上前原」江南町文化財調査報告第８集
宮井　英一　1985「大林Ⅰ・Ⅱ・宮林・下南原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
谷井　彪他　1980「船山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告第９集


J40
J30
J20
J10
J00
I40
I30
I20
I10
E00
E10
E20
E30
E40
F00
F10
F20
F30
F40
G00
G10
G20
北地区
東地区
南地区
0
30m

第5図　遺跡全体図

III．遺跡の概要

四反歩遺跡は当初3箇所の遺物散布地が確認されており、それぞれ南・東・北の遺跡名が仮称として付けられていた。しかし、表土除去後の遺構確認の結果、それぞれの遺跡は有機的に関連しており、特に南遺跡と東遺跡は境界が不明瞭で、それぞれを単独の遺跡として扱うに不都合をきたしてきた。調査はそれぞれの遺跡単位で行ってきたが、本報告を刊行するにあたりそれぞれを関連する一つの遺跡群と捉え、単独の遺跡としてではなく、纏まりのある地区として把握した。

四反歩遺跡は大里郡川本町大字本田字四反歩3003―1他に所在し、総面積約3万㎡余りで、南地区が1万㎡、東地区が1万6千㎡、北地区が4千5百㎡である。台地は南東に張り出した舌状台地上にあり、北地区と南地区の間に北から、南地区と東地区との間に東から、南地区の境が南から湾入する浅い谷で区画され、基部を同じくして「楓」状に先端部が分岐する台地の形状を呈する。基本的な層序は第6図に示したごとく、Ⅰ層表土、Ⅱ層暗褐色土、Ⅲ層黄褐色土でソフト化したローム、Ⅳ層明褐色土で硬質のローム、Ⅴ層軟質のロームでＡＴがピークとなる層、Ⅵ層暗茶褐色土で非常に硬く締まったロームとなる。

南地区　東地区との境界が不明瞭であるが、中央部に入り込む浅い谷によって両者を分けた。南地区では縄文時代から弥生時代の遺構が検出された。

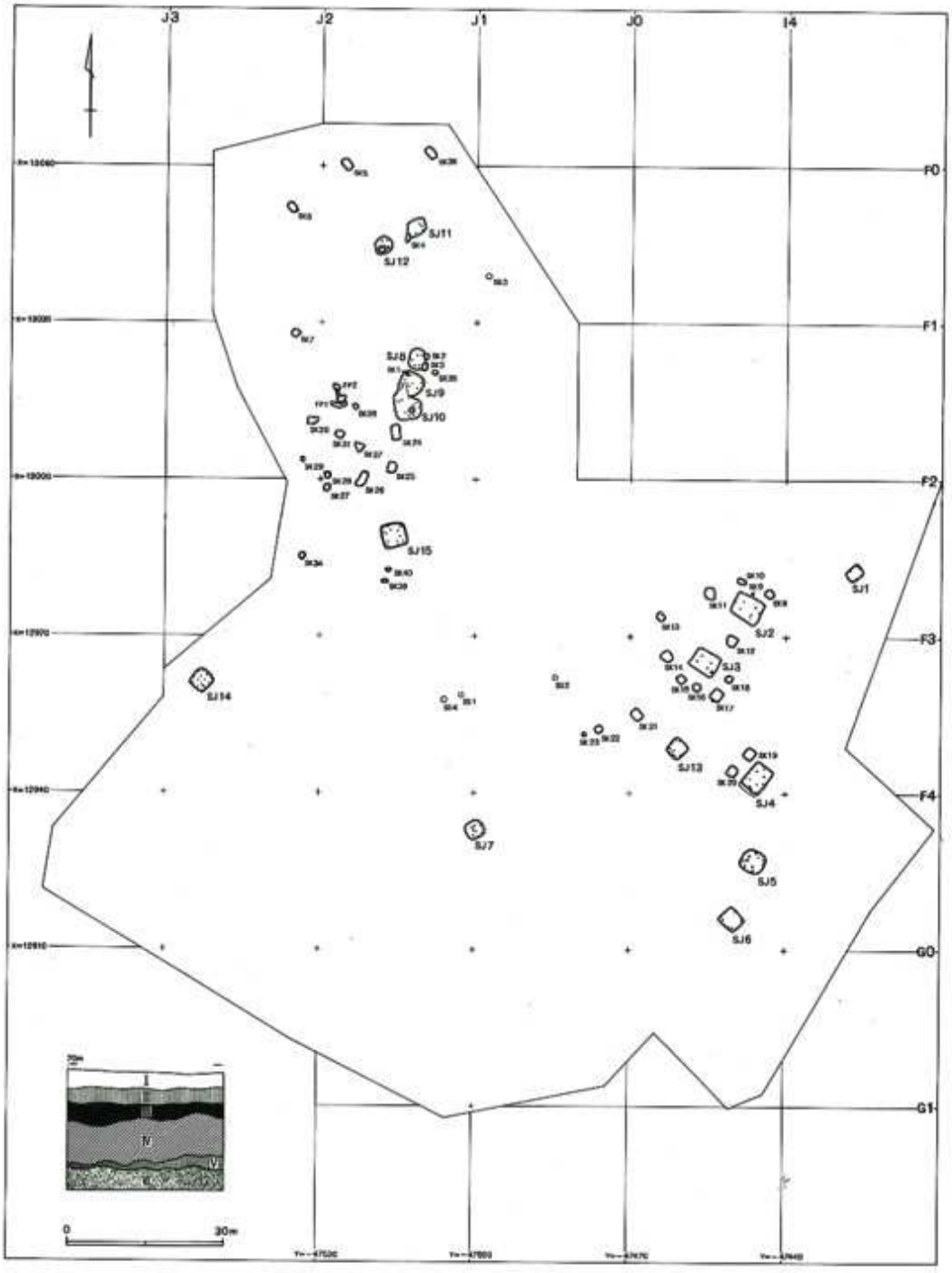
縄文時代では遺構は検出されなかったものの、草創期の表裏縄文土器と石槍、尖頭器、石斧等の石器群が出土した。それぞれは纏まりをもって出土しているわけではなく、遺構確認時に出土しているものが多い。早期の撚糸文期では住居跡8軒、土壙6基、集石遺構4基が検出された。沈線文期では住居跡1軒、土壙1基である。条痕文期では炉穴2基、土壙11基が検出された。前期では黒浜式期の住居跡1軒、諸磯ａ式期の住居跡2軒が検出されている。遺物は撚糸文期の土器石器が2万点以上出土している。

弥生時代では後期吉ヶ谷式期の住居跡3軒、周辺の住居跡に付属する土壙15基が検出されている。遺構からの出土遺物は少ない。他に、時期不詳の土壙5基が存在する。

東地区　北地区との境にやや深い谷が存在する。縄文時代では前期諸磯ｂ式期の住居跡1軒、早期の集石土壙2基が、弥生時代では吉ケ谷式期の住居跡1軒が検出されている。縄文時代の遺物では、撚糸文系土器群とともに、条痕文系土器群の野島式土器が比較的纏まって出土した。

遺跡の主体は奈良時代の遺構で、重複合わせて住居跡6軒、土壙4基、道跡1基である。住居跡は東西に2群の纏まりがあり、若干時期差があるものと思われる。西の一群は、住居跡と土壙が道跡で繋がれており、道は2、3重巡り、自己完結しているようである。

北地区　3地区の中では一番独立した地形を呈するが、縄文時代早期の集石土壙1基、後期堀之内Ⅱ式期の住居跡1軒、奈良時代の住居跡4軒が検出された。堀之内Ⅱ式期の住居跡は、石囲い埋甕炉を持ち、石皿を立てて埋設し埋甕との境にしている。奈良時代の住居跡は北東からの谷に沿って南斜面に列状に存在しているが、カマドの方向が異なる2群がある。出土遺物は、縄文時代の撚糸文系土器群、条痕文系土器群が多い。他に、礫、剝片類も多く出土している。



第6図　四反歩遺跡南地区全体図

Ⅳ．四反歩遺跡南地区の調査

1．縄文時代の遺構と遺物

四反歩遺跡南地区の縄文時代では、早期の撚糸文期を中心として、沈線文期、条痕文期の住居跡、土壙等が検出されている他、前期の住居跡も検出されている。

早期の遺構としては、撚糸文期の住居跡８軒、土壙６基、集石遺構４基が検出されている。撚糸文期の住居跡はＦ０Ｊ１区～Ｆ１Ｊ１区にかけて５軒が集中して存在し、他は比較的散在する傾向にある。土壙も住居跡の周辺に存在する傾向にある。集石遺構は下部に土壙を伴わないものと思われ、住居跡とは若干離れた場所に位置している。住居跡の所属時期は夏島式期～稲荷台式期にかけてと、東山式期である。遺物は土器片約12000点、石器類約8000点が出土しており、住居跡群の周辺と、その中間部分に集中する傾向にある。調査範囲が台地の大半を占めているため、実質的に撚糸文期の集落のほぼ全体を調査したことになる。

沈線文期では住居跡１軒と土壙１期を検出した。撚糸文期の遺構とは占地を異にしている。条痕文期ではＦ１Ｊ１区に遺構が集中しており、炉穴２基、土壙11基を検出した。炉穴、土壙は環状に配置されており、ほぼ同時期と認定される。

前期では黒浜式期１軒、諸磯式期２軒の住居跡が検出されている。黒浜式期の住居跡は諸磯ａ式期に建て替えられており、炉体土器が重複するとともに、柱穴も配置を変えられている。

(1) 草創期の遺物

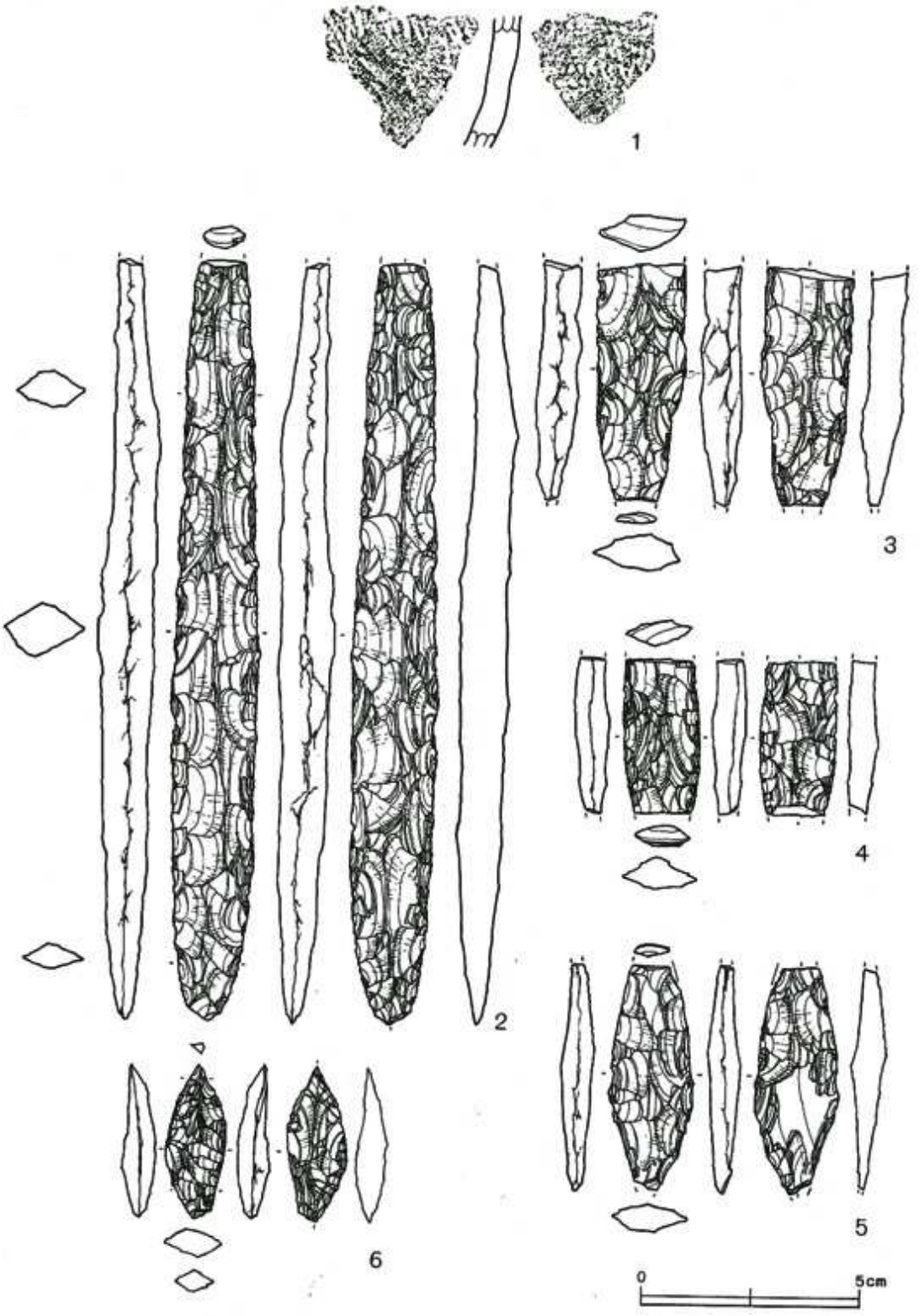
南地区では遺構は検出されていないものの、草創期の貴重な遺物が出土している。まとまって集中する等の特徴的な出土傾向を示さず、遺跡全体から散在的に検出されている。特に、Ｆ０Ｊ１区からＦ１Ｊ１区はやや出土例が多い。

土器（第７図１）

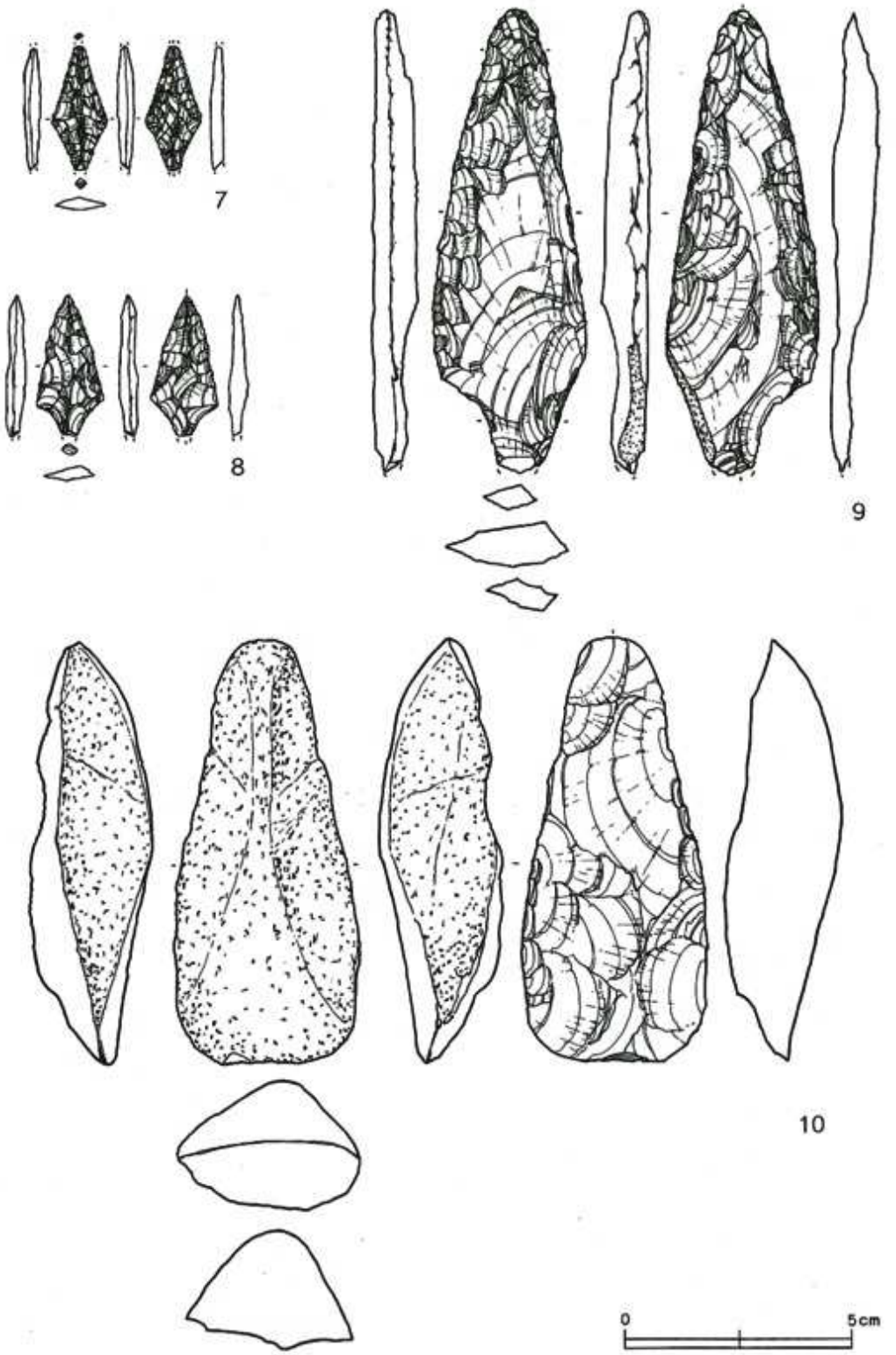
１点のみ出土した。表裏縄文土器である。内外面ともに単節ＲＬを施文しており、内面では施文の末端が窺える。器面に比較的凹凸が残され、器形のコーナー的な屈曲が存在し草創期的な様相を呈している。暗赤褐色を呈し、緻密な胎土である。

石器（第７図２～６、第８図７～10）

石器は石槍４点、有舌尖頭器３点、尖頭器１点、石槍の未製品１、石斧１点が出土している。石槍は先端が欠損するものの２、５の様な大小の２器種があり、切断された３、４もある。２は長さ17.1cm、幅２cmを測る秀品である。尖頭器は５が木葉形を呈し、６、７が有舌状を呈する。６は赤色のチャートを素材とする。石斧は神子柴状を呈するが、甲高の正面には調整剥離は施されず、自然面の形状をそのまま利用し、背面に左右からの調整剥離を施して平坦面を作出している。器面の風化が激しいが、刃部に磨きが施されている可能性もある。



第７図　草創期の遺物 (1)

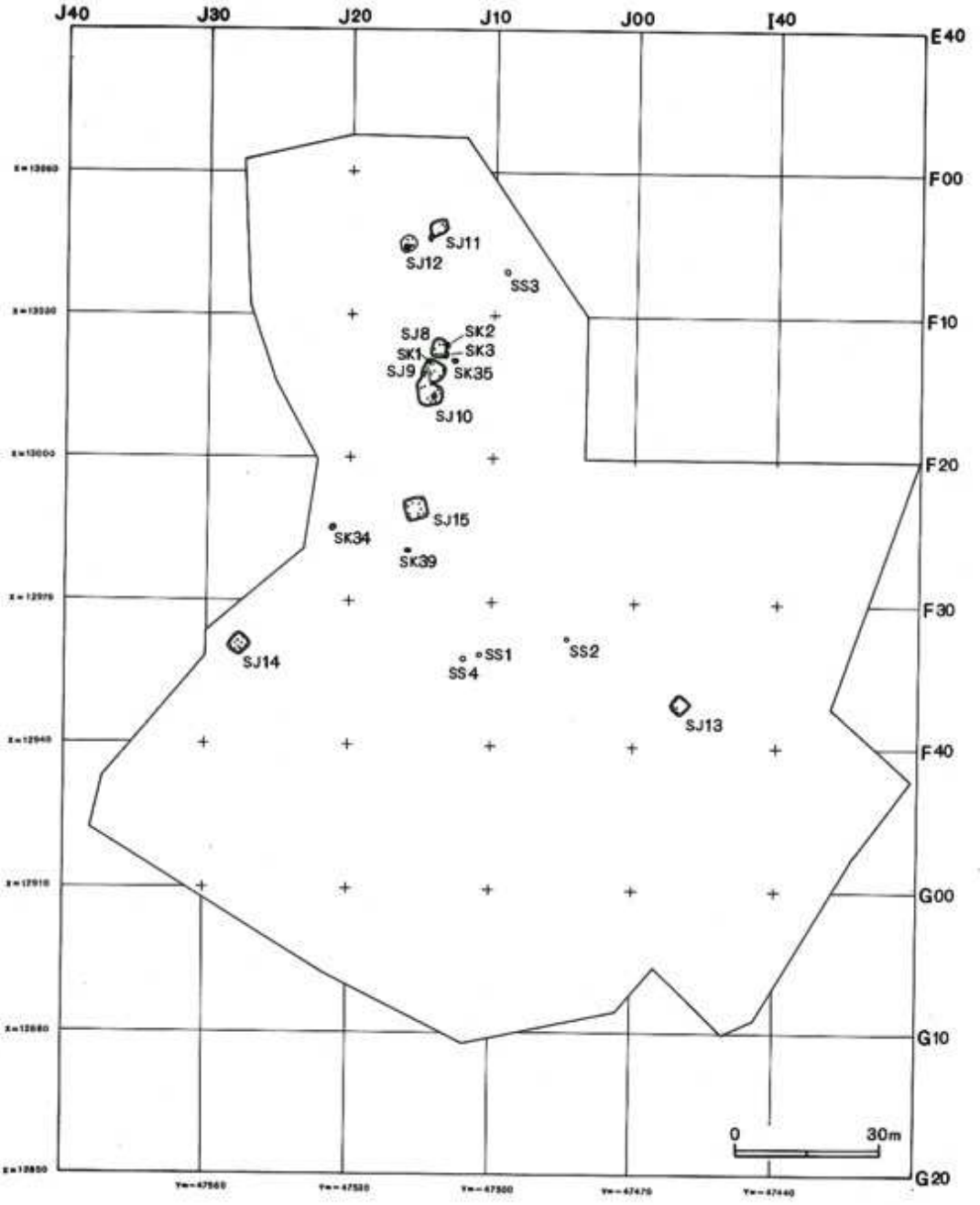


第8図　草創期の遺物 (2)

(2) 撚糸文期の遺構と遺物

第８号住居跡（第10図～第13図）

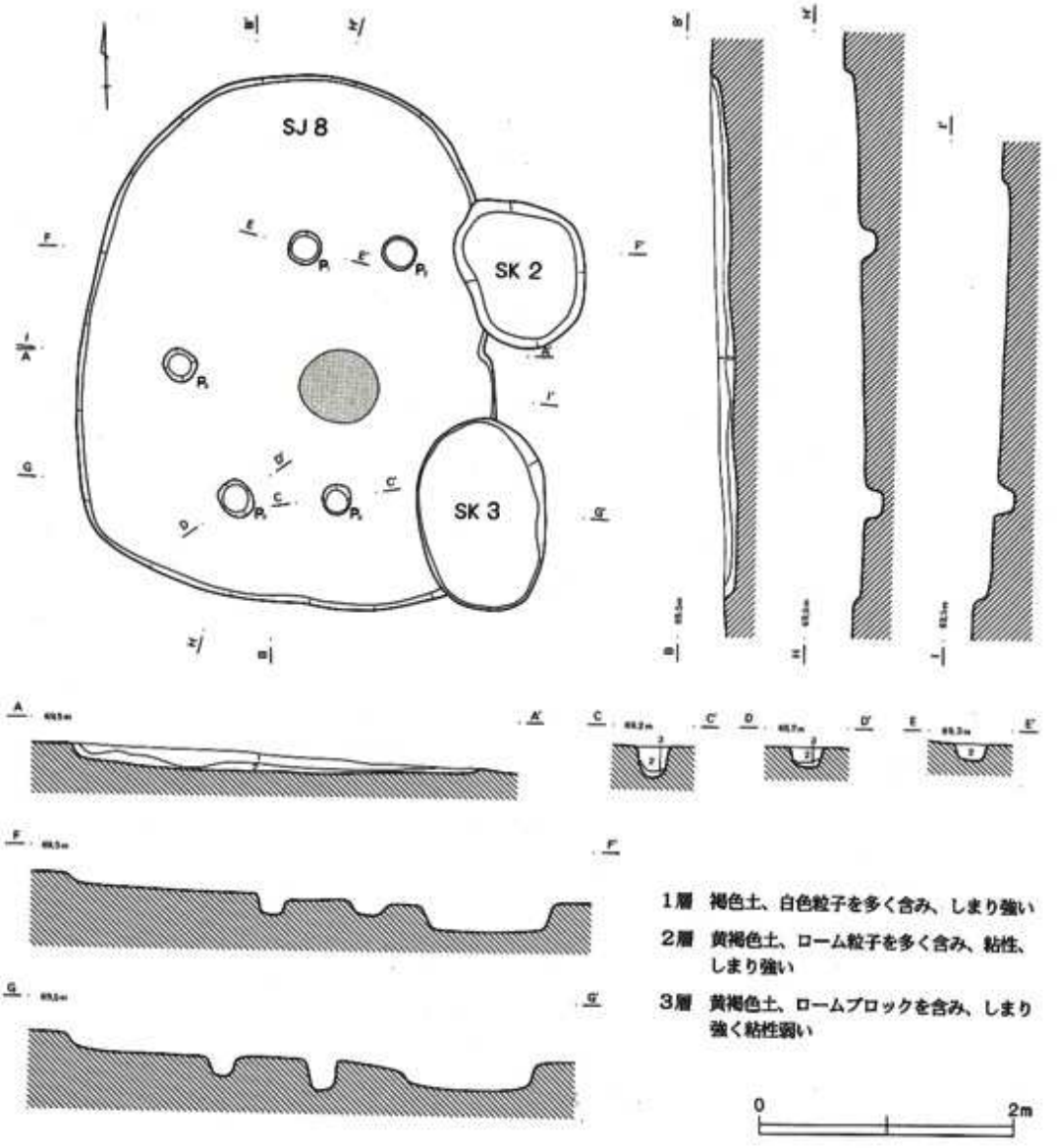
Ｆ１Ｊ１区に位置する。撚糸文期の第２号、第３号土壙と切り合うが、土壙のほうが新しい。住居跡のプランは南北に長軸をとる不整の楕円形を呈し、長径4.16m、短径3.28m、深さ約15cmを測



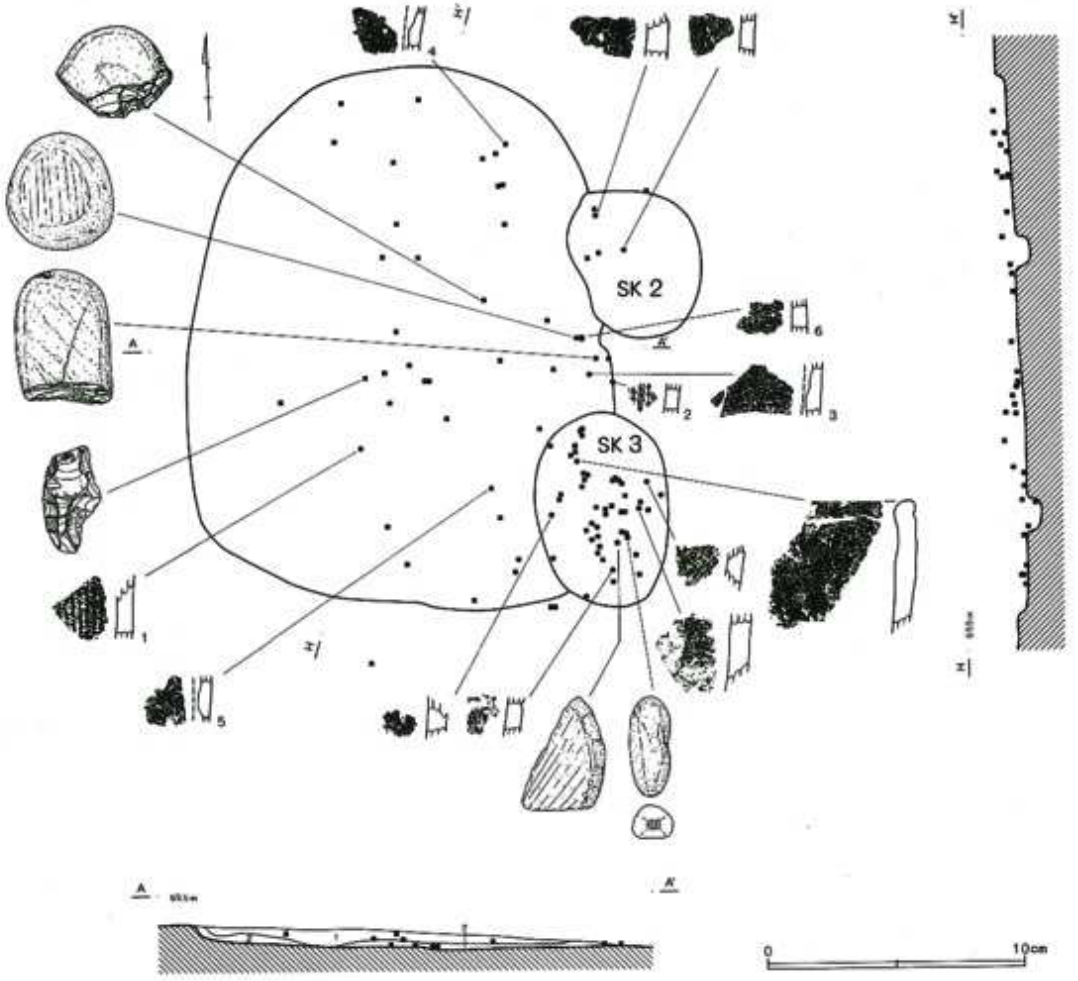
第９図　撚糸文期の遺構

る。床面は東南方向に若干傾斜するが、比較的平坦面で、壁の立ち上りは緩く皿状を呈している。炉は地床炉であり、中央部やや東寄りに位置する。炉は焼土を残す程焼けてはおらず、焼土粒子と炭化物が集中している程度である。柱穴は5本検出されたが、炉を囲み住居跡の中央部に配置されており、深さはＰ１＝14cm、Ｐ２＝10cm、Ｐ３＝28cm、Ｐ４＝16cm、Ｐ５＝15cmを測る。覆土は、１層が比較的しまりが強い褐色土で、白色の粒子を多く含んでる。２層は１層よりしまりはないが粘性の強い黄褐色土で、ローム粒子を多量に含む。また、若干の炭化物も含まれていた。第２号、第３号土壙とはプラン確認時に既に切り合い関係が判然としていた。

遺物は53点出土しており、土器の細片が11点、石器が42点である。出土状態は、炉を中心にしてまんべんなく分布していた。土器は細片のため型式帰属の判断が困難なものが多く、その中でも良



第10図　第８号住居跡

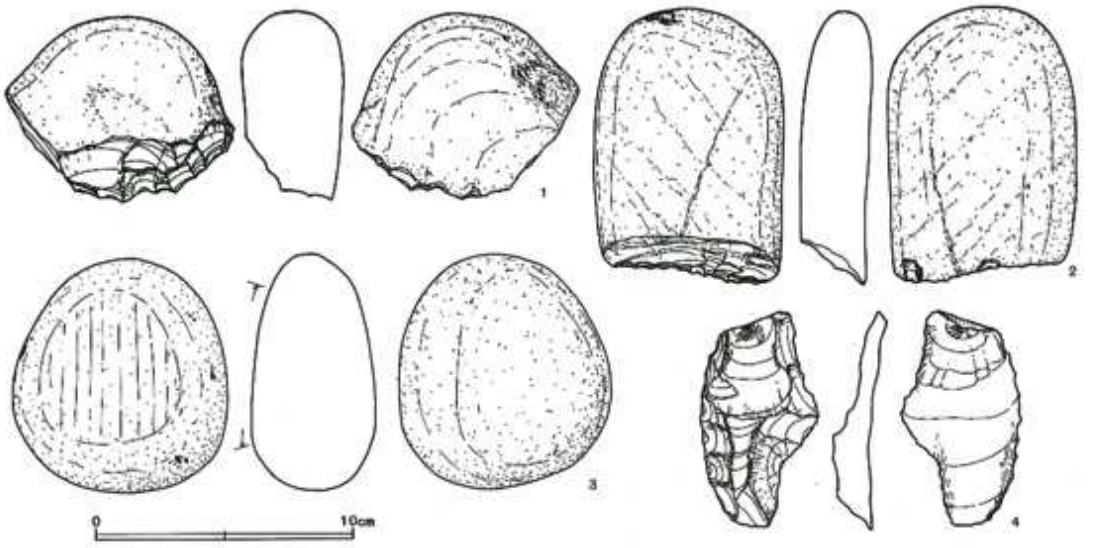


第11図　第８号住遺物分布図

好なものを第12図に示した。１は比較的粒の細かい縄文ＬＲを施文し、条が縦走する。器壁は６㎜前後を測り、胎土に白色細砂粒を多く含んでいる。色調は明褐色を呈する。２は撚糸Ｒを施文する細片である。撚糸文は深く明瞭に押捺されており、比較的細い撚糸文であるが、条の間隔がやや開いている。器壁は６㎜前後を測り、細砂粒を少量含み、赤褐色を呈する。３～６は無文土器で、胎土に暗赤褐色の細砂粒を多く含み、白色粒子も若干含まれる。器面が丁寧に研磨されており、焼成が良く、赤褐色を呈する堅緻な土器である。１、２は夏島式から稲荷台式に相当すると思われるが、３～６は明らかに東山式である。重複する土壙が東山式期のものであるから、住居跡はそれ以前となるが、出土遺物からでは判然としない。有文土器が殆ど出土していないことから、住居跡は東山式期の所産と推定される。

石器の製品は図示したものが全てである。他は殆どが破砕された礫で、少量の剥片類が出土している。１、２は礫器である。１は比較的厚くて丸い礫を素材とし、片面からの調整剥離で刃部を作出しており、刃部は２側縁加工に近い丸い形状を呈している。刃部の剥離角度は部分的には垂直に

第12図　第８号住出土土器



第13図　第８号住出土石器

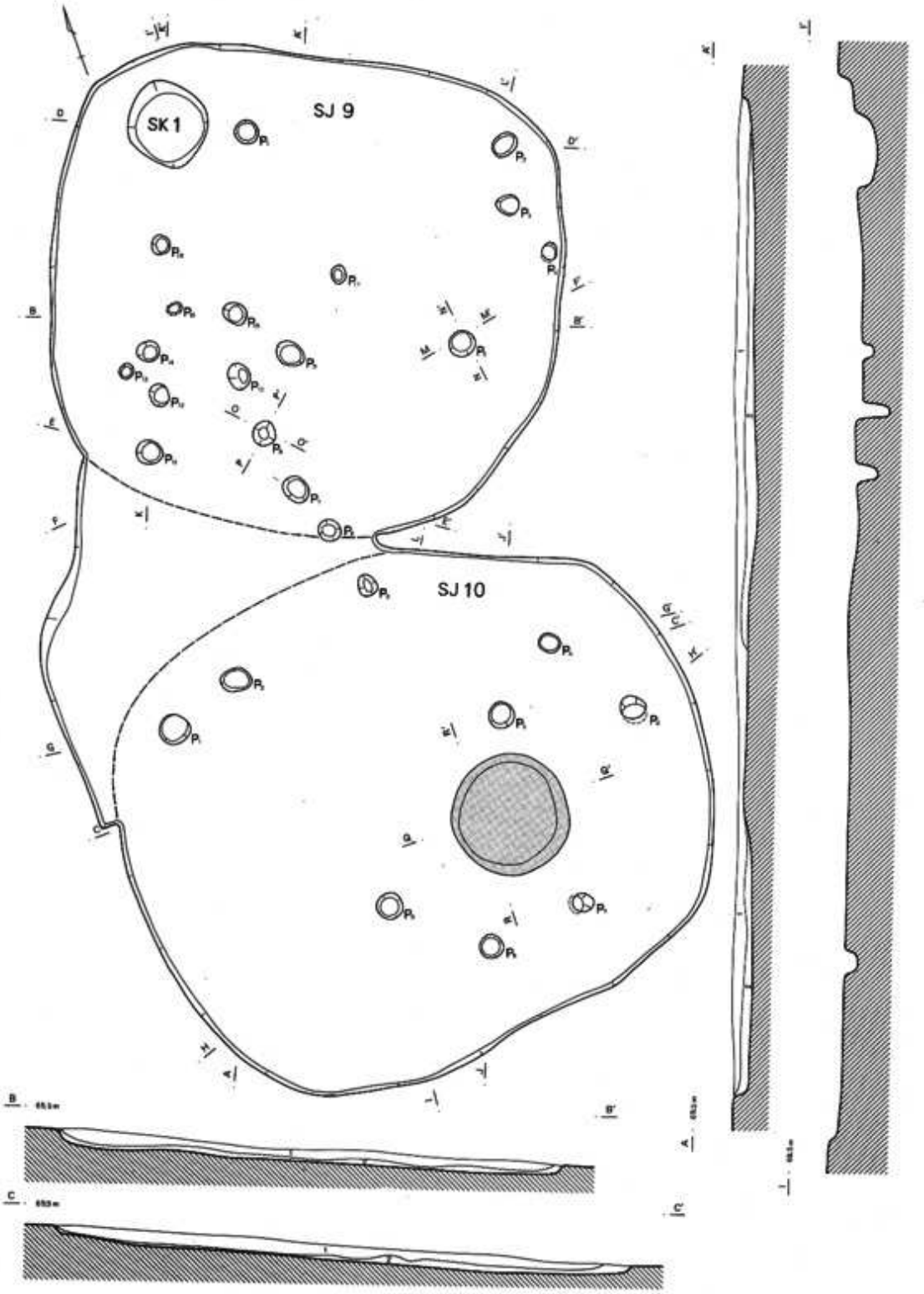
近い角度を持つ。２は扁平の長楕円礫を素材としており、長軸の一端を刃部に加工している。刃部は１回の大きな剥離で成形し、細かな調整剥離を施して刃部を整えており、鋭い刃部を備えている。３は拳大の大きさの磨石で、平坦面のみを使用している。４はチャート製の縦長剥片である。石器としての形状は整えられていないが、掻器として使用された可能性もある。

第９・10号住居跡（第14図～第20図）

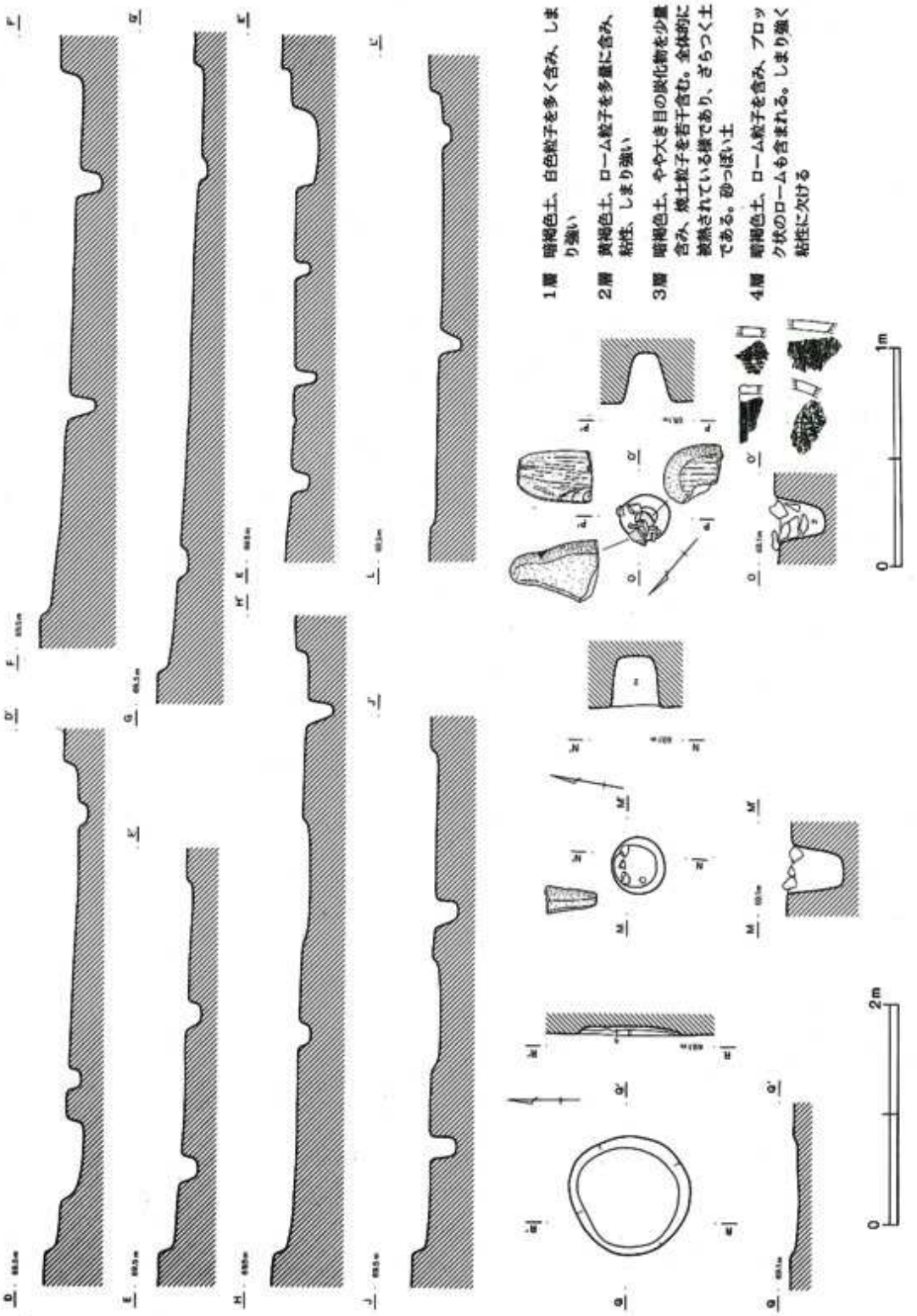
Ｆ１Ｊ１区に位置する。第１号土壙と重複するが、住居跡の方が新しい。住居跡は第８号住居跡の南側に、およそ50cm離れて接する様に位置する。第９・10号住居跡は一部重複するため、全体のプランが不明瞭である。

第９号住居跡は東西に長軸をとる隅丸長方形もしくは楕円形を呈し、長径4.76m、短径4.40m を測る。深さは深い部分で約25cm前後を測り、浅い部分で約15cmを測る。床面は凹凸が認められ、東南方向へ若干傾斜する。柱穴は18本検出されており、Ｐ１＝12cm、Ｐ２＝９cm、Ｐ３＝９cm、Ｐ４＝17cm、Ｐ５＝23cm、Ｐ６＝12cm、Ｐ７＝14cm、Ｐ８＝24cm、Ｐ９＝９cm、Ｐ10＝23cm、Ｐ11＝17cm、Ｐ12＝14cm、Ｐ13＝27cm、Ｐ14＝20cm、Ｐ15＝25cm、Ｐ16＝９cm、Ｐ17＝19cm、Ｐ18＝14cmを測るが、配置は規則性がなく不揃いである。Pit５、Pit８からは遺物が出土している。炉は検出できなかった。

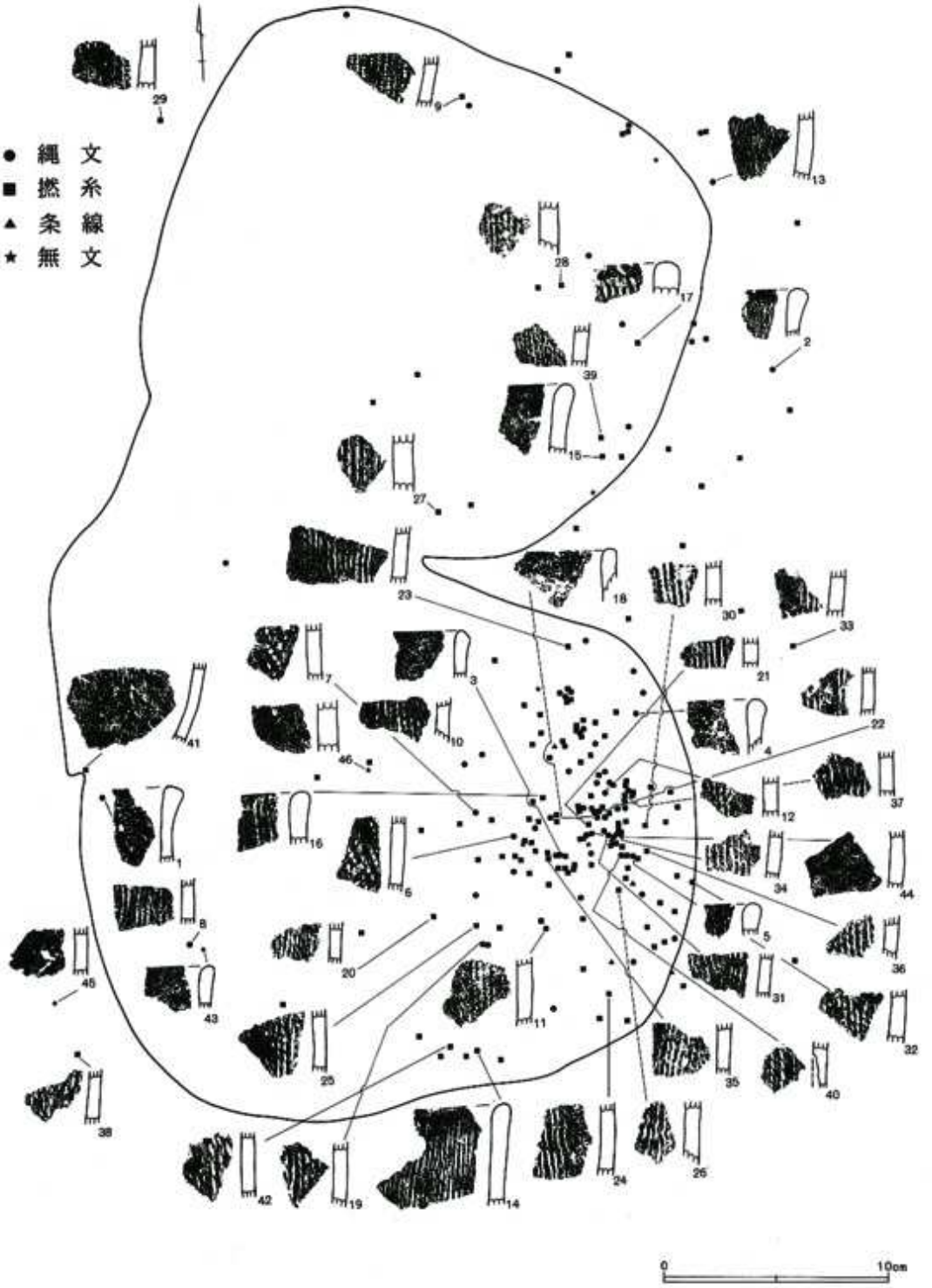
第10号住居跡は第９号住居跡と同様に東西に長軸をとり、隅丸長方形か長楕円形を呈する。長径



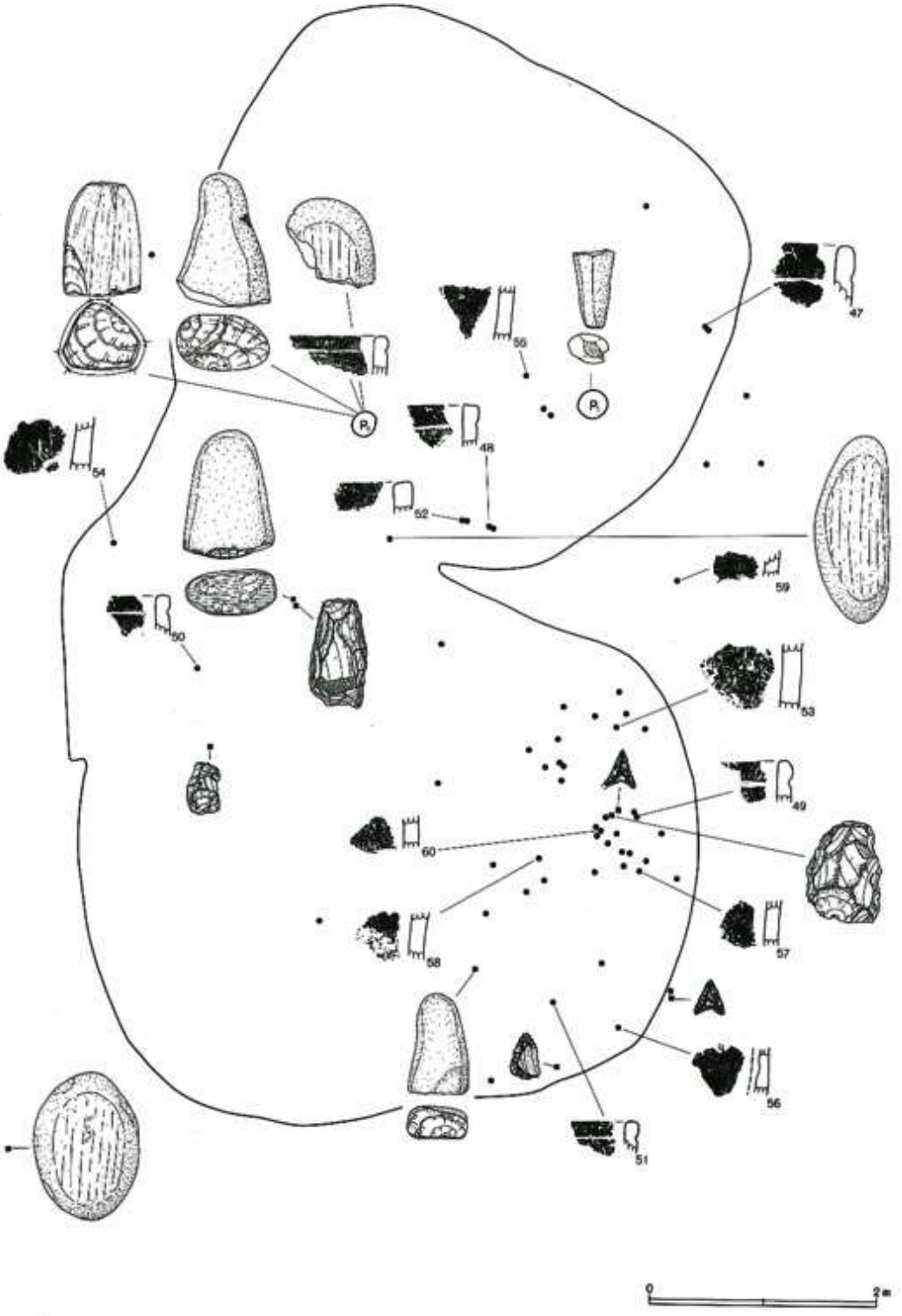
第14図　第９・10号住居跡


1層 暗褐色土、白色粒子を多く含み、しまり強い
2層 黄褐色土、ローム粒子を多量に含み、粘性、しまり強い
3層 暗褐色土、やや大きな目の炭化物を少量含み、焼土粒子を若干含む。全体的に被熱されている様であり、ざらつく土である。砂っぽい土
4層 暗褐色土、ローム粒子を含み、ブロック状のロームも含まれる。しまり強く粘性に欠ける
1m
0
2m
0

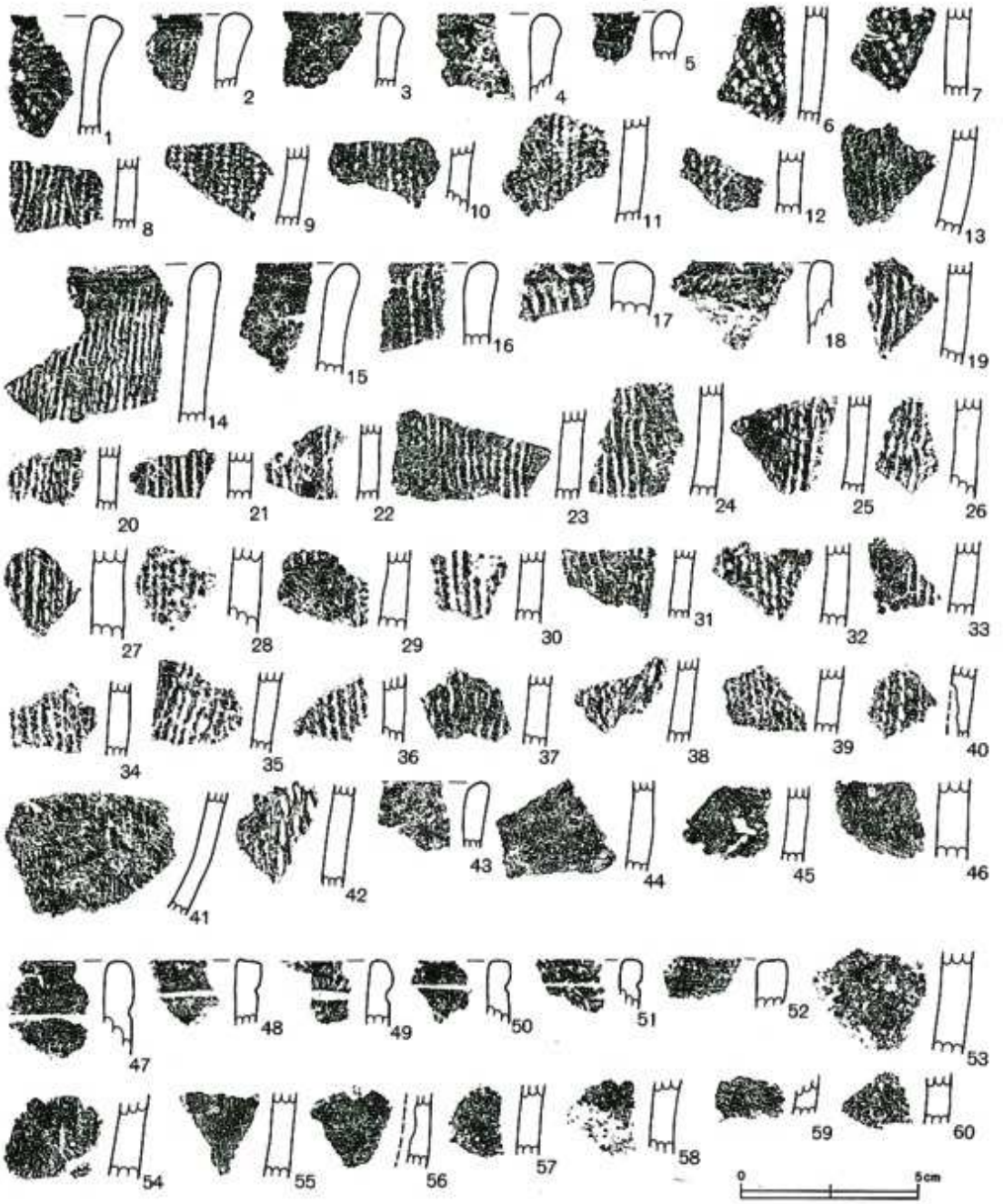
第15図　第９・10号住遺物分布図 (1)



第16図　第９・10号住遺物分布図 (2)

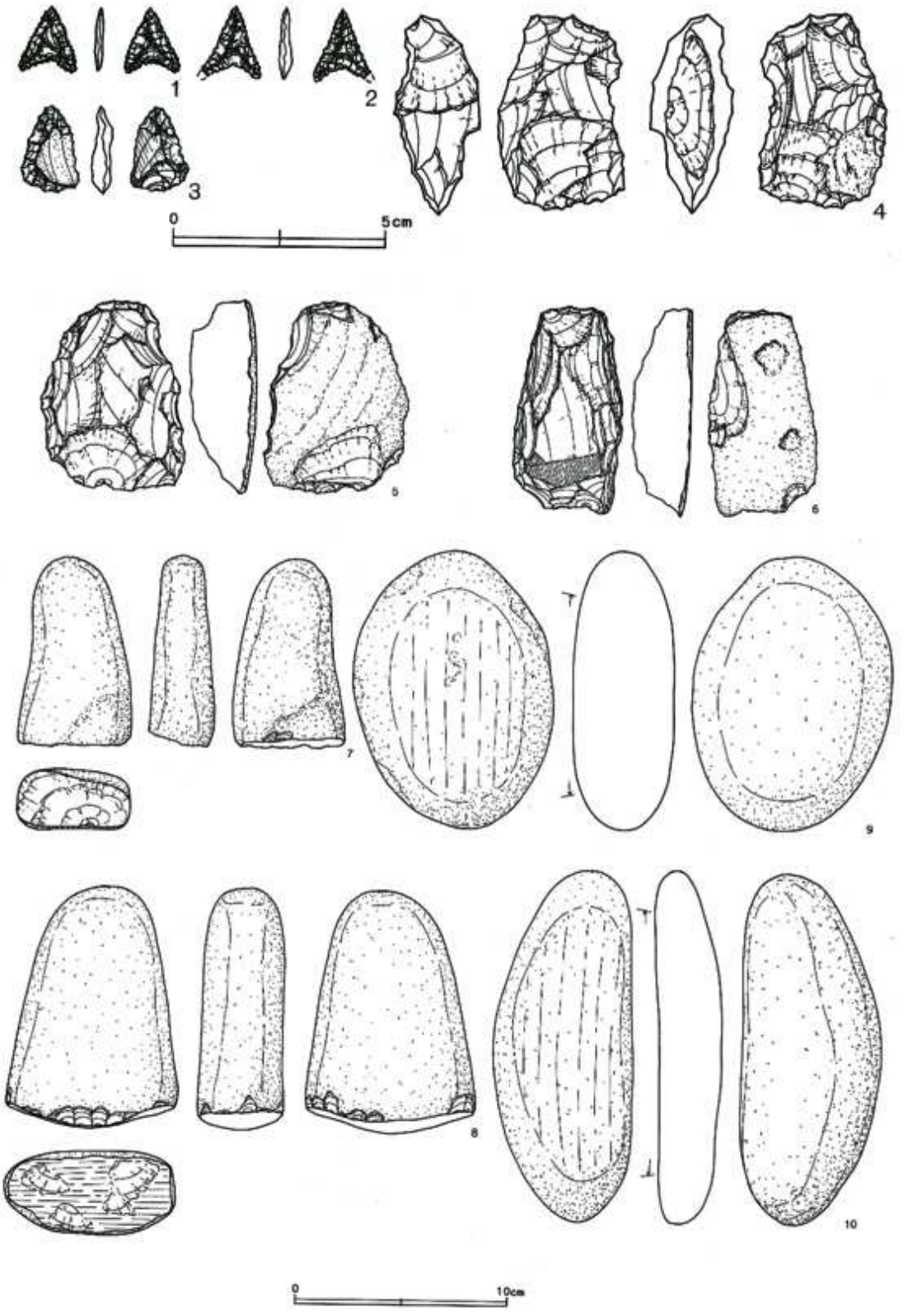


第17図　第９・10号住遺物分布図　(3)

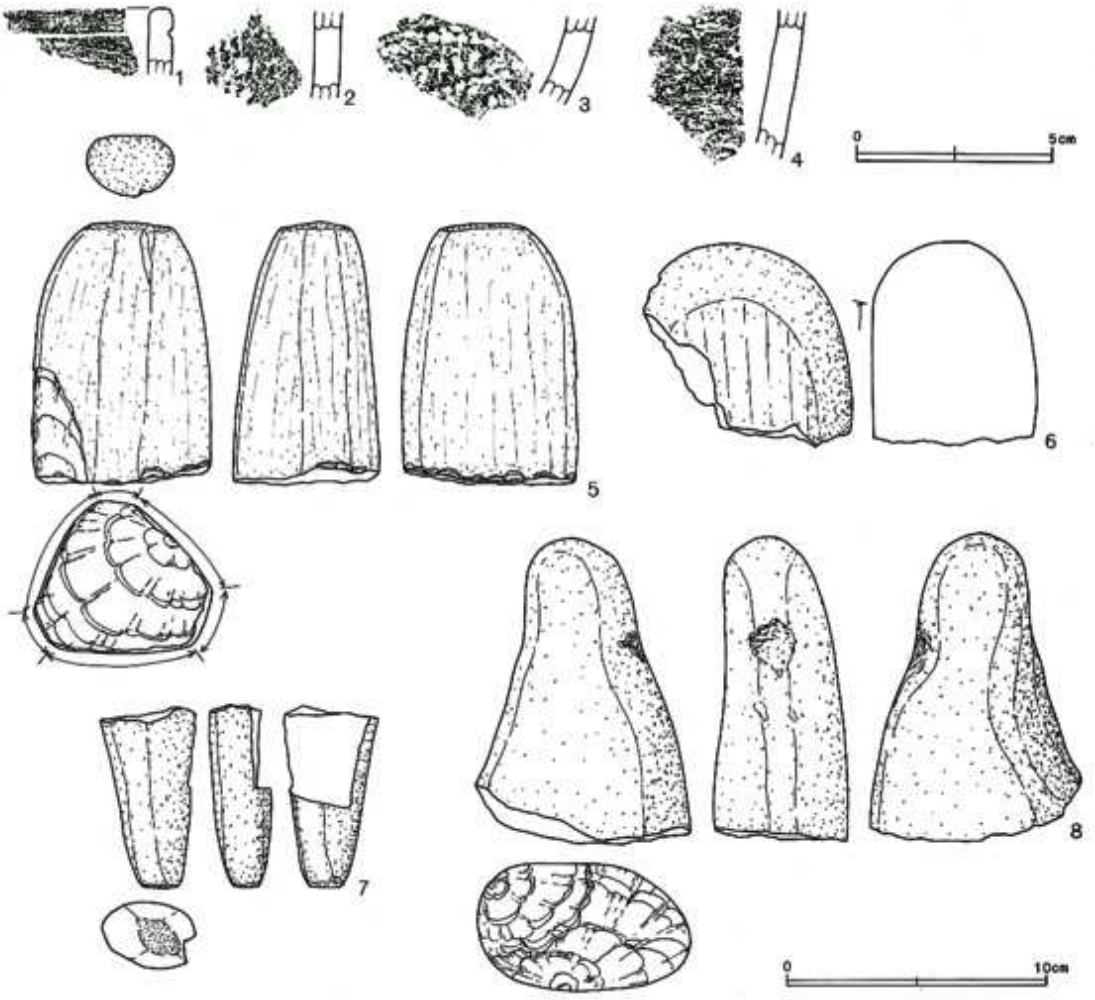


第18図　第９・10号住出土土器

5.48m、短径4.62m、深さ15cm前後を測る。床面には凹凸が認められ、東方向に緩く傾斜している。柱穴は９本検出されており、Ｐ１＝８cm、Ｐ２＝11cm、Ｐ３＝19cm、Ｐ４＝６cm、Ｐ５＝20cm、Ｐ６＝24cm、Ｐ７＝48cm、Ｐ８＝24cm、Ｐ９＝12cmを測る。およそ炉を囲む様に配置されている。炉は住居跡の中央部よりやや東に位置し、径１m余りのほぼ円形を呈する。地面が赤色化する程被熱しておらず、焼土が若干と炭化物が散布している程度である。住居跡の覆土は第９号住居跡と殆



第19図　第９・10号住出土石器



第20図　第９号住 Pit 出土遺物

ど同一で変化なく、切り合い関係は不明であった。１層はしまりのある明褐色土で、白色粒子を多く含んでいる。２層はローム粒子を多量に含む黄褐色土である。

遺物は両層から出土しており、第10号住居跡では炉を中心として分布する傾向にある。遺物は両住居跡合わせて総数865点出土しており、土器391点、石器474点であった。土器は縄文施文、撚糸文施文、条線文施文、無文土器と東山式土器が出土している。第９号住居跡は有文土器と東山式土器が出土しているが、柱穴から東山式土器が出土していることから、東山式期所産と把握される。また、第10号住居跡も両者が出土しているが、夏島式新期所産と捉えられる。

第９号住居跡の Pit からの出土遺物（第20図）は、Pit５からは土器４点（１～４）と、石器３点（５、６、８）、Pit８からは石器が１点(7)出土している。１は口縁部下に１本の沈線文を巡らせる東山式土器であり、角のとれた角頭状の口唇部を呈し、内彎気味に立つ。２は白色粒子を多く含み、撚糸Ｒを施す。３は底部付近の破片で、原体は不明瞭であるが縄文を施文する。４は条痕文系土器であり、繊維を若干含む。５、８はスタンプ形石器で、５は磨石を転用している。６は欠損す

る磨石である。7は欠損しているが、長礫の端部を使用した磨石である。

覆土出土土器（第18図）は全て撚糸文系土器群で、1～13が縄文施文土器、14～42が撚糸文施文土器、43～46が無文土器で、47～60が東山式土器である。

1～5は肥厚する口唇部がやや開く器形を呈し、1、2は縄文施文後に口唇部を撫でて成形するものであり、3は口唇外端部に強い成形を施す。1は口唇部が一部剝落しており、その痕跡から、板状の口縁部に粘土を丸く被せて肥厚させているのが理解され、一部隙間が存在している。3～5は口唇部を整形した後に、口唇部下の口縁部から縄文を施文するものである。縄文は条を垂下する様斜位に施文するが、10～13の様に器面がかなり湿っている状態で施文するものがあるため、その後器面が撫でられた様な状態になり不鮮明となるものがある。原体は細く硬いものが一般的あるが、節よりも繊維痕が目立つものが多い。6、7は同一個体で、比較的太い原体を使用している。原体は不明なもの以外全てＲＬである。殆どの破片が、白色粒子と細砂粒を多く含むが、緻密で堅緻な胎土である。色調は明るい褐色を呈するものが多い。

14は口唇部があまり肥厚せず、内削状を呈し、やや開く器形を呈する。撚糸文は口唇部を整形した後に施文し、口唇からやや間隔を開けて施文を始めている。15は口唇部が肥厚するが、撚糸施文は14と共通する手法である。16、17は口唇部が若干肥厚して開く器形を呈し、口唇直下から施文した後、口唇部を整形している様である。撚糸文は41が比較的細密であるが、他は細目の原体をやや間隔を開けて絡めて施文するものが多く、23～25の様に帯状に施文するものもある。42は太くて撚りの緩い原体である。

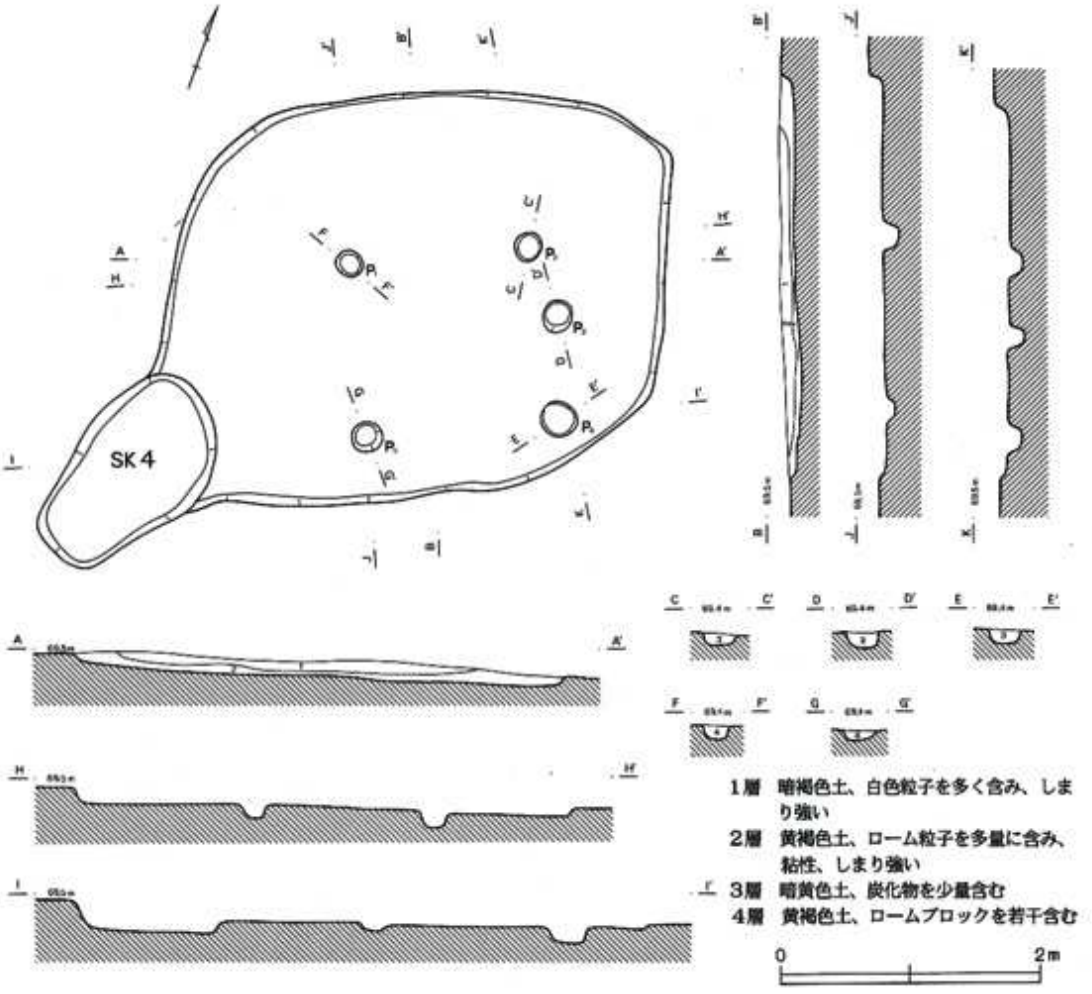
43は若干肥厚する口唇部がやや開く器形を呈し、粗い撫で状の整形を施す。44～46は無文土器であるが明るい褐色を呈し、細砂粒を多く含み、東山式の胴部破片とは明確に識別される。

47～52は口縁部に沈線文が1本巡る東山式土器で、47、49は口唇部がやや丸味を帯びている。沈線文も深くて明瞭なものが多く、口唇下1cm前後に施文されるものが多い。殆どが赤褐色を呈し、暗赤褐色の粒子を含み、良く研磨され、堅緻な土器である。

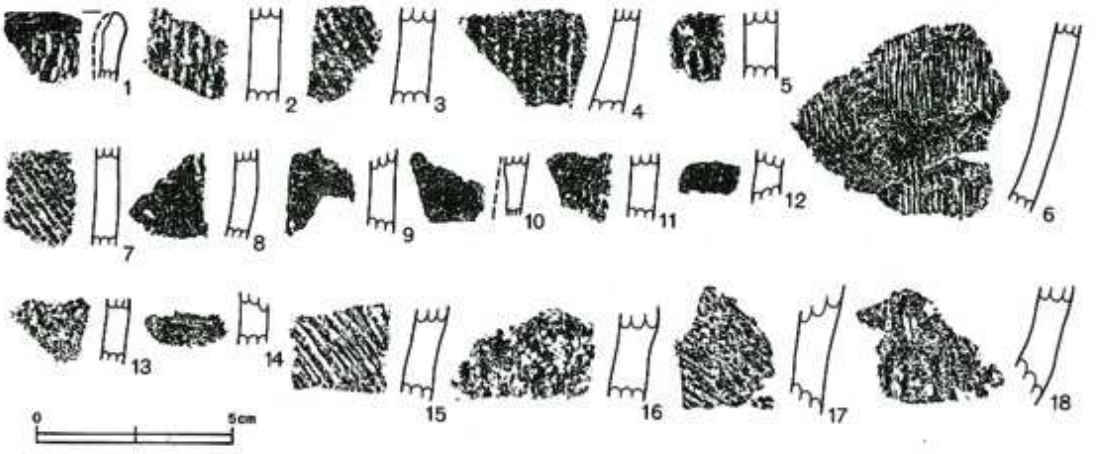
石器（第19図）は石鏃3点、石斧2点、磨石7点、有溝砥石1点が出土した。1～3は黒耀石製の石鏃で、3は未製品である。4はチャート製の楔形石器である。5、6は石斧であり、両者とも片面に自然面を多く残す。6は刃部を磨く局部磨製石斧であるが、再生を行っている。7、8はスタンプ形石器であり、両者とも側面からの調整剝離は施されない。7は分割されたままの底面を持ち、8は底面から垂直の細かな剝離痕がみられ、底面に使用による摩耗痕が認められる。8、10は磨石で片面のみを使用し、9には叩きによる窪み状の浅い痕跡が認められる。

第11号住居跡（第21図、第22図）

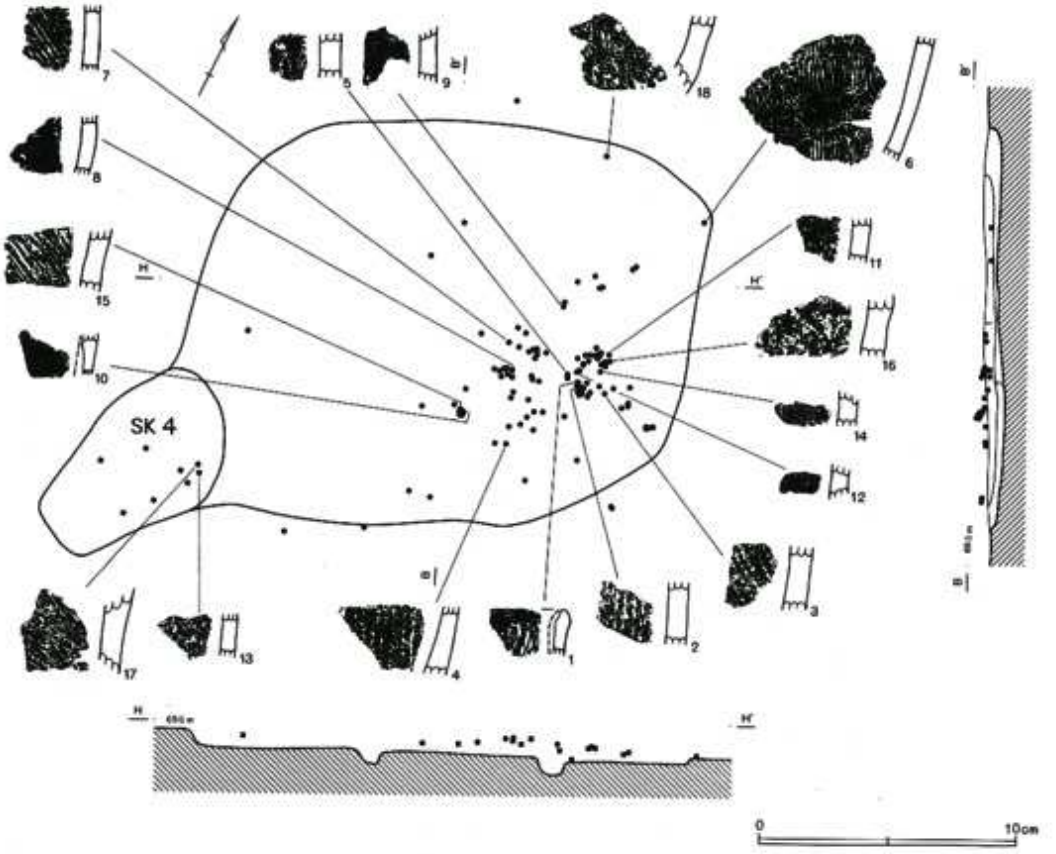
Ｆ０Ｊ１区に位置する。第12号住居跡の北東約3.5mに位置する。第4号土壙と重複するが、土壙は条痕文期所産であり、住居跡より新しい。住居跡は東西方向に長軸をとる隅丸長方形を呈するものと思われる。西壁のラインがやや崩れているが、土壙が重複するためと思われる。長径3.38m、短径3.10m、深さ約12cm前後を測る。床面はやや凹凸がみられ、東側にやや傾斜し、壁は緩く皿状に立ち上がる。柱穴は中央部南寄りに5本検出され、Ｐ１＝11cm、Ｐ２＝10cm、Ｐ３＝13cm、Ｐ５



第21図　第11号住居跡



第22図　第11号住出土土器



第23図　第11号住遺物分布図

＝6cmを測る。炉は検出されなかった。

遺物は113点出土しており、土器が73点、石器が40点である。土器は殆どが細片であり、やや大きめのものを図示（第22図）した。1～14は撚糸文系土器群である。1は口縁部破片であるが、裏面が剝落しており、口唇部の肥厚度合が不明である。口端部に施文がかからないが、口唇部は良く整形されているため、施文の後整形を施したものと思われる。原体は撚りの緩いRで、やや条間を開けて施文する。2は器面が荒れているが、原体はやや太いRである。3、4は同一個体で原体が不鮮明であり、撚糸Lと判断されるが、縄文の可能性もある。縄文の場合RLとなる。5はやや太いR、7は細いRを施文する。6は細密Rを帯状に間隔を開けて施文する。8～14は無文土器であり、9、11、12、14は赤褐色を呈し、暗赤褐色の鉱物を含み、磨きが施されていることから、東山式と判断される。

15～18は繊維を含む条痕文系土器群であり、15は内外面に条痕文を施文し、16、17は擦痕文を施文する。18は底部付近の破片であり、繊維を多く含む。

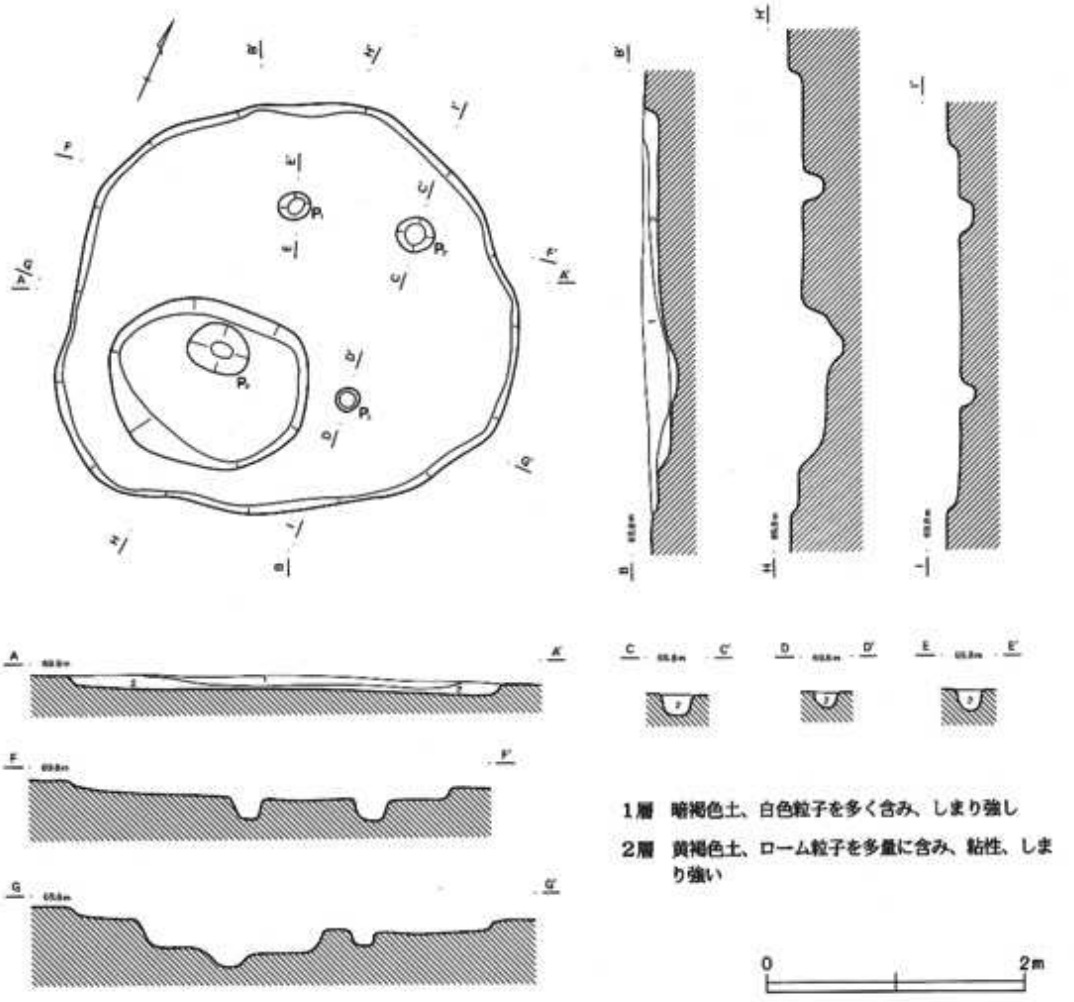
石器は剝片と礫が殆どで、磨石の破片が2点出土したのみである。

住居跡の所属時期は、細片であるが有文土器より無文土器が多く含まれ、柱穴の配置等からみて東山式期の可能性が高いものと思われる。条痕文土器は土壙と重複するための混入であろう。

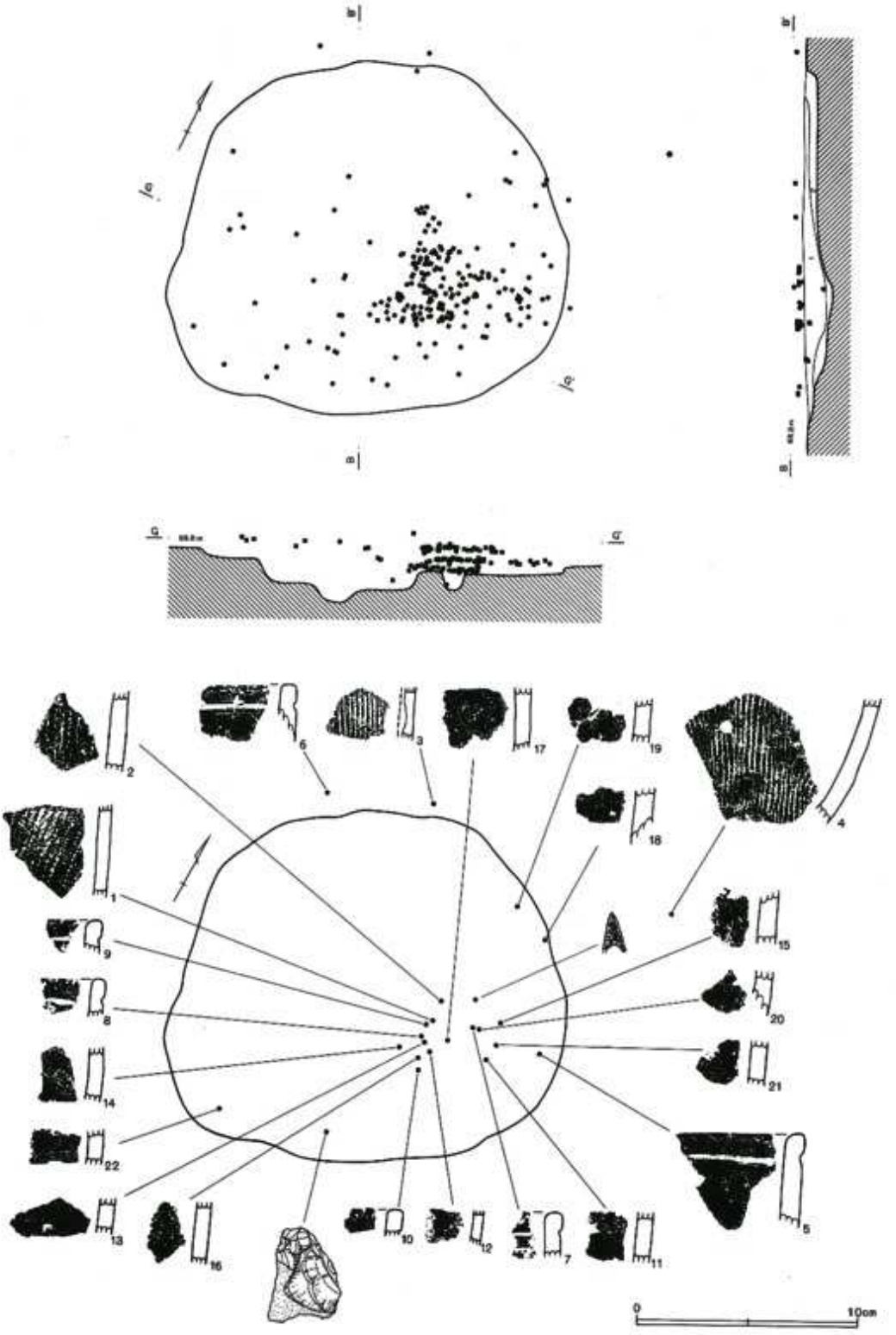
第12号住居跡（第24図～第27図）

Ｆ０Ｊ１区に位置する。第11号住居跡の南西で、3.5m程離れて位置する。住居跡内の南西部分に撹乱状の掘り込みが存在する。住居跡は東西方向に長軸をとる台形状の楕円形を呈し、長径3.52m、短径3.14m、深さ約15cmを測る。床面は撹乱部分を除くと比較的平坦面を形成し、壁は緩く立ち上がる。柱穴は４本検出され、Ｐ１＝16cm、Ｐ２＝16cm、Ｐ３＝12cm、Ｐ４＝28cmを測る。炉は検出されなかった。覆土は第12号住居跡とほぼ同様であり、１層がしまりの強い暗褐色土で、白色粒子が多量に含まれる。２層は粘性、しまりが強くローム粒子を大量に含む黄褐色土である。住居跡の所属時期は東山式期である。

遺物は住居跡の南東部分を中心にして分布しており、合計215点出土した。土器（第26図）が76点、石器（第27図）が139点である。土器は細片が多く、有文土器よりも、無文土器が圧倒的に多い。出土土器は全て撚糸文系土器群であるが、有文土器は図示したものが殆どである。１は縄文ＲＬを施文する胴部破片で、暗褐色を呈し、暗赤褐色の粒子を多く含むが、緻密で堅緻な土器である。

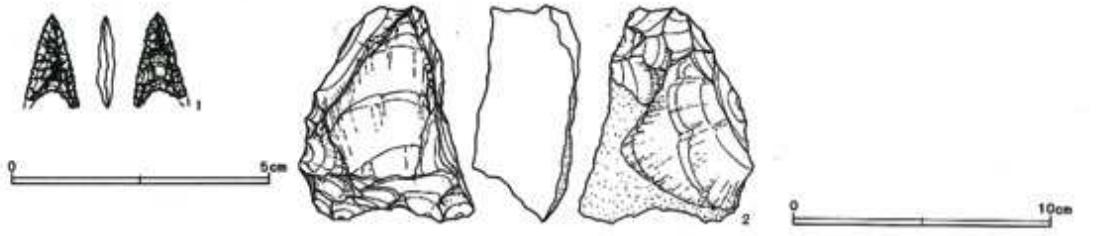


第24図　第12号住居跡



第25図　第12号住遺物分布図

第26図　第12号住出土土器

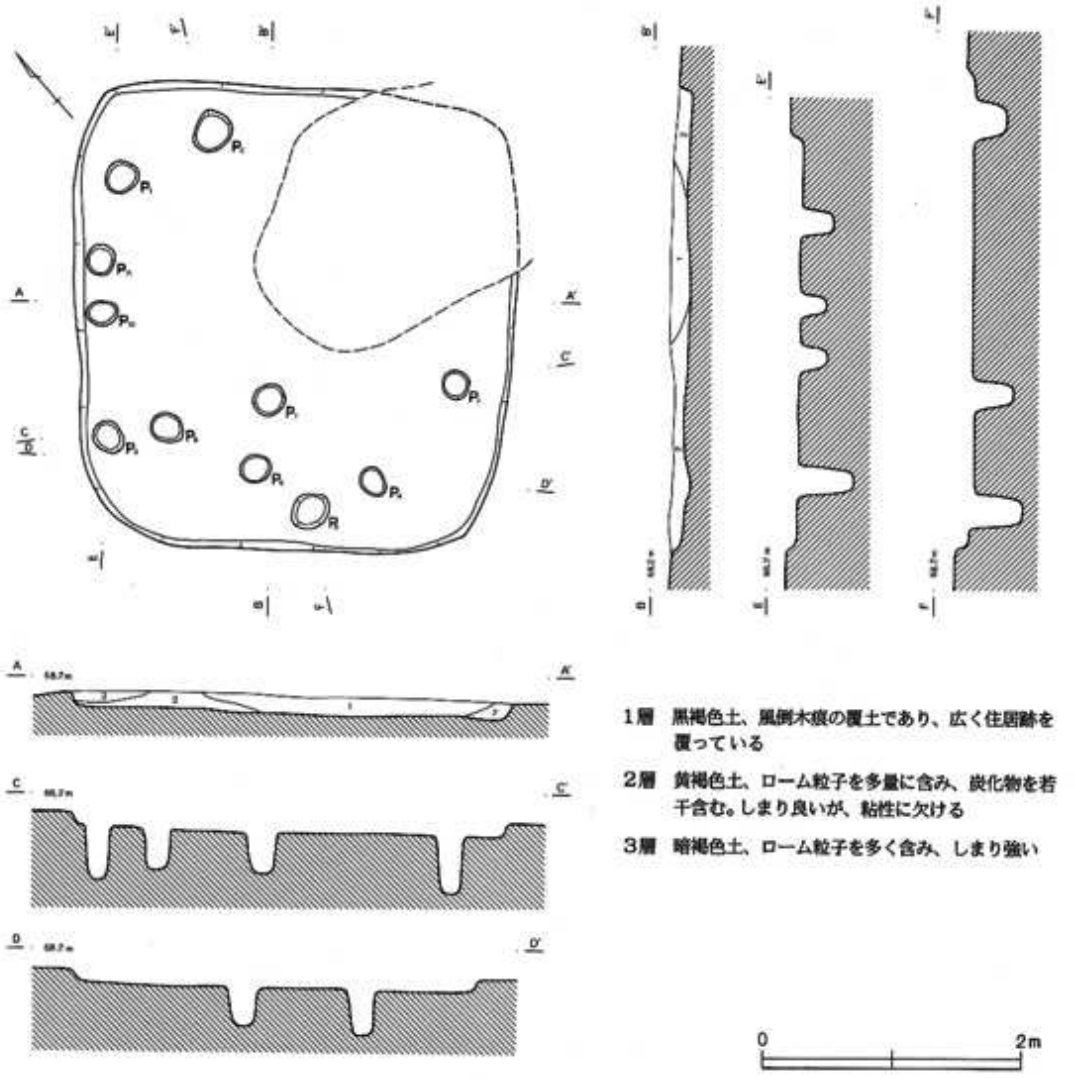


第27図　第12号住出土石器

2は撚糸文か縄文か判然としないが、撚糸Rの可能性が高い。赤褐色を呈し、白色粒子と石英、長石類の細砂粒を多量に含む。3は裏面が剝落しているが、細密な撚糸Rを深く施文する。明黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。4は底部付近の破片で、細い撚糸Rを若干間隔を開けて施文する。黄褐色を呈し、白色粒子を多く含む。

5～22は撚糸文系土器群終末期の東山式土器である。1は内削状で角頭状を呈する口唇部が、若干開き気味に立つ器形を呈し、口唇部より胴部のほうが若干器壁が肥厚し、1cm前後を測る。口縁部に巡らされる沈線文は幅広の凹線状を呈し、口縁部に条痕状の整形を施してから、撫で整形を行っている。胎土に白色粒子と細砂粒を多く含む。6は角頭状の口唇部が立つ器形を呈し、口縁部の沈線文は丸頭状工具で施文している。細砂粒と暗赤褐色粒子を多く含む。7～10は細片であるが、やや角のとれた角頭状口縁を呈し、それぞれ断面が丸い沈線文を施文する。いずれも赤褐色を呈し、胎土に暗赤褐色粒子を含むが、堅緻な土器群である。11～22の胴部破片も、器壁が1cm前後を測るものが多く、口縁部と同じ特徴的な胎土、色調を呈している。

石器は大半が剝片と礫類であるが、石鏃1点、礫器1点が出土した。1はチャート製の石鏃で、片足を一部欠損する。2は礫器で、背面に自然面を残し、礫表側から上下左右の側辺に調整剝離を

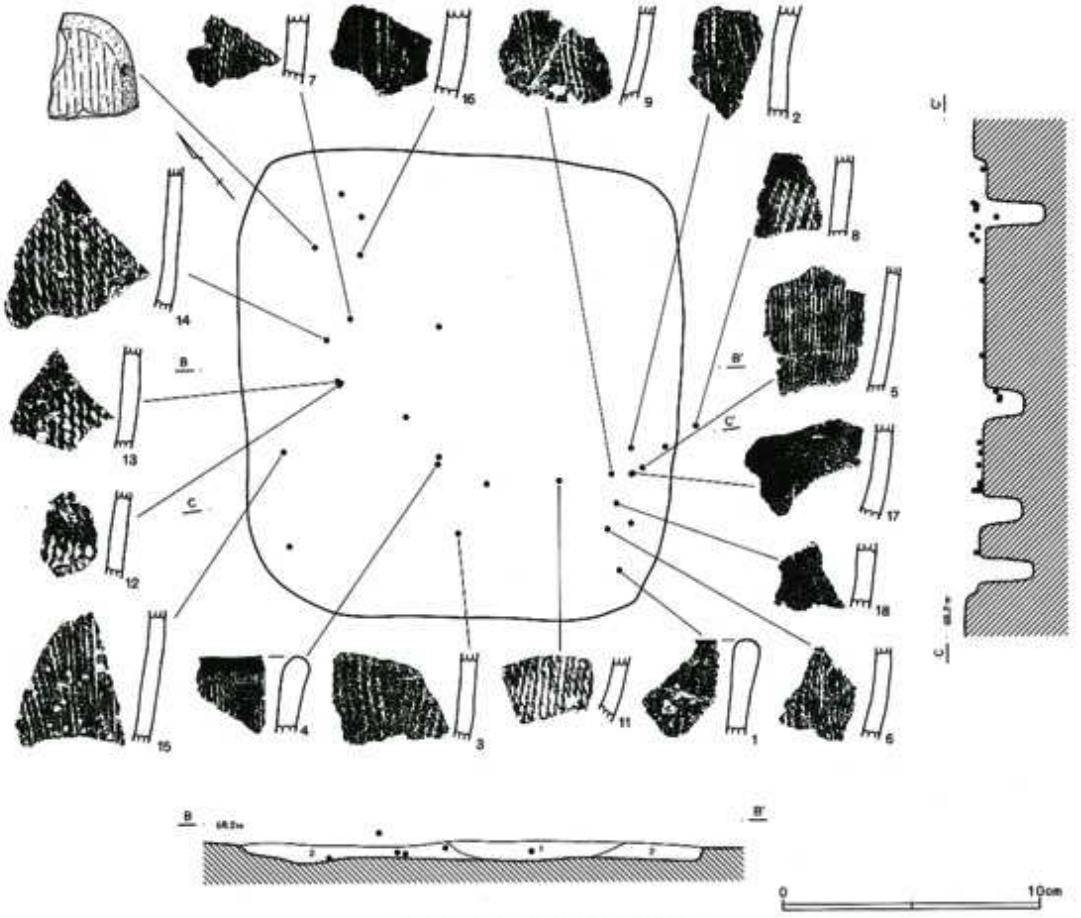


第28図　第13号住居跡

施している。刃部はやや彎曲する直刃で、礫表との刃角は垂直に近い。

第13号住居跡（第28図～第31図）

Ｆ３Ｉ４区に位置する。周囲に縄文時代の遺構はなく、南東約20m程のところに弥生時代の第４号住居跡が存在する。住居跡東のコーナーが攪乱を受けているが、ほぼ隅丸の方形を呈し、長軸が北から約45度東に振れている。長径3.56m、短径3.42m、深さ約15cm前後を測る。床面はおよそ平坦面を呈し、壁は急に立ち上がる。柱穴は11本検出され、攪乱部分があるため配列は不明瞭であるが、壁に沿って並ぶものと思われる。深さはＰ１＝26cm、Ｐ２＝24cm、Ｐ３＝46cm、Ｐ４＝35cm、Ｐ５＝40cm、Ｐ６＝28cm、Ｐ７＝32cm、Ｐ８＝32cm、Ｐ９＝42cm、Ｐ10＝22cm、Ｐ11＝20cmを測り、比較的深い柱穴が揃っている。覆土は３層で、１層は攪乱に伴う黒褐色土である。２層はしまりは



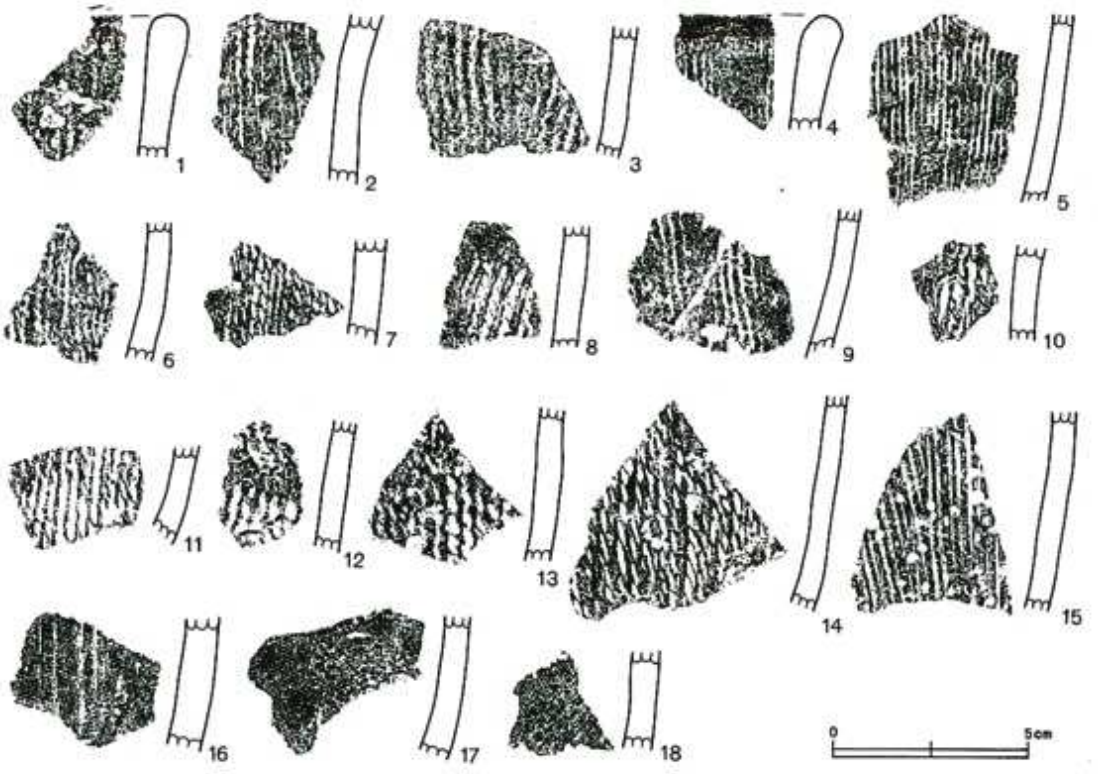
第29図　第13号住遺物分布図

良いが粘性に欠ける、ローム粒子を多く混入した黄褐色土である。3層は部分的に堆積している層で、しまりが強くてローム粒子を多く含む暗褐色土である。遺物は、殆ど2層から出土している。住居跡の所属時期は稲荷台式期である。

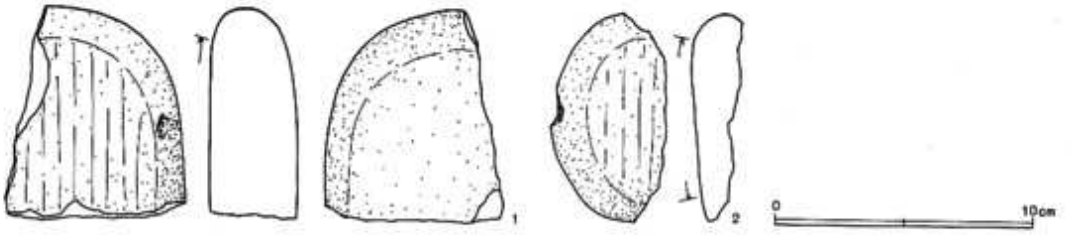
出土遺物は合計32点で、土器（第30図）が27点、石器（第31図）が5点であった。土器は、全て撚糸文系土器群で、1～3は縄文施文、4～14は撚糸文施文、15、16は条線文施文、17、18は無文土器である。

1は丸く肥厚する口唇部がやや開く器形を呈し、器面が荒れているため口唇部整形と縄文施文の先後関係は不明瞭であるが、口唇部は全面に撫で整形を行い、縄文はRLで、条が縦走する様に施文する。胎土に細砂粒を多く含むが、緻密である。2は口縁部下の破片であり、器形の反りがみられる。縄文の原体はRLで、条が縦走する。節の圧痕より繊維痕が明瞭なため、一見撚糸文的である。3は比較的太い縄文を施文するが、器面が湿っている状態での施文のため原体は不明瞭である。2、3ともに砂粒及び小礫を含むが堅緻な土器であり、暗赤褐色を呈する。

4は口唇部が丸く肥厚してやや開く器形を呈し、撚糸文施文後、口唇部に撫で整形を程す。原体は細いが撚りの緩いRで、口端部から施文する。白色粒子及び長石等の細砂粒を多く含む。裏面に



第30図　第13号住出土土器



第31図　第13号住出土石器

丁寧な調整を施し、明赤褐色を呈する堅緻な土器である。5、6は比較的細密な撚糸文を施文するもので、原体は撚糸Rである。胎土に石英等の細砂粒を多く含み、堅緻な土器であるが、器面が荒れている。7～9は撚糸文を帯状に施文するもので、やや太い原体が使用される。8、9は白色粒子及び細砂粒、小礫を多く含み、明赤褐色を呈する。10～14は比較的太い撚糸文を施文するもので、原体は全てRである。11、12はあまり砂粒は目立たないが、13、14は細砂粒を多く含み、白色粒子が目立つ。いずれも明赤褐色を呈し、堅緻な土器である。

15、16は撚糸文原体を使用し絡条体条線文を施文するもので、15は条がやや太いが密な条線文で、16は条が細く間隔の開いた条線文である。15は器壁が7㎜前後で薄く、砂粒の少ない胎土であり、16は9㎜前後とやや厚く、細砂粒及び白色粒子を多く含む。両者とも赤褐色を呈する。

17、18は無文土器で、17は純粋に近い胎土で橙褐色を呈し、18は細砂粒を多く含む、暗赤褐色の堅緻な土器である。

石器は石皿と磨石の破片が1点ずつ出土している。1はおよそ4分の1程が現存する石皿で、扁平な閃緑岩を使用したもので、擦り面は殆ど窪まず平坦面を呈している。2は磨石で、片面を欠損するが、擦り面は平坦である。

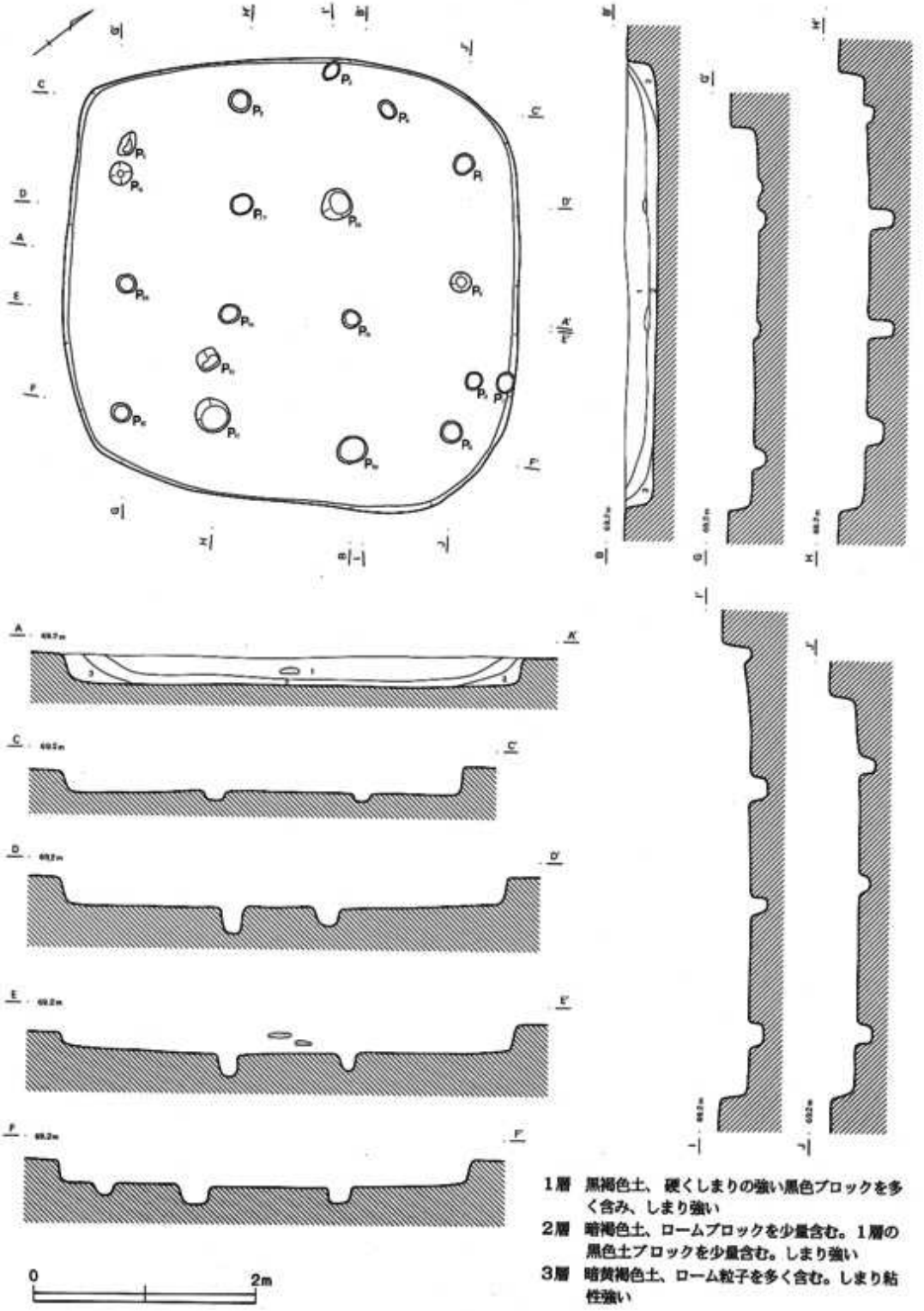
第14号住居跡（第32図～第36図）

F3J2区に位置する。遺跡を横切る道路の南側地区に位置する唯一の遺構であり、周囲に縄文時代の遺構はない。住居跡は隅の丸いほぼ方形を呈し、長軸が北から約45度西へ振れている。長径4.12m、短径4m、深さ約30cm前後を測る。床面は中央部付近で小さな凹凸がみられるが、概して平坦である。壁は直に立ち上がる。柱穴は合計19本検出され、P1＝4cm、P2＝9cm、P3＝8cm、P4＝8cm、P5＝14cm、P6＝11cm、P7＝16cm、P8＝7cm、P9＝15cm、P10＝15cm、P11＝18cm、P12＝11cm、P13＝23cm、P14＝23cm、P15＝16cm、P16＝17cm、P17＝24cm、P18＝5cm、P19＝8cmを測り、全体的に浅い傾向にある。柱穴は中央部に4本配置され、それを囲む様に壁際に3～4本配置されている。中央の4本を中心にして、それぞれの柱穴が井形に組まれている様であり、南北のラインは柱穴が通る様であるが、東西方向は柱穴の通らない部分もある。炉は丹念に調査したが、検出することはできなかった。覆土は3層から構成され、1層は硬い黒色土ブロックを多く含む黒褐色土で、しまりが強い土である。遺物の大半はこの層から出土している。2層は1層よりも黒色土ブロックを少なく含み、ローム粒子を少量含み、しまりが強い。3層はローム粒子を多く含み、しまり、粘性ともに強くなる土である。住居跡の所属時期は、出土遺物から稲荷台式期である。

遺物は108点出土しており、土器が46点、石器が62点である。出土土器は全て撚糸文系土器群であり、1層中に出土しているものが多いが、住居跡周辺出土土器も含まれる。

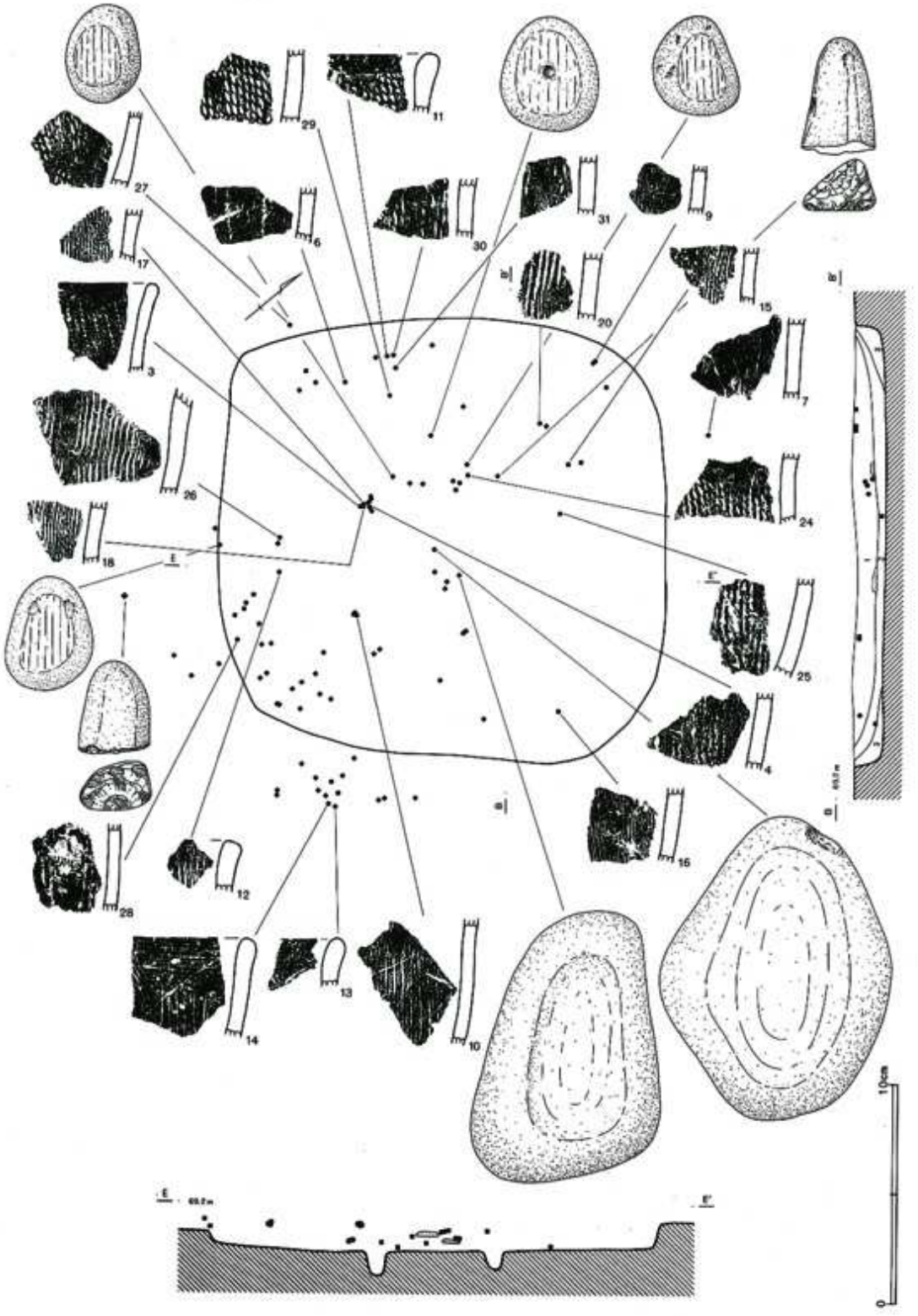
1～10は縄文施文土器である。1、2は肥厚した口唇部がやや開く器形を呈し、口端部から縄文RLを施文した後、口唇部全体に撫で整形を施すものである。3は丸頭口唇部がやや外反気味に開き、口唇部からやや間隔を開けて縄文RLを施文する。器面に凹凸を若干残す。4～10は胴部破片で、全て単節RLを施文する。4は器面が湿った状態で施文するため、縄文が不明瞭である。5は撚りの硬い縄文で、節よりも繊維痕が明瞭である。6、7は条の間隔が開く。10は砂粒が少なく、器壁の薄い土器で、細かな縄文を施文する。

11～32は撚糸文施文土器である。11は肥厚する口唇部が開く器形を呈し、太い撚糸Rを施文した後に口唇部全面に撫で整形を施す。太いが条間が詰まった撚糸Rを施文する。12はやや肥厚する角頭状の口唇部が開く器形を呈し、口端部下から撚糸Rを施文する。13は若干肥厚する角のとれた角頭状の口唇部が開き、口縁部に無文部を設けて撚糸文を施こす。14は13同様に若干肥厚する口唇部が開く器形を呈するが、口唇部下に緩い括れが巡る。口唇直下から括れ部にかけて左右の強い条痕状の整形痕が残り、細くて間隔の開いた撚糸Rを無文部下から施文する。他は胴部破片で、15～18は細密な撚糸文を施文しており、15はやや帯状施文である。19～22は細くやや間隔の開く撚糸文で、23～25、27～29はやや太めの撚糸文を施文する。26は帯状施文で、30～32は条間の開いた撚糸文である。いずれも原体は撚糸Rである。33は無文土器で、白色粒子を含み暗赤褐色を呈する。

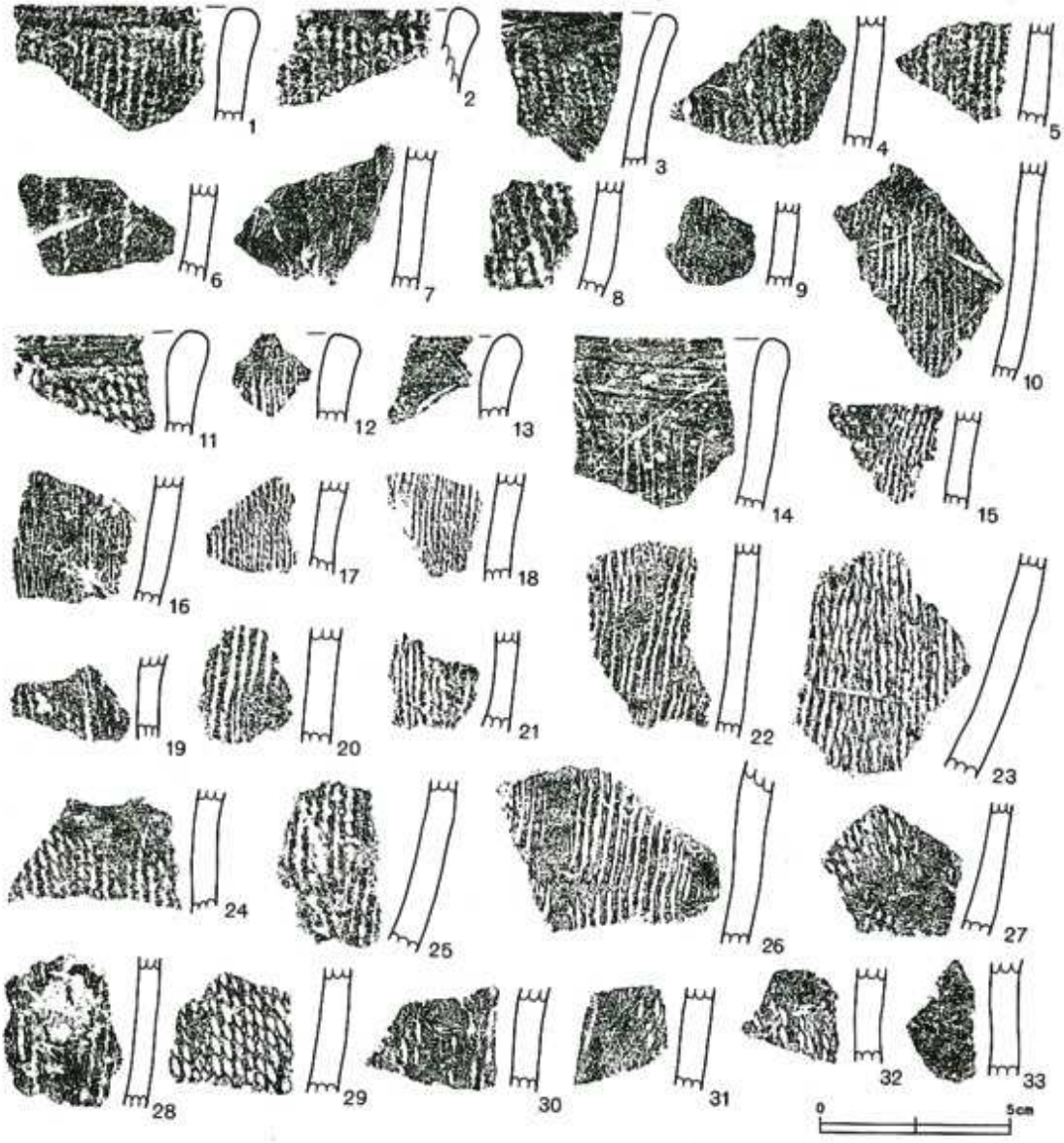


1層　黒褐色土、硬くしまりの強い黒色ブロックを多く含み、しまり強い
2層　暗褐色土、ロームブロックを少量含む。1層の黒色土ブロックを少量含む。しまり強い
3層　暗黄褐色土、ローム粒子を多く含む。しまり粘性強い

第32図　第14号住居跡

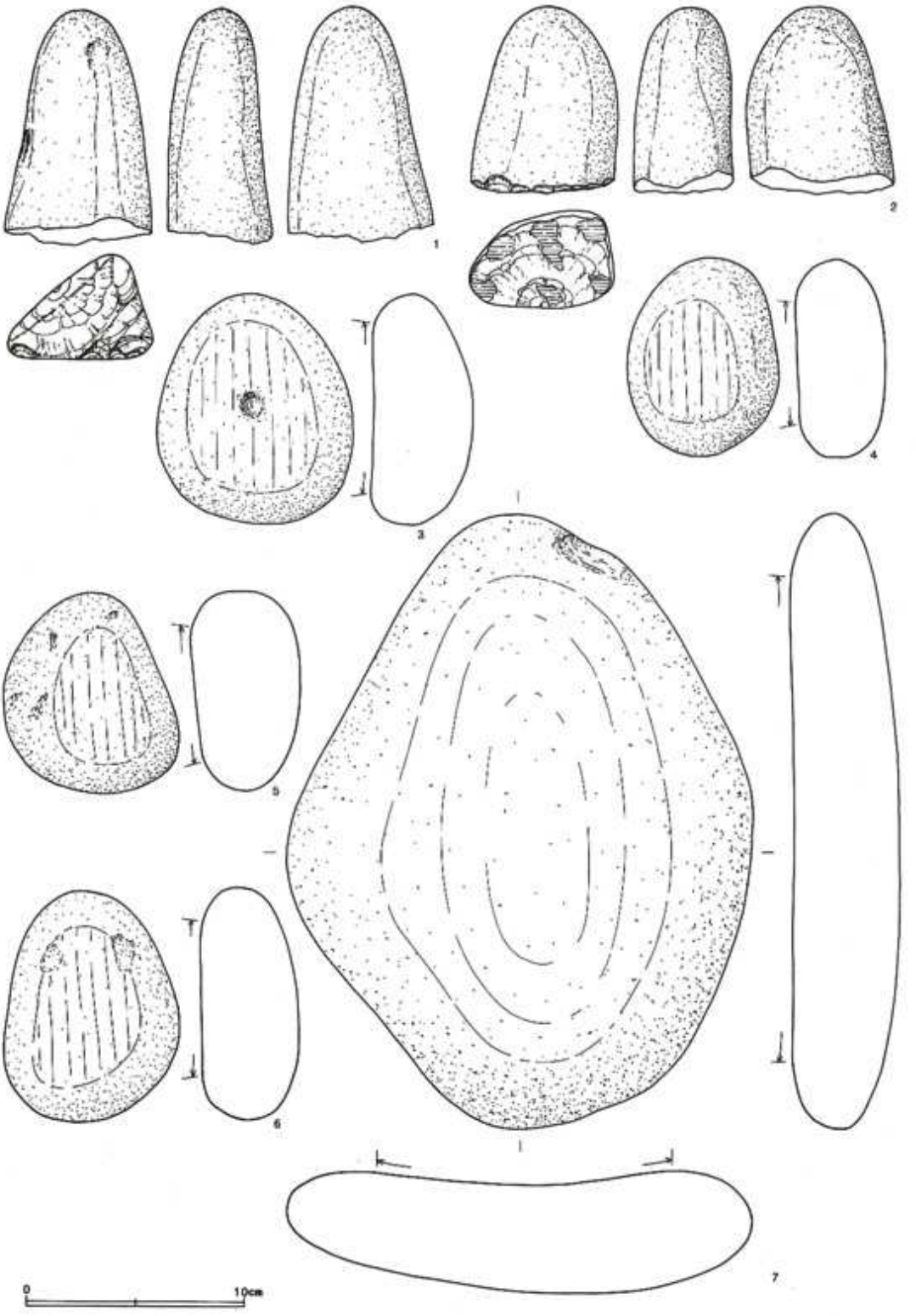


第33図　第14号住遺物分布図

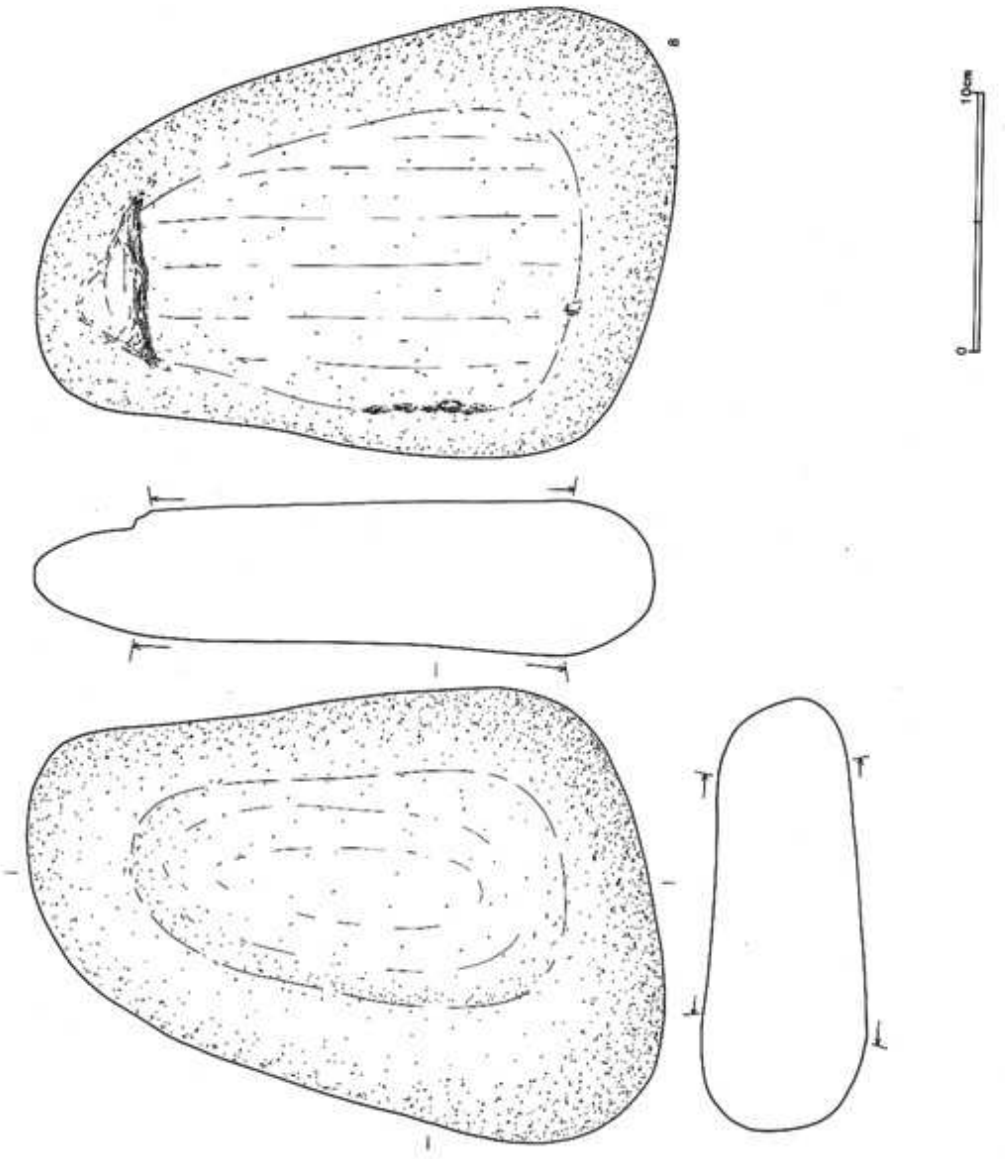


第34図　第14号住出土土器

石器は礫、剝片が圧倒的に多く、磨石が4点、スタンプ形石器が2点、石皿が2点出土した。1、2はスタンプ形石器で、1は分割された底面に調整剝離を施す。2は底面から使用による垂直の細かな剝離がみられ、底面は摩耗した部分が存在する。3～6は磨石で、片面のみを使用するものが多い。7、8は閃緑岩製の大形の石皿で、住居跡のほぼ中央部に廃棄されていたものである。両者とも自然な形状をそのまま使用しており、扁平な7には凹面がみられ、厚身の8は両面を使用し若干の凹面がみられる。



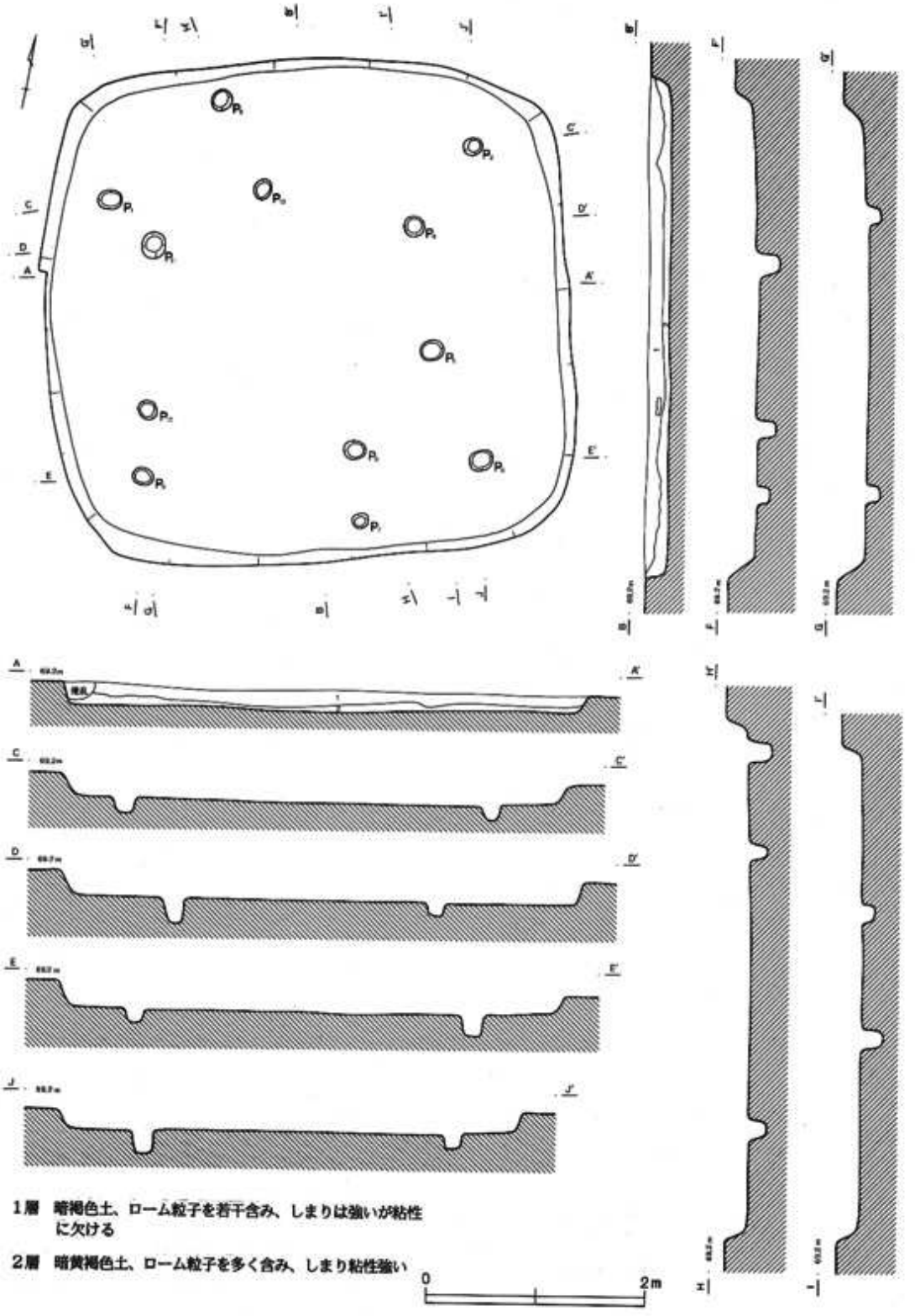
第35図　第14号住出土石器 (1)



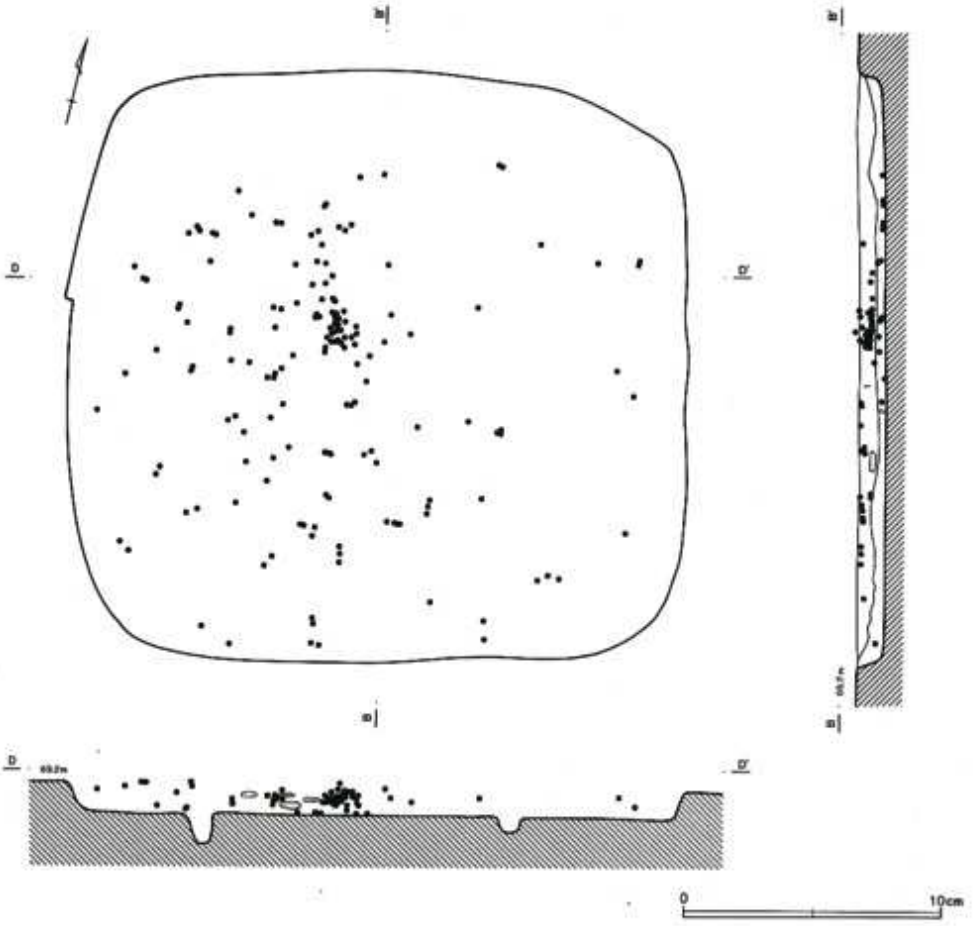
第36図　第14号住出土石器 (2)

第15号住居跡（第37図～第44図）

Ｆ２Ｊ１区に位置する。住居跡の北側約10m程に、条痕文期の土壙群が存在する。また、南側５ｍ程に第39号土壙が存在する。住居跡は南北方向に長軸をとり、北から約５度程東に振れ、ほぼ隅丸の方形を呈する。長径4.82m、短径4.60m、深さ約20cm前後を測る。床面はほぼ平坦面を形成し、壁はやや緩く立ち上がる。柱穴は12本検出され、中央部と壁際の２重に配置される様であるが、第14号住居跡程整然としていない。Pit の深さは、Ｐ１＝14cm、Ｐ２＝22cm、Ｐ３＝14cm、Ｐ４＝12cm、Ｐ５＝20cm、Ｐ６＝20cm、Ｐ７＝13cm、Ｐ８＝18cm、Ｐ９＝12cm、Ｐ10＝16cm、Ｐ11＝22cm、Ｐ12＝18cmを測る。住居跡の覆土は２層を形成し、１層はローム粒子を若干含みしまりの強い暗褐色土で、粘性の乏しい土である。２層はローム粒子を多く含み、しまりの強い黄褐色土であ



第37図　第15号住居跡



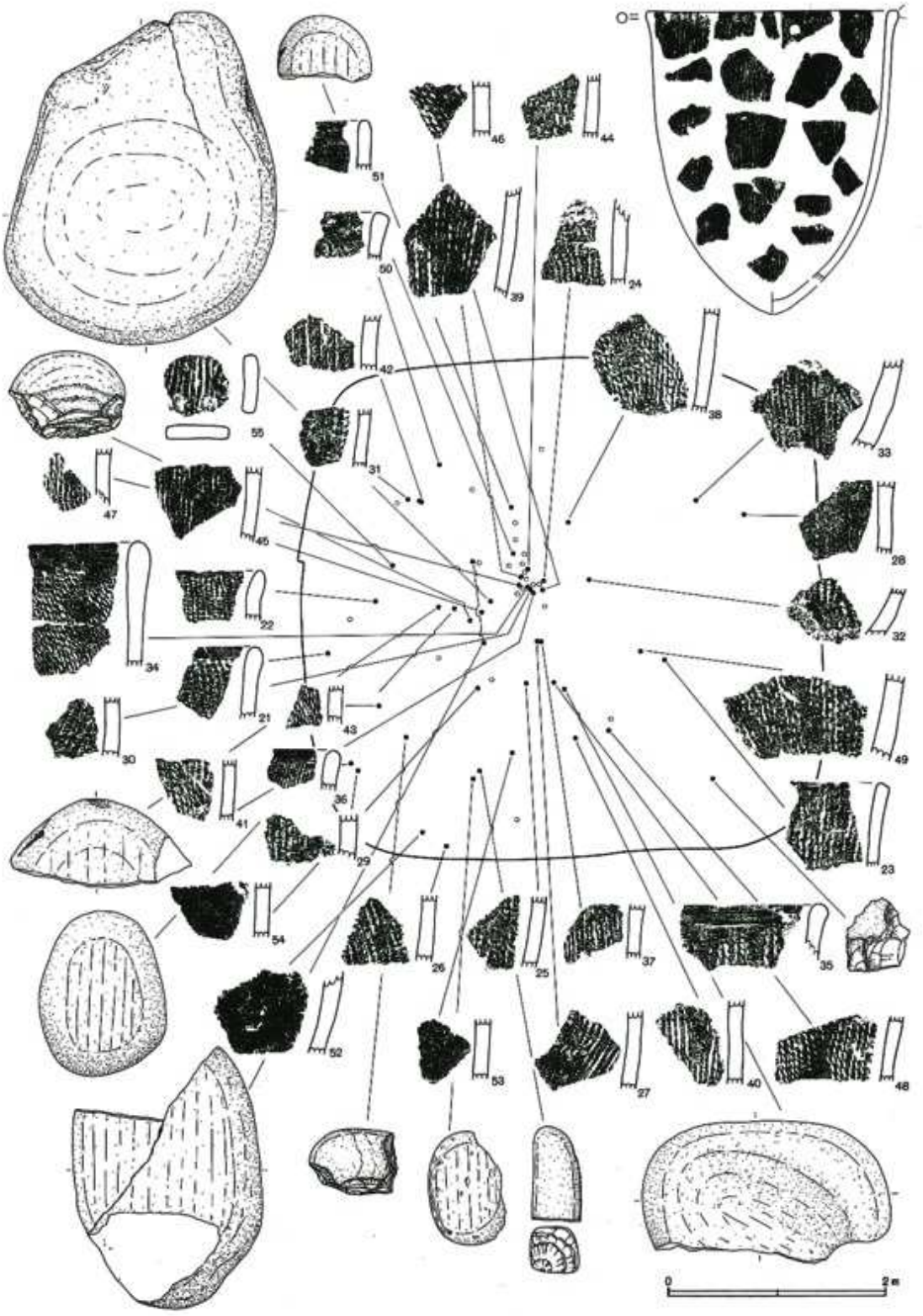
第38図　第15号住遺物分布図（1）

る。遺物は中央部から西側にかけての１層中に多く出土する傾向があり、第14号住居跡と同様中央部に石皿が廃棄されていた。

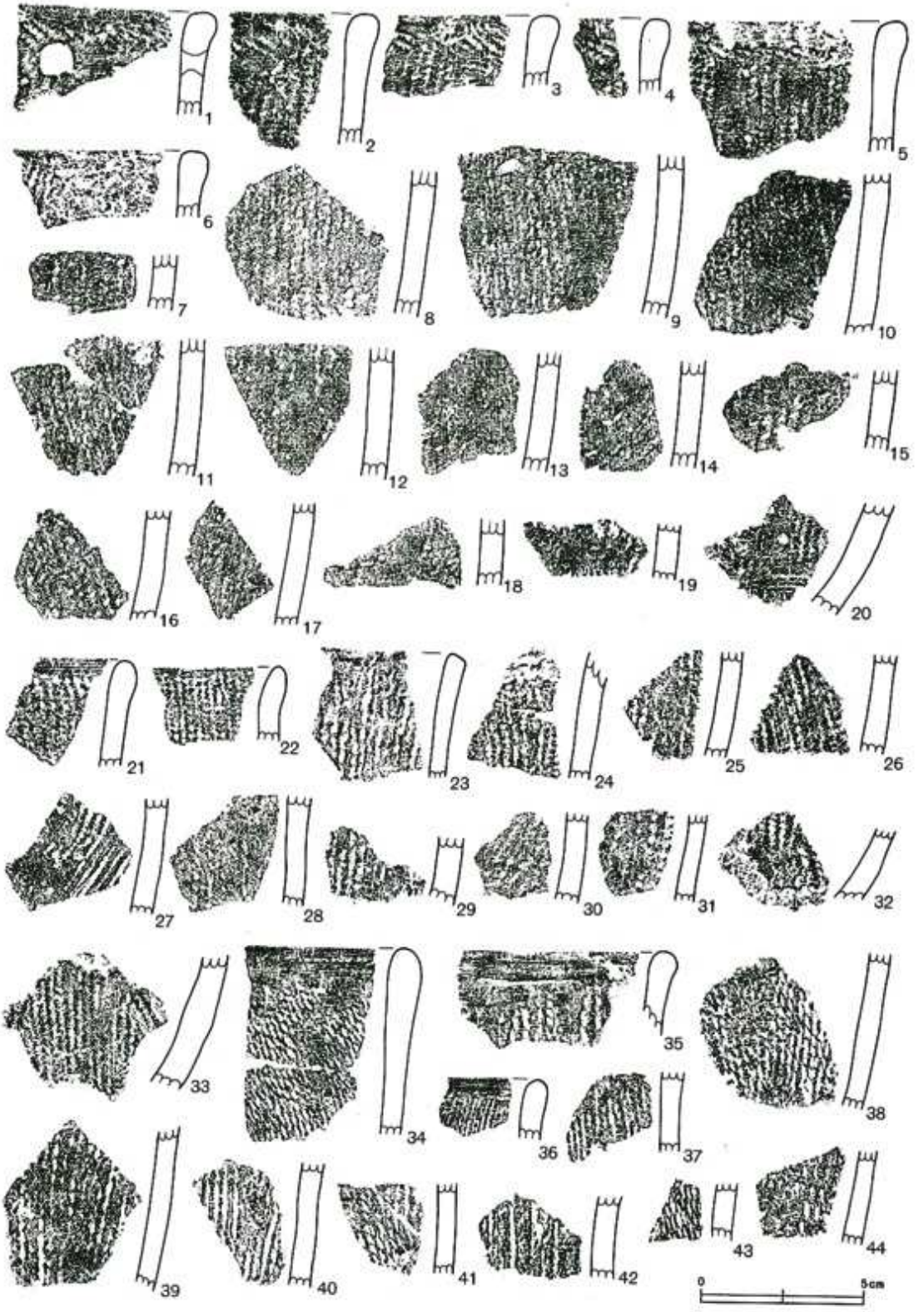
遺物は合計163点出土しており、土器（第40図、第41図）が120点、石器（第42図～第44図）が43点である。土器は全て撚糸文系土器群である。

１～20は同一個体である。推定復元図が第42図１であり、推定口径約23cmを測る。１～６は口縁部破片で、丸く肥厚する口唇部が開く器形を呈する。口唇部整形後、胴部に縄文を施文し、最後に口端部に１段横位の縄文を施文する。口端部施文は上面にかかるものではなく、外端部に施文するもので、施文幅は１cm内外である。原体はＲＬで、器面が湿っている時に施文しているため、胴部破片等では原体の圧痕が浅く、節よりも繊維痕のほうが目立っている。器壁は８mm前後を測り、比較的厚い。20の底部付近の破片では、横位の条痕状の擦痕が観察される。胎土は細砂粒を多く含むが、緻密であり、橙褐色を呈する堅緻な土器である。胴部には部分的にすすが付いている。

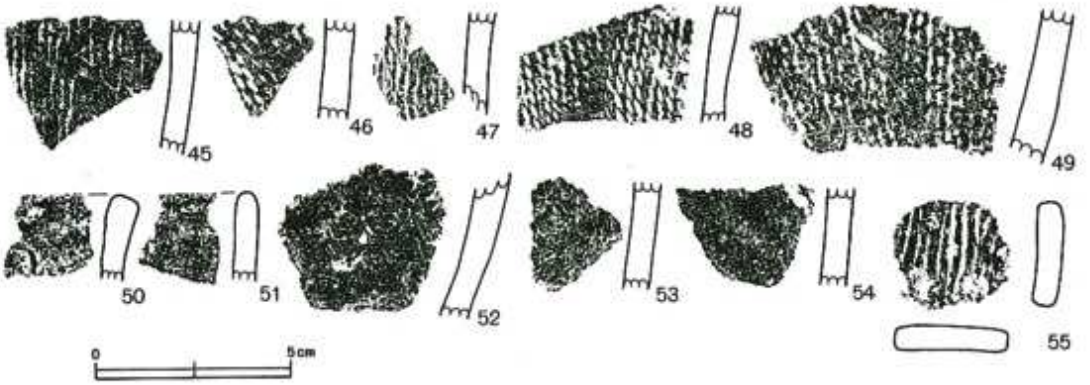
21～33は縄文施文土器である。21はやや肥厚する口唇部が開く器形を呈し、口端部から縄文を施文した後、口唇部に撫で整形を施す。細砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。原体はＲＬである。22は若干肥厚する口唇部が尖り気味に開き、口唇部整形後、口端部から縄文ＲＬを施文する。黒色の



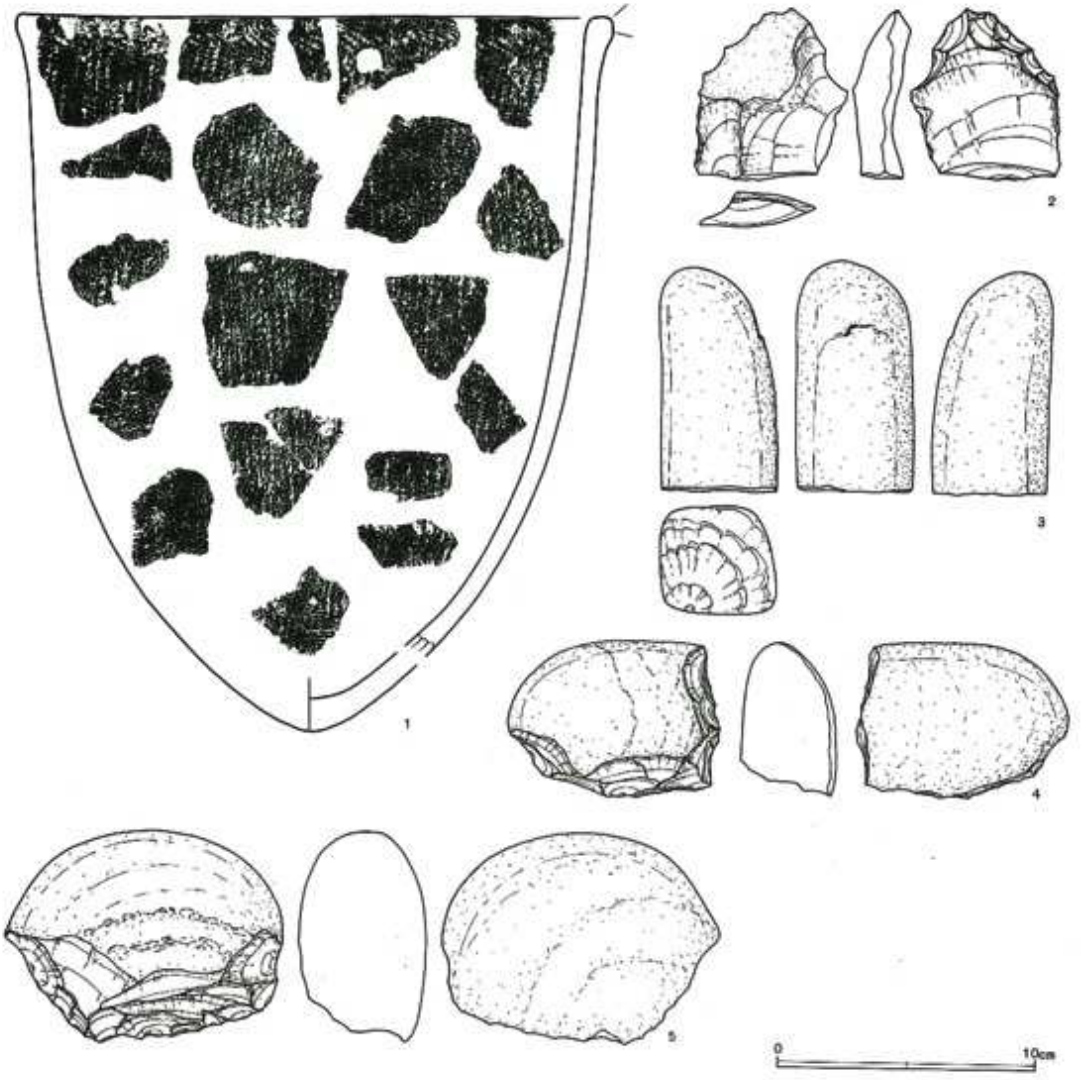
第39図　第15号住遺物分布図　(2)



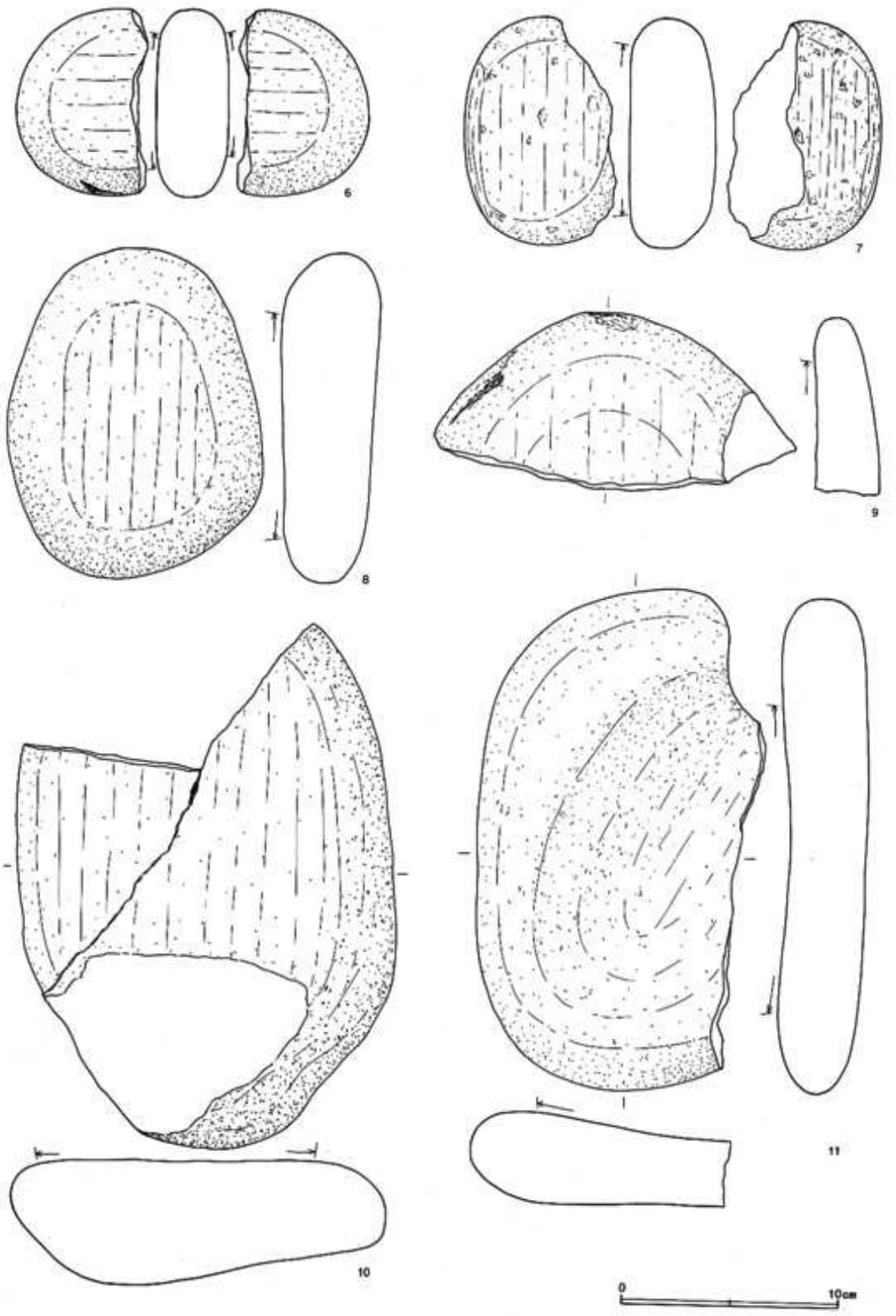
第40図　第15号住出土土器　(1)



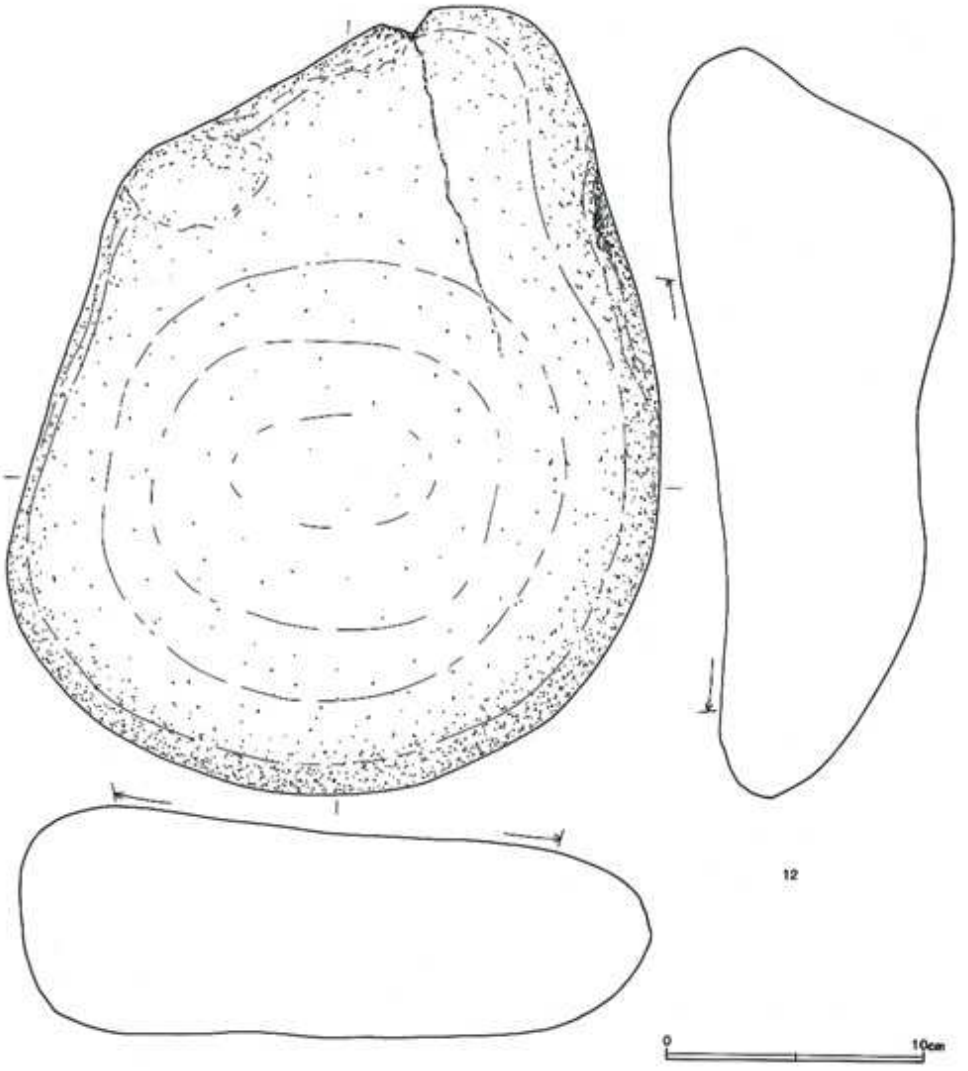
第41図　第15号住出土土器　(2)



第42図　第15号住出土石器　(1)



第43図　第15号住出土石器　(2)



第44図　第15号住出土石器　(3)

雲母粒子と暗赤褐色の粒子を多く含み、橙褐色を呈する。23は肥厚しない角頭状口唇部が開く器形を呈し、撚りの緩い縄文ＲＬが施文される。口唇上は平坦に整形されるが、口唇部整形と縄文施文の関係は不明である。口縁裏面には、横位の撫で整形が明瞭である。細砂粒、小礫を含むが堅緻である。24～33の胴部破片は縄文の施文が浅い傾向にあり、殆どが縄文の節よりも繊維痕が目立つ。原体は全てＲＬであった。

34～49は撚糸施文土器である。34は肥厚する口唇部が若干開く器形を呈し、口唇下から撚糸文を施文し、最後に口唇部全面に撫で整形を施している。原体は細密の撚糸Ｒである。砂粒をあまり含まず堅緻な土器で、暗赤褐色を呈する。35は丸頭状に肥厚する口唇部が開く器形を呈し、口唇部下に太い撚糸Ｒを施文する。白色粒子、小礫を含み、赤褐色を呈する堅緻な土器である。36は無肥厚の丸頭状口唇部がやや開く器形を呈し、細密の撚糸Ｒを施文した後に口唇部に整形を施している。

白色粒子を多く含むが緻密な土器で、橙褐色を呈する。胴部破片では細密の撚糸文は少なく、やや間隔の開いた太めの原体を施文するものが多い。原体は撚糸Rである。45～49は撚糸文を帯状に施文するものである。

50～54は無文土器で、50は角頭状で肥厚する口唇部が開き、51は丸頭状の口唇部がやや内彎状に立つ器形を呈する。52、54は胎土に暗赤褐色の粒子を多く含み、53は細砂粒を多く含む。いずれも橙褐色を呈する。

55は土製円盤である。1点のみ出土した。撚糸Rを施文する土器の胴部破片を利用しており、隅丸方形に近い円形を呈する。胎土に白色粒子、細砂粒を多く含み、橙褐色を呈する。

石器は掻器1点、礫器2点、スタンプ形石器1点、磨石6点、石皿7点が出土した。2は粘板岩製の大形剝片を利用した掻器で、縁辺部に粗い調整剝を施したものである。3はスタンプ形石器で、角柱状の礫を半割したものである。側縁からの調整剝離は施されず、1度の加撃で底面の平坦面を形成している。4、5はフォルンフェルス製の礫器である。4は円礫の2側縁に調整剝離を施すもので、剝離は片面から行われる。5は3側縁に調整剝離を施すものであるが、刃部は円形状となる。剝離は1方向からのみ行われる。

6、7は磨石である。両者とも欠損するが、6は両面を、7は片面を使用する。8～12は石皿である。いずれも自然石の平坦面を使用するが、11、12はやや深めの凹面を呈する。10は接合する破片で、擦り面は平坦面である。12は大きな磨石で、重量が10kgあまりもある。

第1号土壙（第45図、第46図1、2）

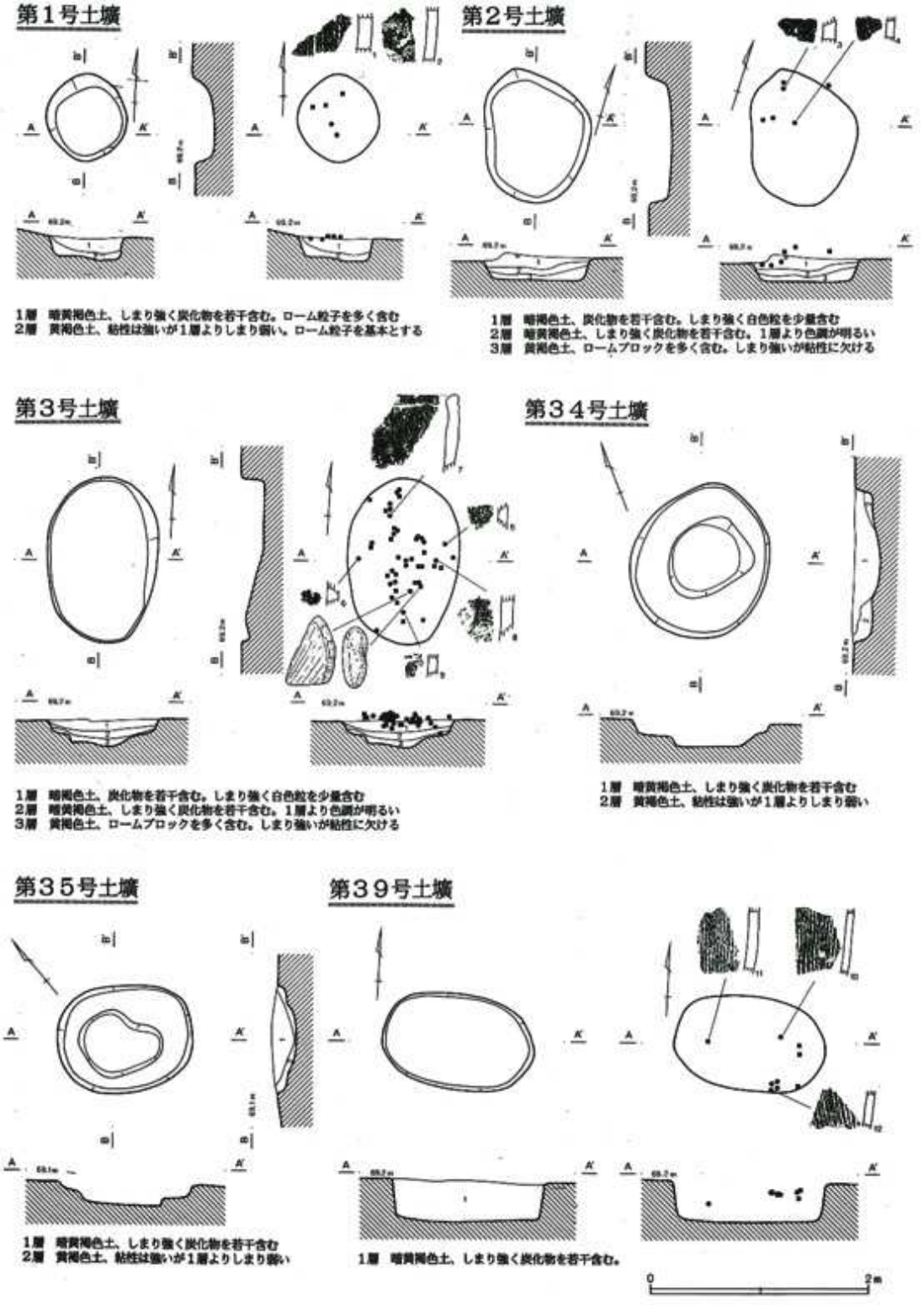
F1J1区の第9号住居跡内に位置し、住居跡よりも古い。プランは円形を呈し、長径0.80m、短径0.74m、深さ18cmを測る。覆土は1層が炭化物を若干含む暗黄褐色土、2層が粘性の強い黄褐色土である。遺物は5点出土している。1は器壁が1cm前後を測る胴部破片であり、やや太めで間隔の開く撚糸Rを施文する。胎土に石英類の砂粒と小礫等を多く含むが、器面は良く研磨されており、堅緻な土器である。色調は暗赤褐色を呈する。2は撚糸文系土器群であるが、器面が荒れているため施文の有無は判断されない。

第2号土壙（第45図、第46図3、4）

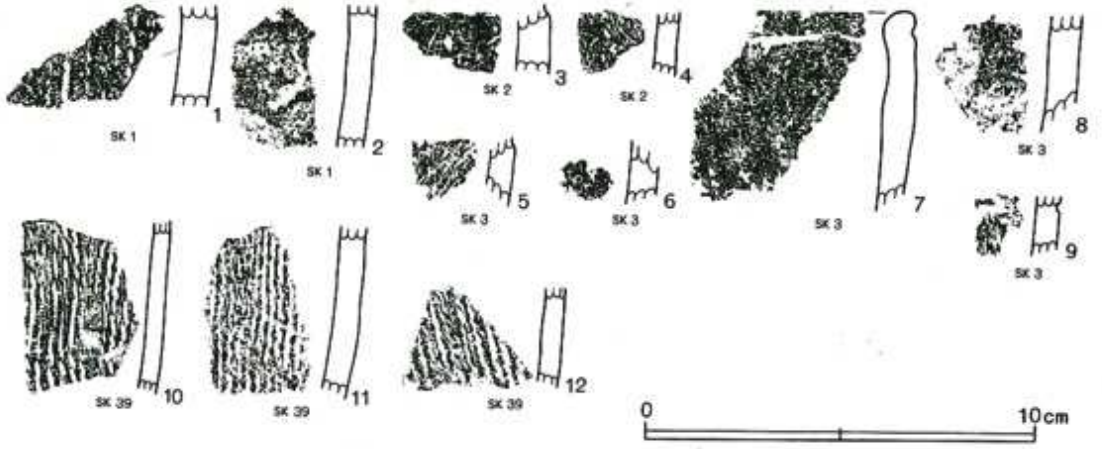
F1JI区の第8号住居跡と重複して存在し、住居跡より新しい。プランは不整楕円形を呈し、長径1.20m、短径0.90m、深さ24cmを測る。覆土は1層が白色粒子を多く含みよくしまった暗褐色土で、2層が炭化物を若干含む暗黄褐色土である。3層はロームブロックを多量に含む黄褐色土である。所属時期は東山式期である。遺物は6点出土しており、3は口縁部破片で口唇部を欠くが、口縁部に沈線文を巡らす東山式土器である。4は胴部破片である。

第3号土壙（第45図、第46図5～9、第64図16、19）

F1J1区の第8号住居跡と重複して存在し、住居跡より新しい。プランは長楕円を呈し、長径1.52m、短径1.02m、深さは最深部で約30cmを測る。覆土は第2号土壙と同様である。遺物は46点



第45図　撚糸文期の土壙



第46図　撚糸文期土壙出土土器

出土した。土器は細片が19点出土しており、全て東山式土器である。7は丸頭状を呈する口唇部が内湾して立つ器形を呈し、口唇下に継ぎ足しの浅い沈線文を施文する。9にも沈線文が一部存在している。石器は16が磨石で、19が敲石である。

第34号土壙（第45図）

Ｆ２Ｊ２区に位置する。プランは楕円形を呈し、長径1.42m、短径1.28m、深さ25cmを測る。覆土は１層がしまりの強い暗黄褐色土、２層が粘性の強い黄褐色土である。

第35号土壙（第45図）

Ｆ１Ｊ１区に位置する。プランは楕円形を呈し、長径1.26m、短径0.98m、深さ27cmを測る。覆土は１層が炭化物を若干含む暗黄褐色土、２層がしまりの強い黄褐色土である。

第39号土壙（第45図、第46図10～12）

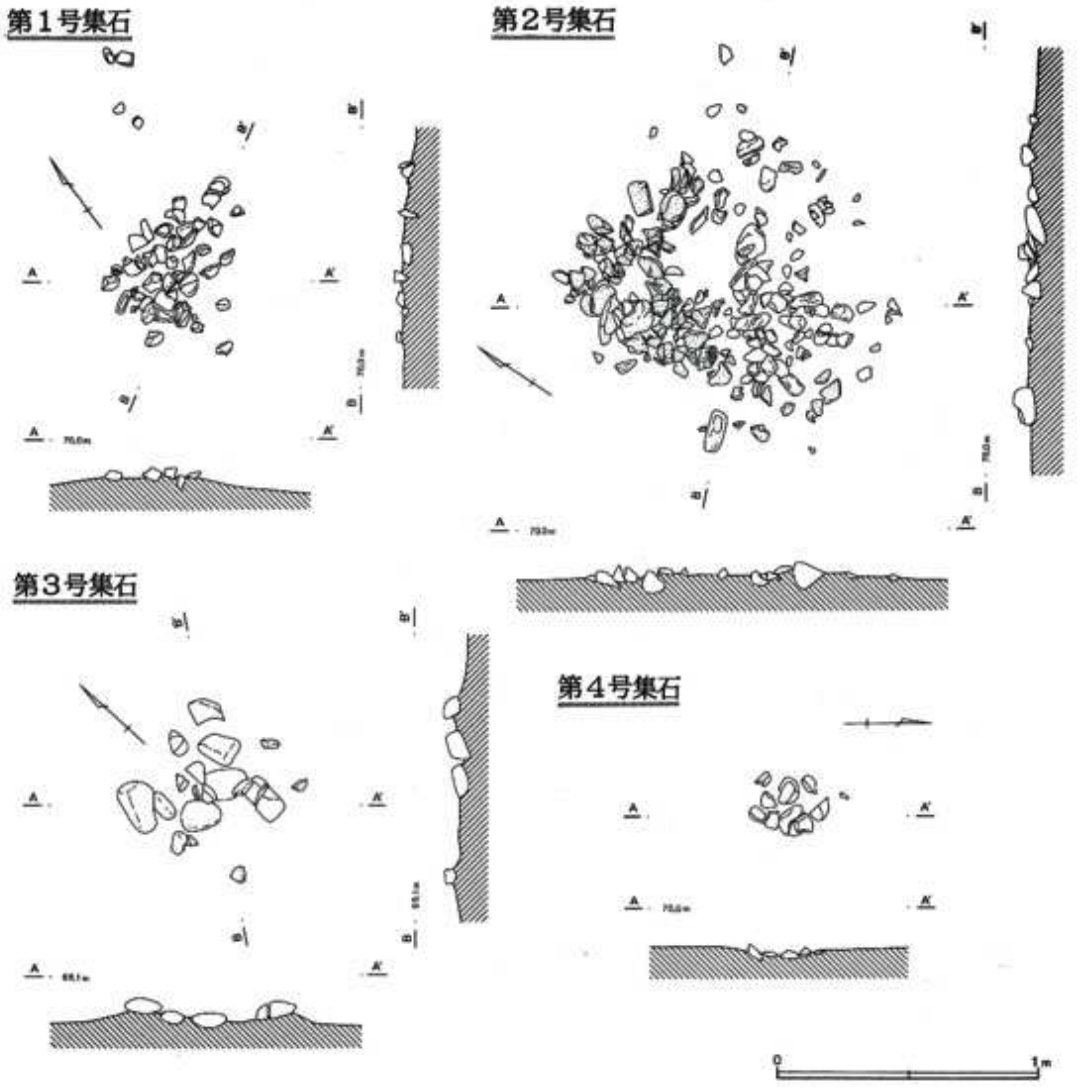
Ｆ２Ｊ１区に位置する。プランは長楕円形であり、長径1.40m、短径0.88m、深さ35cmを測る。覆土は暗黄褐色土の１層であり、遺物は９点出土している。10～12はいずれも撚糸Ｒを施文する。所属時期は稲荷台式である。

第１号集石（第47図）

Ｆ３Ｊ１区に位置する。約0.70m×0.60mの範囲に集中して存在し、102個の石で構成される。石は殆どが破砕礫で、被熱されたものが多い、土器は出土していない。

第２号集石（第47図）

Ｆ３Ｊ０区に位置する。径約1.30m程の範囲に集中して存在し、191個の被熱破砕礫で構成される。大形の礫も含むが、土器は含まれない。



第47図　撚糸文期集石遺構

第3号集石（第47図）

Ｆ０Ｊ０区に位置する。径約0.60m程の範囲に集中して存在し、19個の礫で構成され、大形礫を多く含む。大形の礫は被熱されていない。土器は出土していない。

第4号集石（第47図）

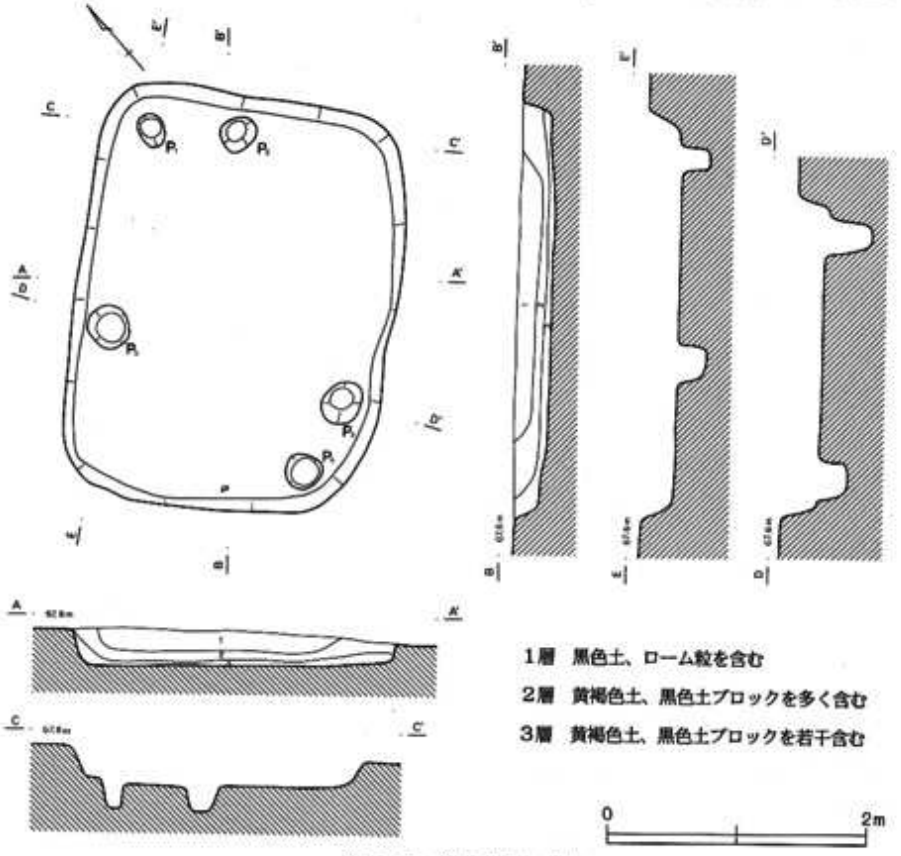
Ｆ３Ｊ１区に位置し、東に第１号集石が隣接する。径約0.30m程の範囲に集中しており、12個の礫で構成されている。礫は大形の破砕礫が多いが、被熱されているものは少ない。土器は出土していない。スタンプ形石器状の半割礫を含んでいる。

(3) 沈線文期の遺構と遺物

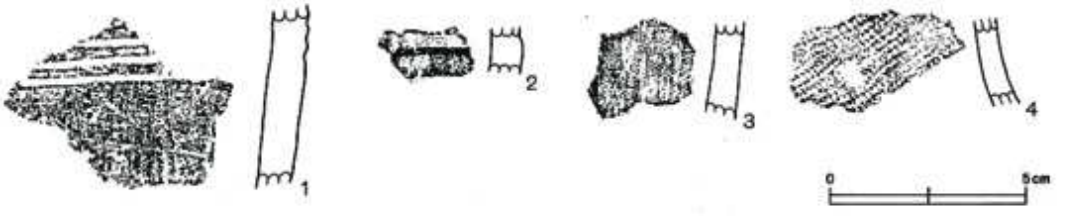
第１号住居跡（第48図、第49図）

Ｆ２Ｉ３区に位置する。周辺に縄文時代の遺構は無く、西約15m に弥生時代の第２号住居跡が存在する。南北方向に長軸をとり、長径3.20m、短径2.48m、深さ約30cmを測る長方形を呈する。床面は平坦面を呈し、壁はやや緩く立ち上がる。柱穴は５本検出され、Ｐ１＝22cm、Ｐ２＝20cm、Ｐ３＝34cm、Ｐ４＝12cm、Ｐ５＝22cmを測る。覆土は１層が黒色土、２層が黒色土ブロックを含む黄褐色土、３層がローム粒子を多く含む黄褐色土である。所属時期は早期の田戸下層式期である。

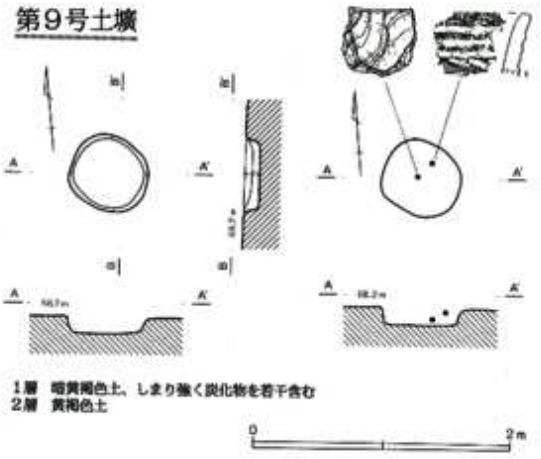
遺物は若干出土しており、１、２が床面から出土している。１はよく研磨された器壁に横位の沈



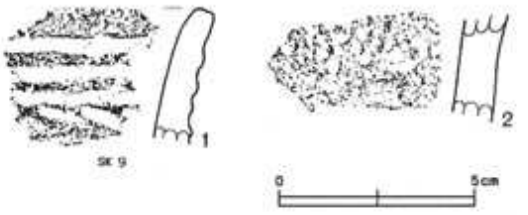
第48図　第１号住居跡



第49図　第１号住出土土器



第50図　第９号土壙

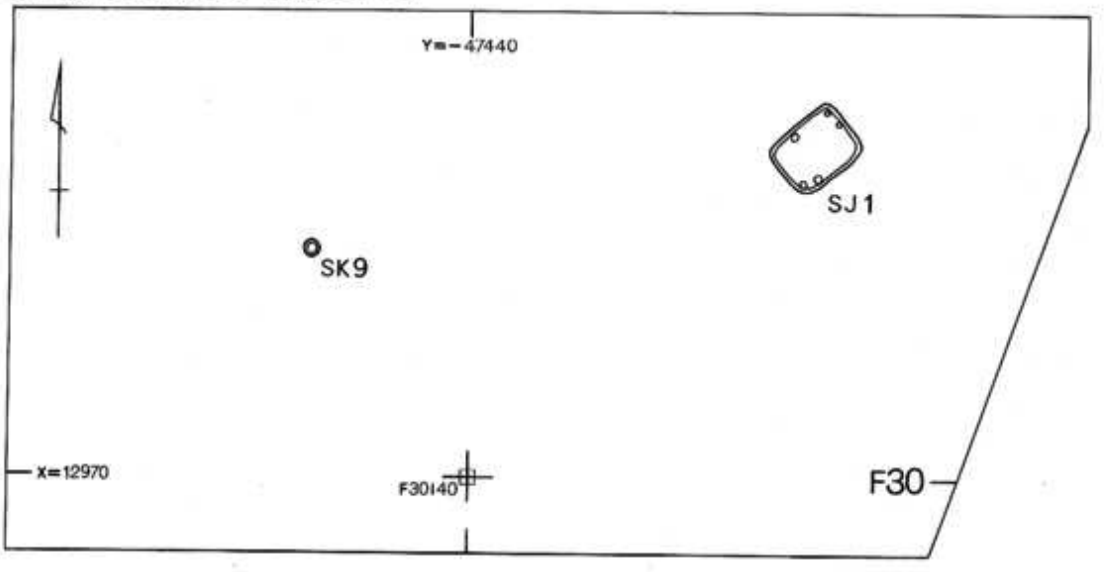


第51図　第９号土壙出土土器

線文を３本施文する。２は太い凹線状の沈線文を施文するものである。両者とも赤褐色を呈し、胎土は緻密で、堅緻な土器である。３は無文土器であるが、同時期のものである。いずれも田戸下層式に比定される。４は混入した弥生時代の吉ヶ谷式土器である。

第９号土壙（第50図、第51図、第63図７）

Ｆ２Ｉ４区に位置する。第２号住居跡の北壁に隣接して存在する。プランはほぼ円形を呈し、長径0.64m、短径0.60m、深さ約15cmを測る。覆土は１層が炭化物を含む暗黄褐色土、２層がローム粒子を多く含む黄褐色土である。所属時期は田戸下層式期である。遺物は若干出土しており、１は角頭状の口唇部が開き、継ぎ足し状の凹線文を横位に施文する田戸下層式土器である。２は単節縄文ＲＬを施文し、時期は不詳である。第63図７は打製石斧であり、頭部側の半分を欠損する。刃部は片側からの剥離のみで整形される。

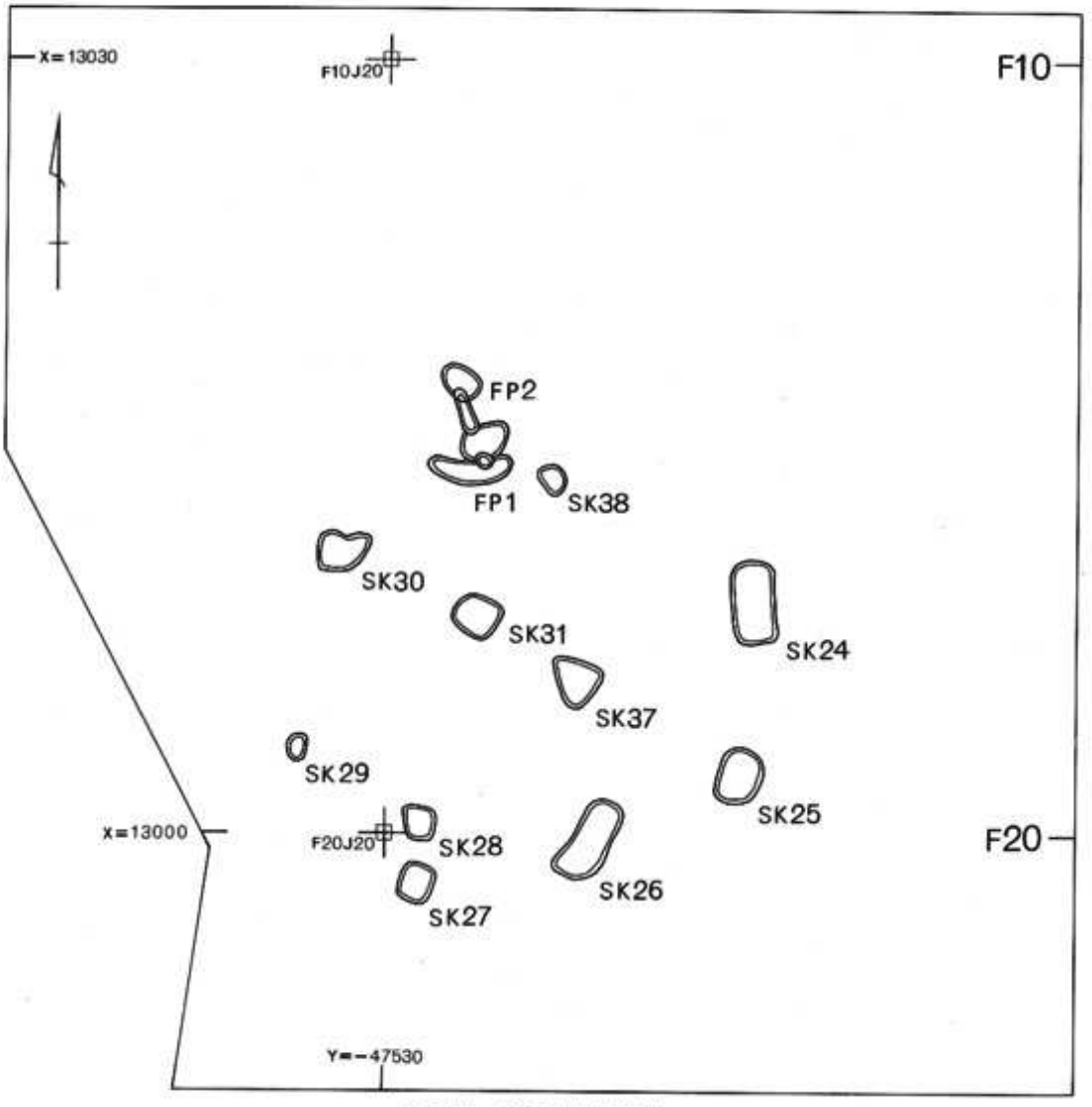


第52図　沈線文期の遺構

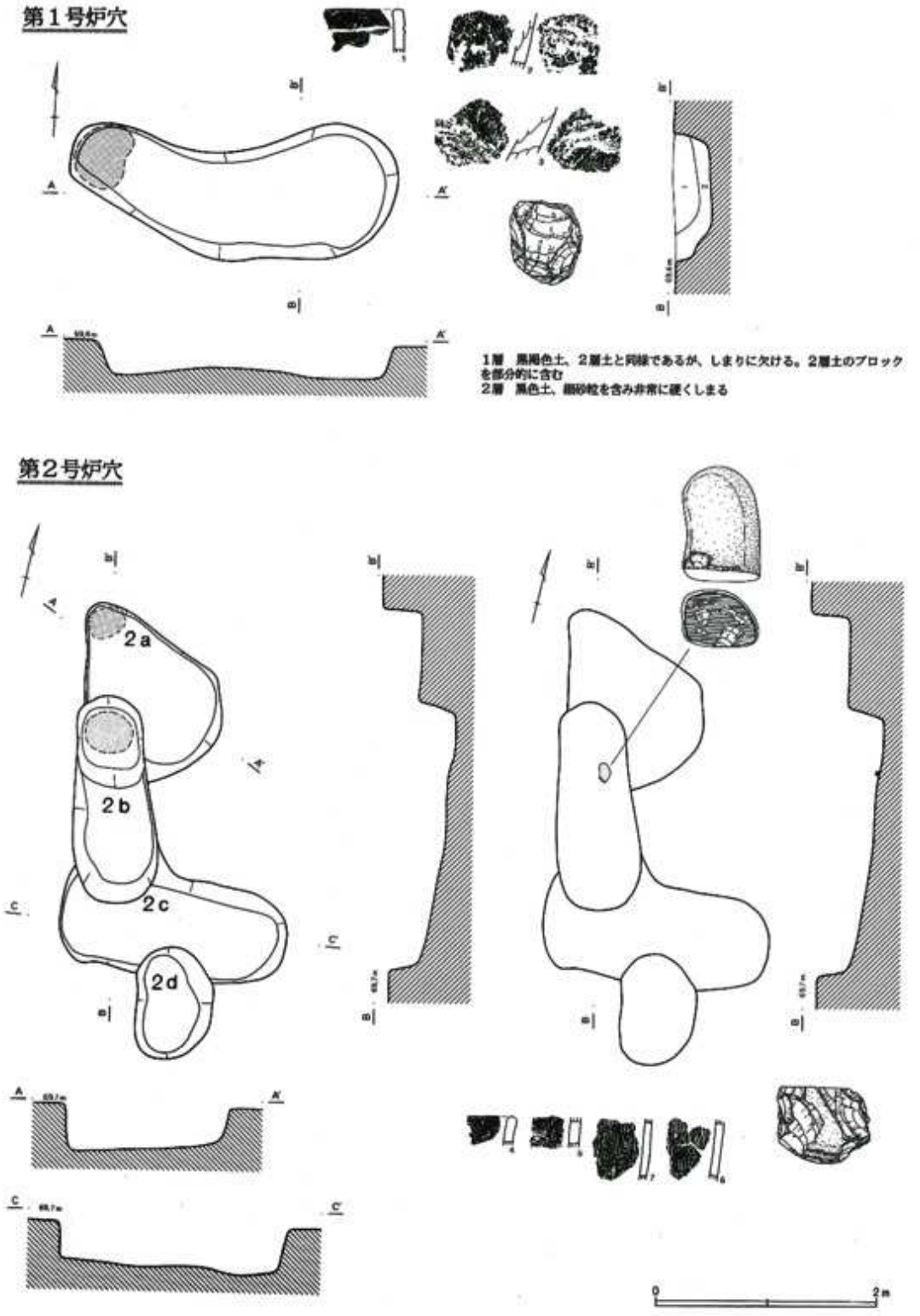
(4) 条痕文期の遺構と遺物

第1号炉穴（第54図、第60図1～3、第63図10）

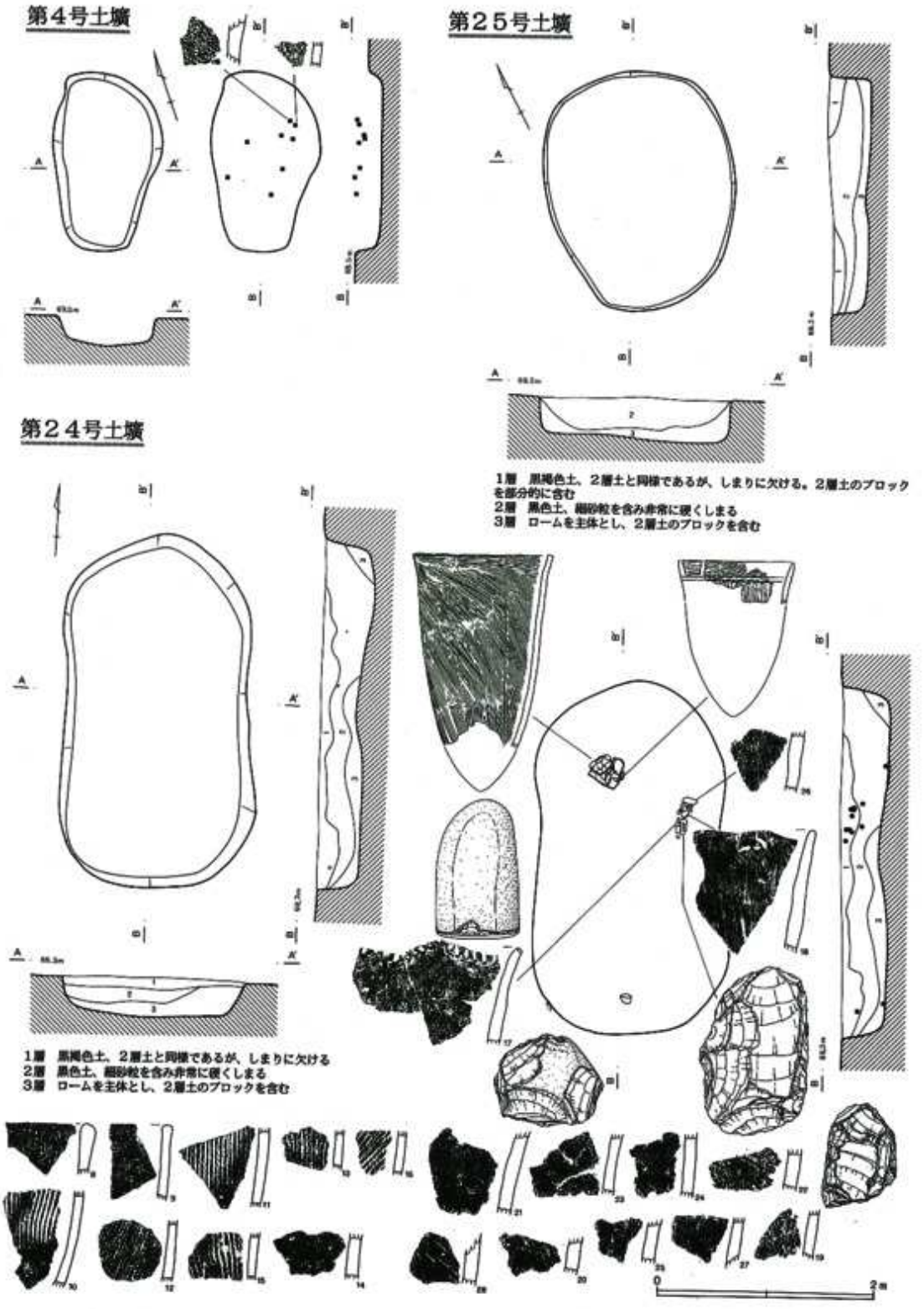
F1J1区に位置する。第2号炉穴と重複するが、第1号炉穴の方が古い。プランは東西に細長い楕円形を呈し、長軸3.00m、短径1.00m、深さ約36cmを測る。西壁部に炉床があり、やや深く掘り込まれ、よく焼けている。覆土は1層が非常に硬い黒色土のブロックを含む黒褐色土、2層が細砂粒を含み非常に硬くしまる黒色土で、炭化物、焼土粒子を若干含む。出土土器は第60図1～3である。1は角頭状の口唇部が立つ器形で、口縁部に沈線文を巡らす東山式土器であり、混入品である。2は胴部、3は底部近くの破片で、粗く条痕文を施すもので、2は繊維と砂粒を多く含み、3は白色粒子を多く含む。第63図10は片面に自然面を残す礫器で、周縁部から調整隔離を施し丸い刃部を形成する。



第53図　条痕文期の遺構



第54図　条痕文期の炉穴



第55図　条痕文期の土壙　(1)